

市道渡橋平野線道路改良工事に伴う

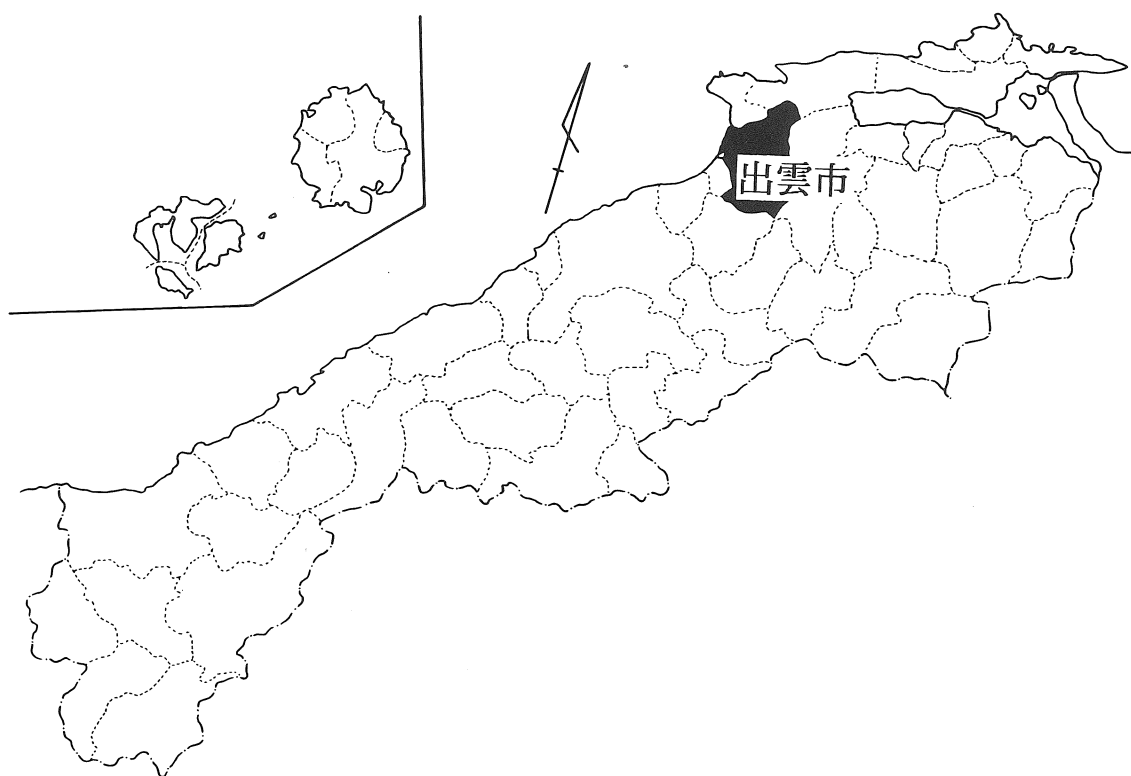
小山遺跡第2地点発掘調査報告書

1998年12月

出雲市教育委員会

市道渡橋平野線道路改良工事に伴う

小山遺跡第2地点発掘調査報告書



1998年12月

出雲市教育委員会

はじめに

出雲市四絡地区は、矢野遺跡・小山遺跡などの遺跡の密集地帯として知られています。近年になり付近の調査も大幅に増え、古代の四絡地区が少しずつ復原できるようになりました。

このたび、出雲市の市道渡橋平野線道路改良工事に伴って発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、幅 70 mにも及ぶ河川の遺構や、弥生時代の溝が確認されたほか、地質学的にも貴重なデータを得ることができました。また近世の遺構では、屋敷地遺構の可能性のある遺構が確認されており、貴重な史料となっています。

こうした調査の成果は、小山遺跡の実態を究明するうえで、新しい展望がひらけたものと確信しております。

本書が、郷土の文化財保護や研究の資料として広く活用されることを期待するとともに、発掘調査にあたり、御指導・御協力を賜りました関係者の皆様に心から御礼申し上げます。

平成 10 年 (1998) 12 月

出雲市教育委員会

教育長 多 久

博

例 言

1. 本書は、出雲市道路河川課の委託を受け、出雲市教育委員会が平成8年度に実施した小山遺跡第2地点発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、下記の期間において実施した。
平成8年8月19日～平成9年3月27日
3. 発掘調査を実施した地番は、次の通りである。
出雲市小山町602番地ほか
4. 調査は次の組織で実施した。
〔調査指導者〕 岩橋孝典（島根県教育委員会文化財課主事）
〔事務局〕 後藤政司（文化振興課長）
〔調査員〕 遠藤正樹（文化振興課主事）
〔調査補助員〕 吹野初子（文化振興課臨時職員）
5. 調査の実施にあたり、次の方々から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略）
田中義昭（島根大学法文学部教授）、西尾克己、岩橋孝典、目次謙一、池淵俊一、間野大丞（以上島根県教育委員会）、飯塚康行（松江市教育委員会）、瀬古諒子、江川幸子（以上（財）松江市教育文化振興事業団）、原 俊二（平田市教育委員会）、遠藤浩巳（大田市教育委員会）、古泉 弘（東京都教育委員会）、笹生 衛（千葉県教育委員会）、植木 久（大阪市教育委員会）、白神典之（堺市立埋蔵文化財センター）、坂本 彰（（財）横浜市ふるさと歴史財団）、村上伸之（有田町歴史民俗資料館）、盛 峰雄（伊万里市教育委員会）、草場誠司（唐津市教育委員会）、梶原慎二（嬉野町教育委員会）、吉永陽三、鈴木由紀夫、家田淳一、永渕友子（以上九州陶磁文化館）、光江 章（袖ヶ浦市教育委員会）、大野康男（（財）山武郡市文化財センター）、平川裕子（（財）千葉県文化財センター）、菊池照夫（東京都立城北高等学校）、中村唯史、渡辺正巳（以上島根大学汽水域研究センター客員研究員）、福岡琇士（湯町窯）、高橋容子、飯塚夕起（以上出雲市立図書館）、土井豆徹（出雲市役所建築課）、川上 稔、岸 道三、松山智弘、羽木伸幸（以上出雲市教育委員会）、岡 美登、成相吉郎、鎌田稔造
6. 本書で使用した遺構略号は次の通りである。
S A－柵列、S B－建物跡、S D－溝状遺構、S E－井戸、S K－土壙、S P－土壙墓、S S－集石遺構、S X－性格不明遺構、P－柱穴・小穴
7. 本書で使用した方位は磁北を示す。
8. 本遺跡の出土遺物及び実測図、写真は出雲市教育委員会で保管している。
9. 現地における遺構等の実測は遠藤、川上、岸、松山、吹野、和田真理子、渡部育子が行った。
10. 図面・遺物の整理は、遠藤恭子、太田和子、永田節子、鶴口令子、石川桂子、荒木恵理子、森山治代・河井栄子・矢田愛子が行った。
11. 出土遺物の実測は、遠藤、高橋智也、片倉愛美、伊藤 寿、富田裕子、今岡ひとみ、鬼村奈津子、春木崇志、遠藤恭子、荒木恵理子が行い、拓本は遠藤恭、荒木が行った。
12. 図面の浄書は、遠藤、遠藤恭、荒木が行った。
13. 本書の執筆・編集は、遠藤が行った。
14. ボーリング調査及び地質分析については、川崎地質株式会社へ委託し、これを行った。また地質分析の結果については、同社の渡辺正巳氏に玉稿を賜った。またこの分析結果を踏まえて、中村唯史氏にも玉稿を賜った。
15. 石材鑑定については、羽木がこれを行った。
16. 調査にあたっては、出雲市道路河川課の多大な協力を得た。
17. 発掘調査にあたっては、次の方々に従事して頂いた。
片山 修、米山清司、吾郷要子、奥田広信、浜村富江、森脇裕二、富田 勉、和田真理子、曾田早苗、金山次次郎、石尾節江、岩谷陽太郎、渡部育子、鎌田 操、鎌田静子、原 忠治、鍋野良雄、梶谷 強

本文目次

はじめに

例言

本文目次

第1章 調査にいたる経緯	1
第2章 周辺の歴史的環境	2
第3章 遺跡の概要	6
1. 四絡遺跡群について	6
2. 小山遺跡について	6
第4章 北側調査区の調査	8
1. 北側調査区の概要	8
2. 遺構と遺物	12
第5章 南側調査区の調査	21
1. 南側調査区の概要	21
2. 遺構と遺物	24
第6章 考察	64
出土遺物観察表（土器）	66
出土遺物観察表（その他の遺物）	75
附 編	77
(1) 小山遺跡周辺の古環境 渡辺正巳（川崎地質株式会社）	77
(2) 小山遺跡周辺の古地理に関するコメント 中村唯史（島根大学汽水域研究センター客員研究員）	91
図 版	図版1～図版15

第1章 調査に至る経緯

平成7年（1995）11月28日、出雲市道路河川課より市道渡橋平野線道路改良工事予定地（市単部分）における埋蔵文化財の有無について照会を受けた。事業予定地は、周知の遺跡である小山遺跡の範囲内となっているため、試掘調査によって遺跡の有無を確認することとした。

試掘調査は同年12月14日に実施した。その結果、事業予定地内に設定した2箇所のトレンチからは、遺構・遺物は全く確認されなかった。

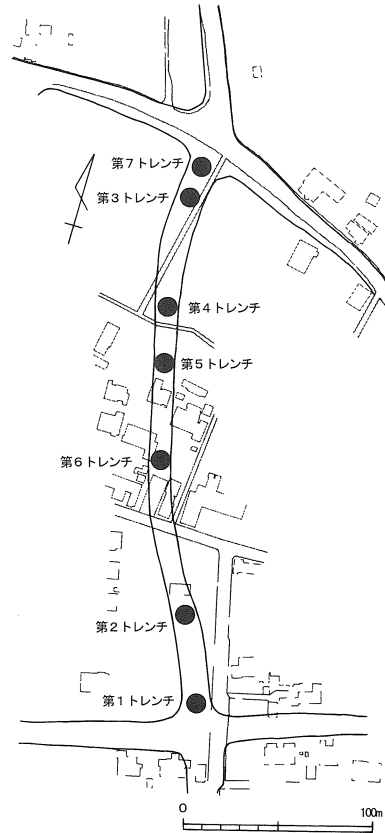
その後、平成8年（1996）2月8日、出雲市道路河川課より市道渡橋平野線道路改良工事予定地（補助部分）における埋蔵文化財の有無について再び照会を受けた。

試掘調査は同年2月26日から2日間実施した。その結果、全トレンチから遺物が出土し、第6・7トレンチからはピット状の遺構や溝と考えられる遺構を検出した。

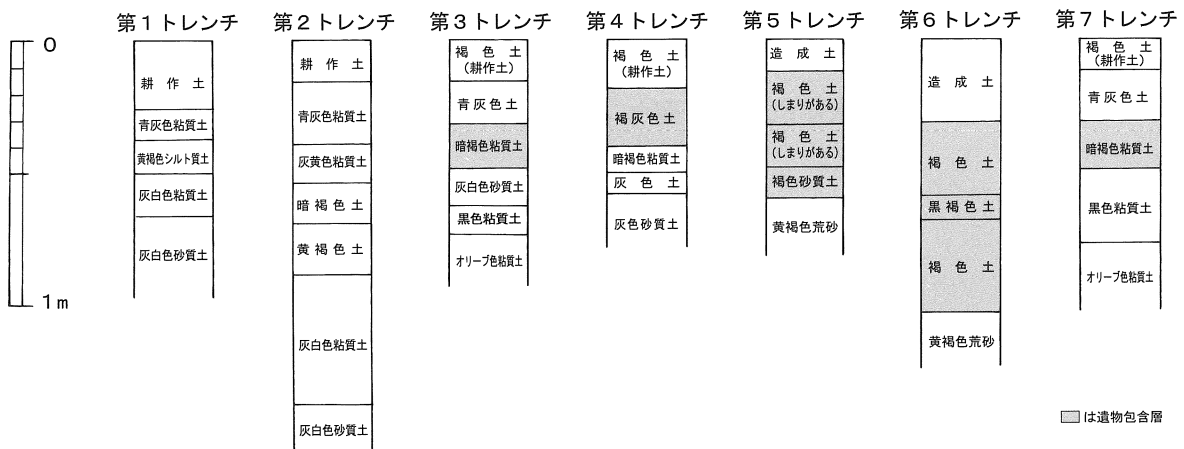
試掘調査の結果から協議を重ね、遺構・遺物が確認された区域2,400 m²について、平成8年度後半に発掘調査することで合意した。

発掘調査に至る手続きについては、まず、事業者である出雲市道路河川課から同年6月14日付で埋蔵文化財発掘調査の通知（同法第57条の3）が提出された。出雲市教育委員会ではこれを受け、埋蔵文化財発掘調査の通知（同法第98条の2）を同年7月15日付で文化庁長官に提出している。

発掘調査は同年8月19日に着手し、翌平成9年（1997）3月27日に終了した。



第1図 試掘トレンチ位置図



第2図 試掘トレンチ土層柱状図

第2章 周辺の歴史的環境

山陰有数の穀倉地帯として知られる出雲平野は、北山山脈と中国山脈に挟まれた沖積平野である。従来、出雲平野の陸地化が開始されたのは縄文時代晩期頃と考えられていたが、出雲平野中央部にあたる小山遺跡(1)で実施されたボーリング調査では、4800y. B. P. 頃に近辺の水位が±0 mであったとのデータが得られており⁽¹⁾、今後の検討課題となっている。現在の地形に定着したのは、網状河川あった斐伊川が江戸時代に河川改修され、宍道湖に注ぐようになってからである。

縄文時代の出雲平野は、縄文海進によりその大部分が海面下であったと考えられ、遺跡も平野縁辺部に多く分布している。

出雲平野で確認されている最古の遺跡は、縄文早期初頭の菱根遺跡(25)で、平野北辺に位置している。また縄文早期末の上長浜貝塚(10)が西の砂丘下にあるが、現在のところ、これらに続く遺跡は確認されていない。

縄文中期には、小山遺跡のボーリングのデータから、出雲平野中央部に既に陸地化していた地域もあった可能性がある。

縄文後期・晩期になると、平野北辺の出雲大社境内遺跡・原山遺跡(22)や平野南辺の三田谷I遺跡(74)が知られている。平野中央部の矢野遺跡(7)からも少量の遺物が確認されており⁽²⁾、ボーリング調査の結果から平野中央部にも陸地化した地域があった可能性がある。

弥生時代になると、矢野遺跡から前期の遺物が確認されているが⁽³⁾、遺跡が爆発的に増えるのは中期以降である。

弥生中期には、沖積平野の旧自然堤防上に矢野遺跡・天神遺跡(84)・知井宮多聞院遺跡(116)・古志本郷遺跡(103)・正蓮寺周辺遺跡(108)・田畑遺跡(105)などの大規模集落が占有するようになり、出雲平野に居住地域が拡大した。

一方、知井宮多聞院遺跡の貝塚では、弥生後期の混貝層から相当数の海水性貝類が確認されており、出雲平野は入海の様相を呈していたようである⁽⁴⁾。同じ頃、斐伊川沿いの西谷丘陵に西谷墳墓群(47)が突如出現する。このうち西谷3号墓は、突出部を含めると一片60 mもある四隅突出型墳丘墓で、島根大学を中心とした発掘調査により吉備系の特殊土器が確認されている⁽⁵⁾。その後入海は閉鎖され潟湖を形成したと見られ、多聞院遺跡の貝塚から古式土師器とともに淡水性ヤマトシジミが確認されている⁽⁶⁾。

古墳時代初頭には斐伊川・神戸川流域の矢野遺跡や古志本郷遺跡といった集落のように弥生時代から継続する集落が多いが、神西湖周辺の低丘陵上にも集落があったと考えられている⁽⁷⁾。

古墳前期になると、平野北辺に大寺古墳、西辺に山地古墳(137)が造られる。しかしこれらの古墳はいずれも古墳前期後半と推定されており、西谷墳墓群との間に大きな空白期間が見られることから、出雲平野における首長系譜は一時断絶したと考えられている⁽⁸⁾。

古墳中期の古墳・遺跡はあまり多くないが、北光寺古墳・三田谷I遺跡などが知られている。斐伊川・神戸川流域に位置する三田谷I遺跡では、竪穴式住居跡が確認されており、覆土や包含層から多量の竈片が出土している⁽⁹⁾。斐伊川・神戸川流域の低地では、この時期の集落跡の確認例が

少なく、貴重な史料と言える。

古墳後期になると、古墳の数が爆発的に増え、今市大念寺古墳（63）・上塩冶築山古墳（67）・地藏山古墳（79）と有力首長のもので推定される大規模な横穴式石室を有する古墳が連続して築造される。

古墳後期後半から終末期に入ると、横穴式石室を主体部とする古墳に代わって横穴墓が増加する。なかでも 100 穴以上の横穴墓が確認されている神門横穴墓群（130. 131. 132. 134. 135）や 171 穴の横穴墓が確認されている上塩冶横穴墓群（68）は、全国的にも最大規模のものである⁽¹⁰⁾。しかしこれらの被葬者を支える基盤となったであろう大集落遺跡は、現在のところ確認されていない。

歴史時代になると仏教が流行し、神門寺境内廃寺（81）・長者原廃寺（54）などの私寺が造寺される。また仏教文化とともに火葬の風習も大陸から伝わり、出雲平野においても朝山古墓（91）・小坂古墳（94）の石櫃の例に見られるように古代の火葬墓が確認されている。

中世の遺跡では、14 世紀から 15 世紀にかけての屋敷地が確認された矢野遺跡や、朝山氏惣領家の居館跡である可能性が指摘されている蔵小路西遺跡（4）などがある⁽¹¹⁾。また山城も多く造られ、出雲西部の要衝地向山城（58）・大井谷城（70）・半分城（78）などが築城された。

近世になると、松江藩の土地政策により斐伊川の河川改修が実施された。網状河川であった斐伊川は、この改修により一本の大河川に統合され、出雲平野の新田開発が進むことになる。斐伊川西岸には来原岩樋（48）や間府岩樋（53）が開削され、物資輸送や農業用水の確保に利用されていた。このような松江藩の水利政策は、出雲平野を山陰有数の穀倉地帯とした⁽¹²⁾。

註（ 1 ） 渡辺正巳・遠藤正樹 「出雲平野中央部小山遺跡における地質層序と古環境」『LAGUNA 汽水域研究No.5』 1998 年

（ 2 ） 川上 稔・松山智弘編 『出雲健康公園整備プロジェクト事業に伴う矢野遺跡第 2 地点発掘調査報告書』 1991 年

（ 3 ） 註（ 2 ）に同じ

（ 4 ） 川上 稔 「出雲平野の形成」『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』 1980 年

（ 5 ） 出雲考古学研究会編 『古代の出雲を考える 2 - 西谷墳墓群 -』 1980 年

（ 6 ） 註（ 4 ）に同じ

（ 7 ） 出雲市教育委員会編 『遺跡が語る古代の出雲 - 出雲平野の遺跡を中心として -』 1997 年

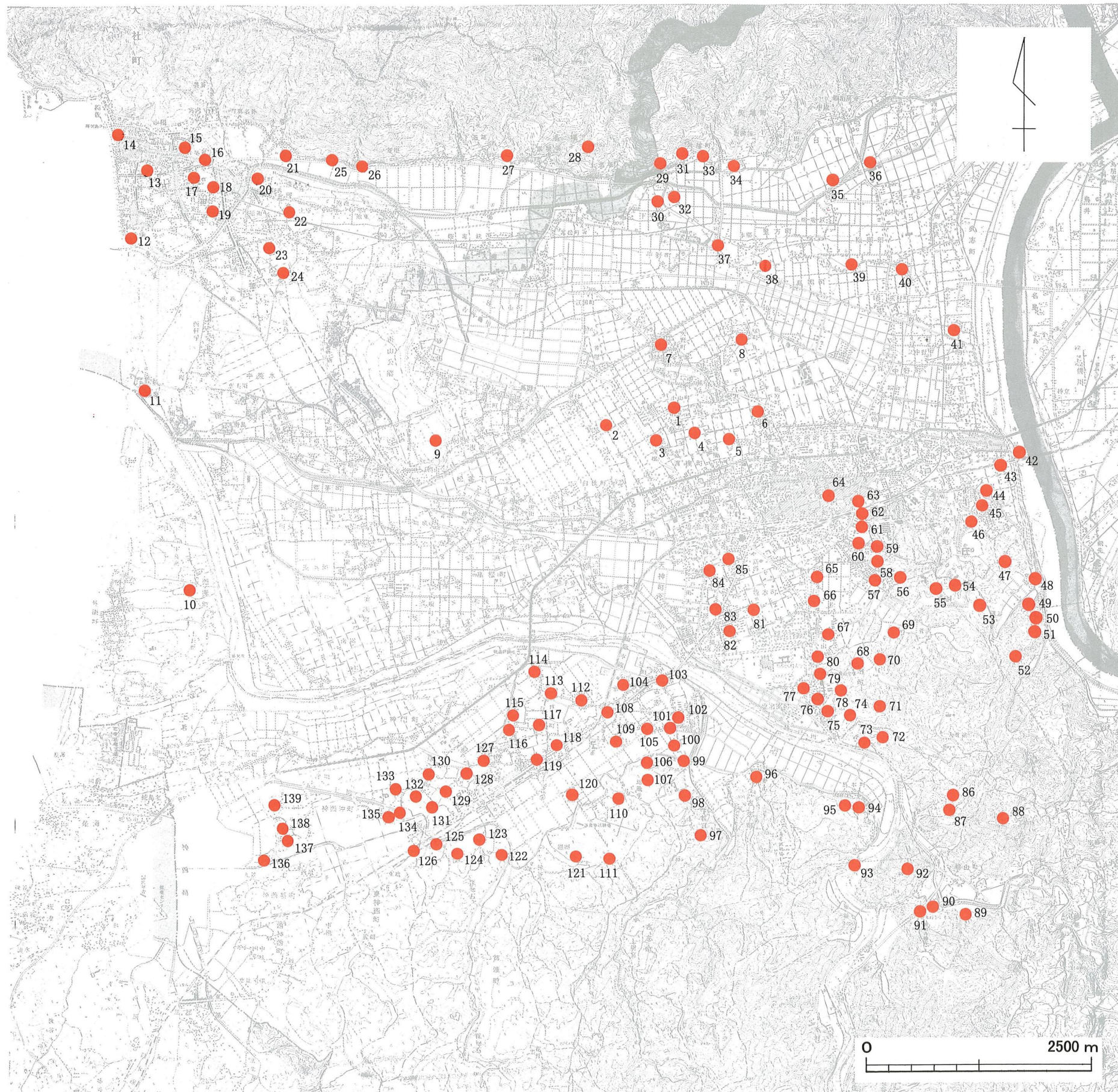
（ 8 ） 註（ 7 ）に同じ

（ 9 ） 島根県教育委員会編 『島根県教育庁文化財課埋蔵文化財調査センター年報 V』 1997 年

（ 10 ） 松山智弘・遠藤正樹編 『上塩冶横穴墓群第 3 4 支群発掘調査報告書』 1998 年

（ 11 ） 註（ 7 ）に同じ

（ 12 ） 美田 実 「土工遺蹟」『出雲市の文化財 第 1 集』 1956 年



第3図 周辺の遺跡

No.	遺跡名	種別	No.	遺跡名	種別
1	小山遺跡	集落跡	75	半分瓦窯跡	窯跡
2	白枝荒神遺跡	集落跡	76	半分古墳	墳地
3	渡橋沖遺跡	集落跡	77	半分遺跡	散地
4	蔵小路西遺跡	館跡	78	出雲工業西遺跡	散地
5	渡橋遺跡	散地	79	半分城跡	城跡
6	姫原西遺跡	集落跡	80	地蔵山古墳	墳地
7	矢野遺跡	集落跡	81	池田遺跡	散地
8	大塚遺跡	集落跡	82	寿昌寺遺跡	散地
9	大塚古墳	古墳	83	寿昌寺西遺跡	散地
10	馬見塚跡	古墳	84	神門寺境内廃寺	散地
11	上長浜貝塚	貝塚	85	神門寺付近遺跡	散地
12	湊原台場跡	台場跡	86	塩冶小学校付近遺跡	散地
13	赤塚台場跡	台場跡	87	弓原遺跡	散地
14	誓願寺古墳	古墳	88	天原遺跡	集落跡
15	飯ノ宮台場跡	台場跡	89	高西遺跡	散地
16	越峠焼窯跡	窯跡	90	伝塩冶氏貫跡	集落跡
17	乘光寺跡	寺院跡	91	大坊経塚	塚跡
18	鹿蔵山経塚	経塚跡	92	大坊古墳	墳跡
19	鹿蔵山砦跡	城跡	93	唐墨城跡	城跡
20	鹿蔵山遺跡	貝塚跡	94	荒神廻遺跡	墓跡
21	乙見焼窯跡	窯跡	95	祝廻横穴墓群	横穴墓群
22	修理免本郷遺跡	散地	96	朝山古墳	古墳
23	原山遺跡	散地	97	姉山城跡	城跡
24	南原遺跡	散地	98	馬木岩榭跡	水堰跡
25	中分貝塚	貝塚跡	99	大井開遺跡	墳跡
26	菱根遺跡	散地	100	小坂古墳	古墳
27	西組古墳群	古墳群	101	刈山古墳群	古墳群
28	菱根関屋跡	関屋跡	102	井上古墳	古墳
29	亀谷遺跡	散地	103	井上横穴墓群	横穴墓群
30	鎌代古墳	古墳	104	栗栖城跡	城跡
31	蛇山砦跡	城跡	105	宇賀池堤跡	堤跡
32	石臼古墳	古墳	106	放れ山古墳	古墳
33	高浜II遺跡	散地	107	放れ山横穴墓群	横穴墓群
34	大前山古墳	古墳	108	放れ山遺跡	散地
35	里方八石原遺跡	散地	109	古志遺跡	散地
36	熊見谷遺跡	散地	110	思案橋北遺跡	散地
37	前口遺跡	散地	111	大槻古墳	古墳
38	里方別所遺跡	散地	112	古志本郷遺跡	集落跡
39	山持川川岸遺跡	集落跡	113	引法寺参道付近遺跡	集落跡
40	高浜I遺跡	集落跡	114	田畑遺跡	集落跡
41	高岡遺跡	散地	115	妙蓮寺山古墳	古墳
42	稲岡遺跡	散地	116	浄土寺山城跡	城跡
43	荻籽古墳	古墳	117	正蓮寺周辺遺跡	集落跡
44	荻籽I遺跡	古墳	118	宝塚古墳	古墳
45	荻籽II遺跡	古墳	119	地蔵堂横穴墓群	横穴墓群
46	斐伊川鉄橋遺跡	散地	120	廻田谷遺跡	散地
47	石土手遺跡	散地	121	下古志天満宮付近遺跡	散地
48	神田遺跡	散地	122	阿弥陀寺西遺跡	散地
49	中山丘陵遺跡	散地	123	極楽寺付近遺跡	散地
50	西谷横穴墓	横穴墓	124	多開院北遺跡	散地
51	西谷墳墓群	墳墓群	125	知井宮多開院遺跡	集落跡
52	来原岩榭跡	水榭跡	126	東原遺跡	散地
53	長廻横穴墓	横穴墓	127	芦渡遺跡	散地
54	長廻遺跡	散地	128	嘉儀遺跡	散地
55	権現山古墳	古墳	129	比布智館跡	館跡
56	権現山横穴墓群	横穴墓群	130	深田谷横穴墓群	横穴墓群
57	間府岩榭跡	水榭跡	131	浅柄古墳	古墳
58	長者原廃寺	寺院跡	132	浅柄南古墳	古墳
59	菅沢古墳	古墳	133	間谷古墳	古墳
60	下沢古墳	古墳	134	間谷東古墳	古墳
61	下沢会館周辺遺跡	散地	135	古垣内遺跡	土壙
62	向山城跡	城跡	136	間谷西古墳	古墳
63	下沢遺跡	散地	137	観知寺付近遺跡	散地
64	久徴園横穴墓	横穴墓	138	観知寺跡	館跡
65	平家丸城跡	城跡	139	智伊館跡	館跡
66	樋野祐平窯跡	窯跡	140	東谷I遺跡	散地
67	今市大念寺古墳	古墳	141	福知寺横穴墓群	横穴墓群
68	塚山古墳	古墳	142	福知寺裏土壙	土壙
69	角田遺跡	散地	143	山本陽一朗宅裏横穴墓群	横穴墓群
70	宮松遺跡	散地	144	三成範夫宅裏山横穴墓群	横穴墓群
71	上塩冶築山古墳	古墳	145	東谷北横穴墓群	横穴墓群
72	築山遺跡	集落跡	146	真幸ヶ丘西横穴墓群	横穴墓群
73	塩冶判官館跡	館跡	147	マチキン坂横穴墓群	横穴墓群
74	上塩冶横穴墓群	横穴墓群	148	梶谷徳次宅裏横穴墓群	横穴墓群
75	菅沢古墳	古墳	149	東谷II遺跡	散地
76	大井古城跡	古城跡	150	小浜山横穴墓群	横穴墓群
77	三田谷II遺跡	古墳	151	小浜寺山横穴墓群	横穴墓群
78	光明寺古墳群	古墳群	152	湖東屋山横穴墓群	横穴墓群
79	光明寺南古墳	古墳	153	山地古墳	古墳
80	三田谷I遺跡	集落跡	154	山地遺跡	散地
81			155	佐伯神社古墳	古墳

第3章 遺跡の概要

1. 四絡遺跡群について

出雲平野の中央部に位置する四絡地区は、現在の行政区の矢野町・小山町・大塚町・姫原町・渡橋町に当たる。この地区の旧自然堤防上には、弥生時代の拠点集落と考えられている矢野遺跡を中心として、小山遺跡・大塚遺跡などが隣接しており、四絡遺跡群と総称されている。

四絡遺跡群は、出雲考古学研究会が綿密な分布調査を実施し、遺物の散布密度から矢野遺跡を第1～5地点、小山遺跡を第1～3地点に区分している。

その後、平成2年に実施された矢野遺跡第2地点の調査で、矢野遺跡第6地点が確認された⁽¹⁾。また近年の発掘調査により、姫原西遺跡、蔵小路西遺跡等も確認され⁽²⁾、遺跡群の外縁はさらに広がるものと推定されている。

このうち矢野遺跡第3地点は、遺跡群全体の中でも遺物の量が多く、吉備系の特殊土器が表採されており、矢野遺跡が出雲平野の拠点集落として位置づけられる根拠となっている。

1986～87年に島根大学の田中義昭氏を中心とする出雲集落遺跡研究会が実施した発掘調査では、近世以降の土地改良により、良好な遺構は確認できなかったが、弥生中期中葉～後期中葉を中心とする大量の土器や吉備系の特殊土器が出土している。

一方、矢野遺跡第2地点では、14～15世紀の屋敷地が確認されている⁽³⁾。また蔵小路西遺跡からは12～15世紀の居館跡が確認されており、朝山氏惣領家の居館跡である可能性が指摘されている⁽⁴⁾。四絡地区は中世以降も政治の中心的地域であったようである。

2. 小山遺跡について

小山遺跡は現在のところ旧自然堤防上に第1～3地点が確認されている。

第1地点は、3地点の中で最も南側に位置する。出雲集落遺跡研究会によって、トレンチによる発掘調査が実施されており、弥生後期、古墳時代初頭、中世の遺構が検出されている。金属滓等が出土している。

第2地点は旧河道を挟んで、矢野遺跡第4地点の反対側に位置する。従来旧河道は第2地点に含めていなかったが、今回の調査で遺跡の広がり確認できたため、第2地点に含めることとした。弥生中期～後期の遺構のほか、近世の遺構を確認している。

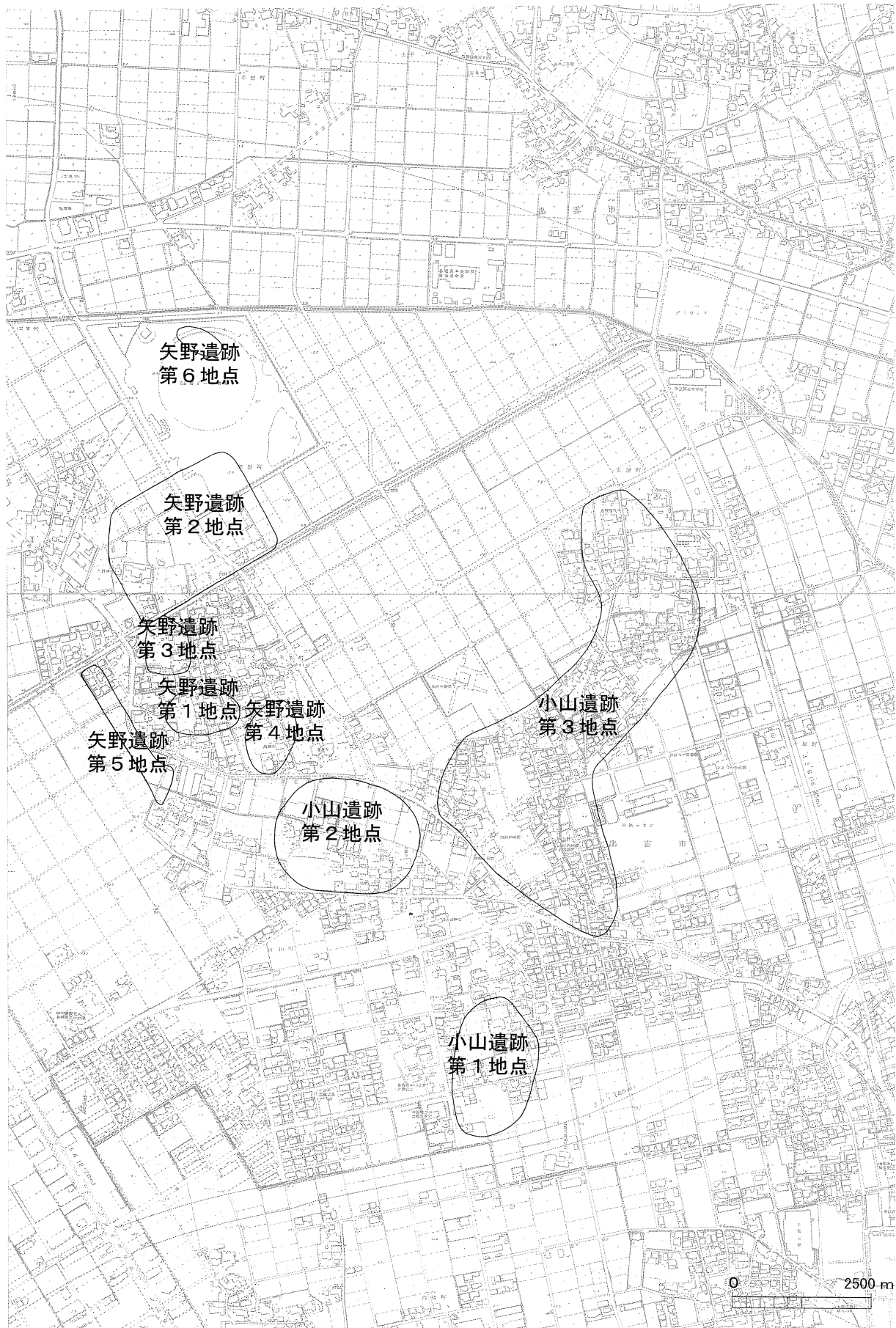
第3地点は、3地点の中で最も東側に位置し、1994、1997年に出雲市教育委員会が発掘調査を実施している。1994年の調査では、奈良・平安時代の遺物が多数出土しており、墨書土器が確認されている。一方、1997年に実施された調査では、弥生時代の環壕と考えられる大溝が確認されている。

註(1) 川上 稔・松山智弘編 『出雲健康公園整備プロジェクト事業に伴う矢野遺跡第2地点発掘調査報告書』 出雲市教育委員会 1991年

(2) 出雲市教育委員会編 『遺跡が語る古代の出雲—出雲平野の遺跡を中心として—』 1997年

(3) 註(1)に同じ

(4) 註(2)に同じ



第4図 四絡遺跡群位置図

第4章 北側調査区の調査

1. 北側調査区の概要

北側調査区は矢野遺跡のある旧自然堤防と小山遺跡のある旧自然堤防の間にある水田に所在し、従来、小山遺跡第2地点には含まれていなかった地域である。幕末の鎌田宇助氏⁽¹⁾の調査による『旧小山村切図』（鎌田稔造氏所蔵）によれば、当地は幕末には既に水田として機能していたことが知られるが、これらの水田は、隣接する現在の県道遥堪今市線に沿って帯状に広がっており、付近に中之島という地名が存在することから、調査地は以前より河川遺構の存在を指摘されていた。

発掘調査は試掘調査報告をもとに、生活道となっている畦道以外の区域を30～40cm重機掘削した。そして7mメッシュの調査区を設定し、人力で少しずつ掘り下げた。

北側調査区では、灰色シルトのしっかりした地盤の上から幅約70mの自然河道（SD02）1本と3本の溝（SD01・SD03・SD04）を確認した。SD01はSD02に直交し、SD03・SD04はSD02の南北の汀線をそれぞれ切っている。

発掘調査はSD01・SD03・SD04については全面調査できたが、SD02については調査の安全上十分な矩面が確保できないため、SD02を横断する形でトレンチ調査を実施した。トレンチは自然河道に直交する形で、1本設定するのが最善の方法であったが、生活道として利用されている畔道と重複するため、トレンチの位置を南北それぞれ東西に平行移動し、その間を直交するトレンチで繋いだ。設定したトレンチは、おおよそL字を上下2つ組み合わせたような形である（第5図参照）。

このうち遺物から時期のわかる遺構は、SD01だけで、弥生中期から後期と推定される。また切り合い関係から、SD03はSD01・SD02より新しく、SD04はSD02より新しいと考えられる。しかしSD02は堆積状況から長時間をかけて少しずつ縮小していったものと考えられるので、SD03・SD04が埋没した時に、SD02が小河川として残存していた可能性はある。SD01とSD02、SD03とSD04の新旧関係は不明である。各遺構の堆積状況は、SD01が砂質土が多く、SD02は黒色系粘土と灰色系粘土の互層、SD03・SD04は黒色系粘土が砂質土を挟んでいるという特徴がある。このためこれらの遺構が機能した期間は別として、SD01・SD03・SD04は相応の流れを持ったものであったと考えられる。一方、SD02は流れの穏やかな河川であったろうと推測される。また有機物堆積であると考えられる黒色系の粘土が、何層も検出されていることから、何度か湿地化していたようである。付近には茅原・萱原など湿地を連想させる地名が多く残っており⁽²⁾、これらを反映しているものと考えられる。

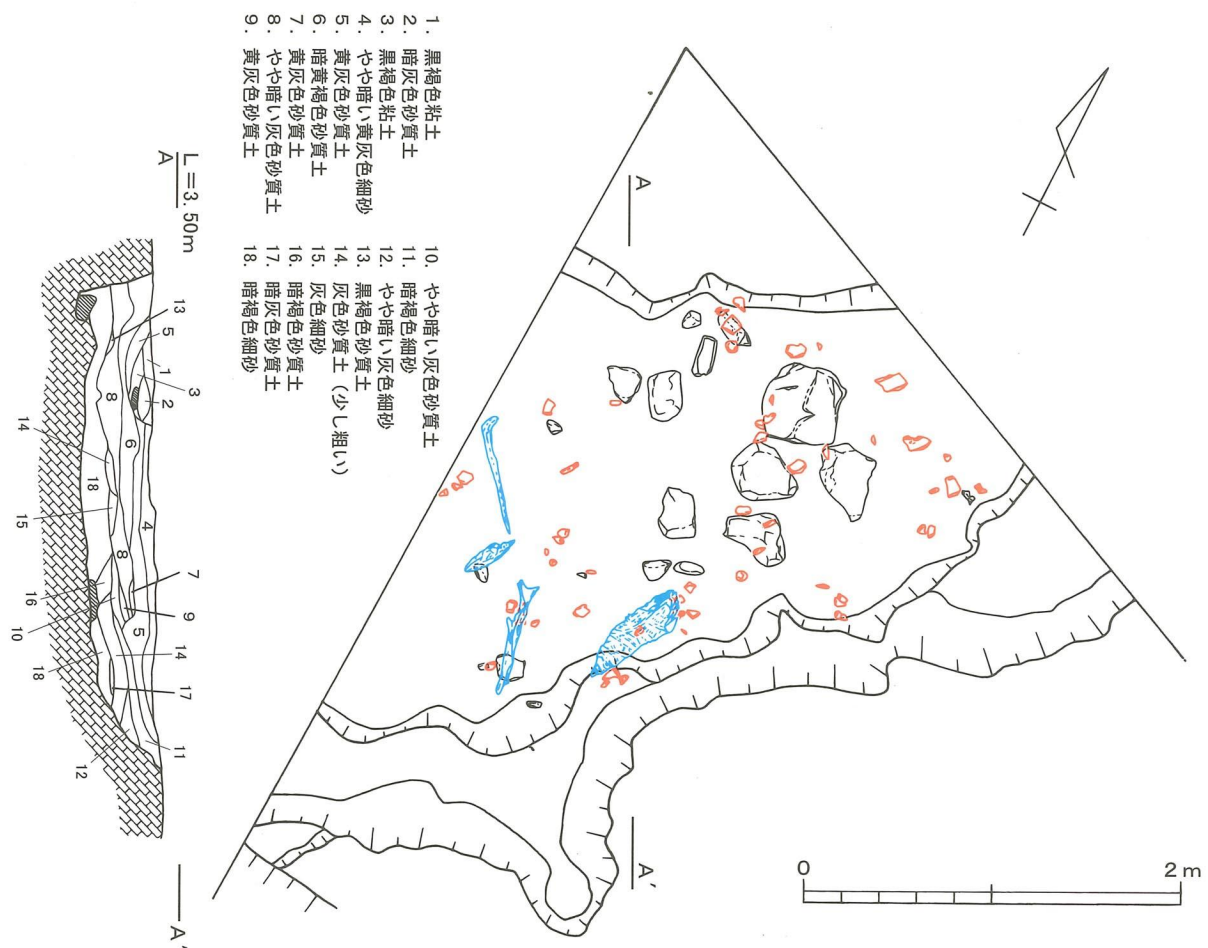
註(1) 鎌田宇助（鎌田家第4代当主、1868年没）

(2) 永田滋史「村名・地名考」『四絡郷土誌』四絡郷土誌編集委員会 1986年

2. 遺構と遺物

SD01 (第6図)

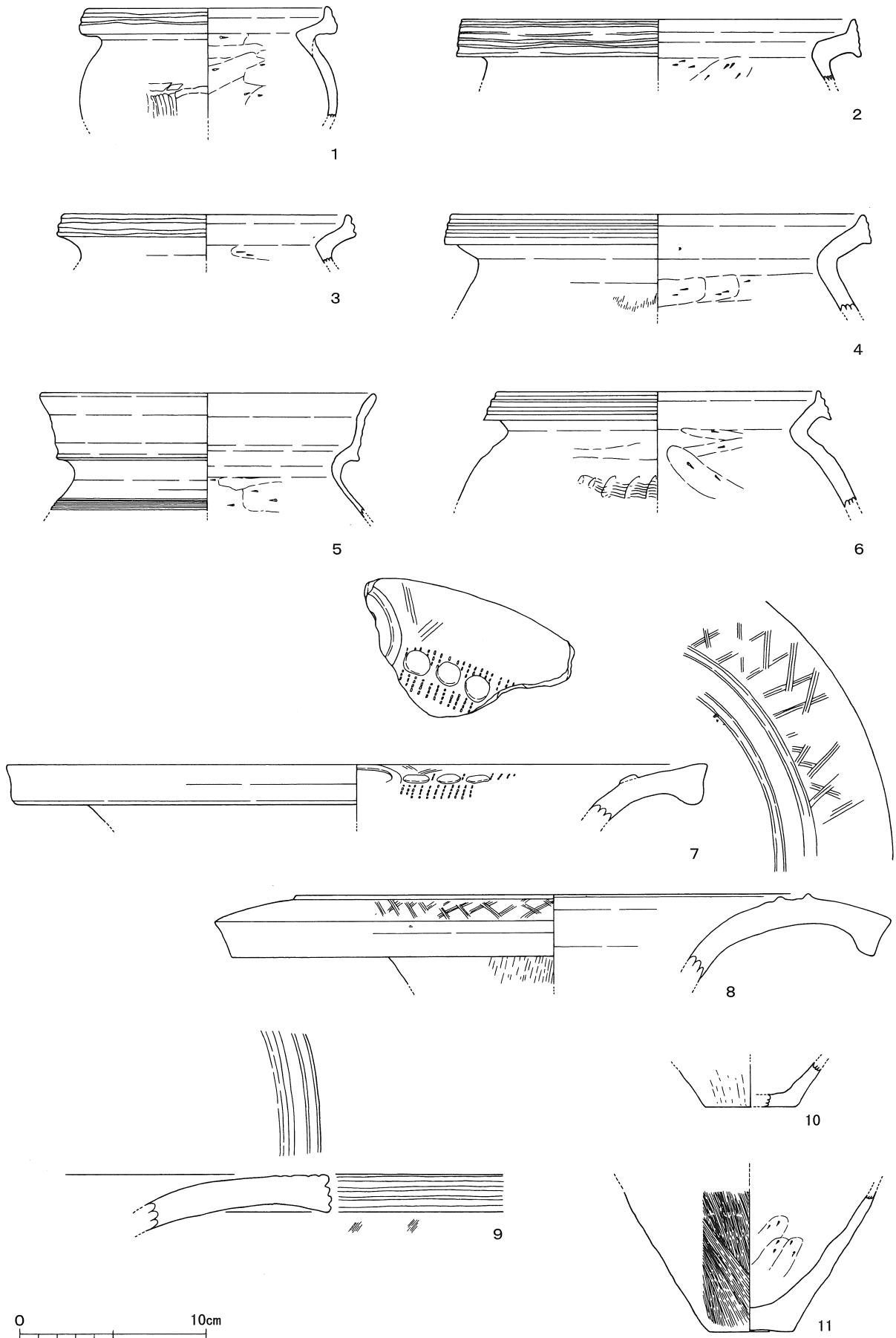
弥生中期から後期の溝状遺構で、検出長約 4.8 m、幅約 2.2 m、深さ約 0.4 m を測る。主軸は $N \sim 63^\circ \sim E$ で、切り合い関係から SD03 より古い遺構と推定される。側壁は西側が外に直線的に立ち上がり、東側は緩やかに立ち上がる。遺構の埋土は砂質土が中心で、相応の流れを持った溝であったと推定される。遺構内からは弥生式土器や用途不明の木片のほか、30 ~ 40 cm にも及ぶ大型の石が幾つも確認されている。石に加工痕は見られないが、このような石は SD01 だけに集中しているので、人為的に持ち込んだものと考えられる。北側には大規模集落である矢野遺跡が存在するので、排水施設のようなものを造っていた可能性も考えられる。



第6図 SD01 遺構実測図

SD01 出土遺物 (第7図)

第7図-1~9は弥生式土器の口縁部である。1は体部外面をヘラ磨き、内面をヘラ削りで調整しており、頸部には粘土の繫目痕が残る。口縁部の立ち上がりは、頸部で外側に大きく屈曲した後、内側に屈曲する。口縁部には2条の凹線を施し、端部を丸く仕上げている。2は体部が残存していないが、残存部から寸胴型になると推定される。口縁部の立ち上がりは、頸部で大きく外側に屈曲した後、複合口縁上段で内傾する。口縁部外面に5条の凹線を施す。3も体部が残存していないが、頸部で外側に屈曲した後、内側に屈曲するが、1よりも緩やかな屈曲である。口縁部外面に2条の



第7図 SD01出土遺物実測図

凹線を施し、端部を丸く仕上げている。4は体部はあまり残っていないが、外面はハケ目調整していたようである。口縁部の立ち上がりは、頸部で外側に屈曲した後、複合口縁上段で内傾するが、2ほど明確に屈曲していない。口縁部外面に3条の擬凹線を施し、端部をやや尖り気味に仕上げている。5は体部外面に4条以上の擬凹線を施す。口縁部の立ち上がりは、外反した後、複合口縁の上段でさらに外反する。6は体部外面をナデ調整した後、ヘラ描文を施し、さらに刺突文を施している。また頸部やや下方にヘラ状工具痕が残る。口縁部の立ち上がりは、頸部で外側に屈曲した後、複合口縁上段で内傾する。端部は尖り気味である。7は口縁部のみの出土であるが、朝顔形に開く形態のものと考えられる。内面には斜格子文、刺突文を施し、円板、粘土紐を貼り付けている。破片であるため粘土紐が意図している文様は不明な点が多いが、渦巻文であれば防長地域の影響も考える必要があろう⁽¹⁾。8も朝顔形の口縁を持つもので、頸部外面をハケ目調整し、内面に斜格子文を施す。斜格子文の内側には粘土紐を2条貼り付けている。9も朝顔形の口縁を呈するものと考えられる。頸部外面にはハケ目を施していたようである。口縁端部と口唇部内面に各4条の凹線を施す。10、11は弥生式土器の底部である。10は外面をヘラ磨き、内面をヘラ削りで調整している。11は外面をハケ目調整し、内面をヘラ削り調整している。

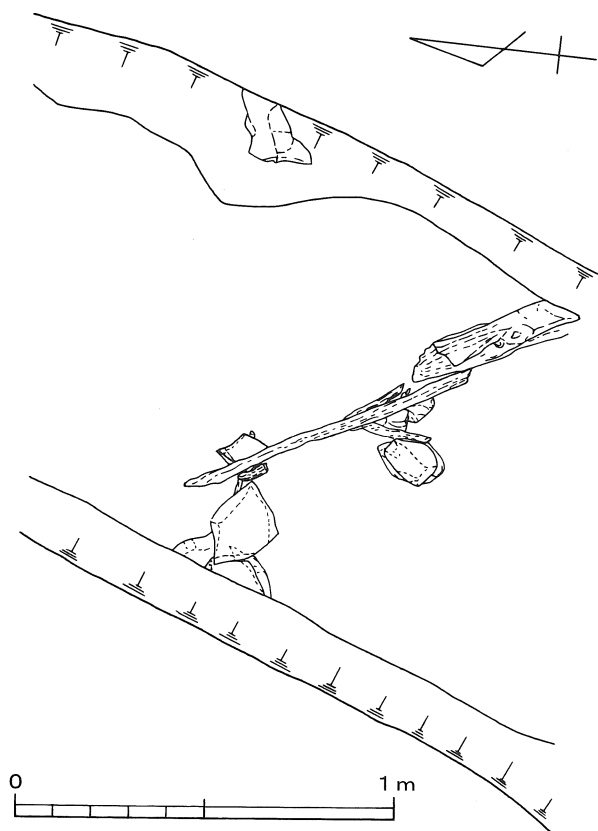
SD02 (第5図)

矢野遺跡がある旧自然堤防と小山遺跡がある旧自然堤防の間を流れていたと考えられる自然河道遺構で、主軸はN \sim 60 $^{\circ}$ ~Wにある。出土遺物は遺構の上層で弥生から近世までの遺物を確認しているが、遺物は混在した状態で出土しており、下層からは木製品が1点出土したのみで、土器類は出土しなかったため、自然河道の時期は不明である。しかしSD03・04との切り合い関係から両者よりも古い時期から存在していたことは推定される。幅は約70mを確認しているが、埋土が粘土中心であることから、徐々に河道変更していった可能性もあり、70mの河幅が同時期のものであるとは必ずしも言えない。土層は黒色系粘土と灰色系粘土の互層で、有機物堆積と考えられる黒色系粘土層が何層も確認できることから、SD02は何度か湿地化し、縮小していったものと考えられる。

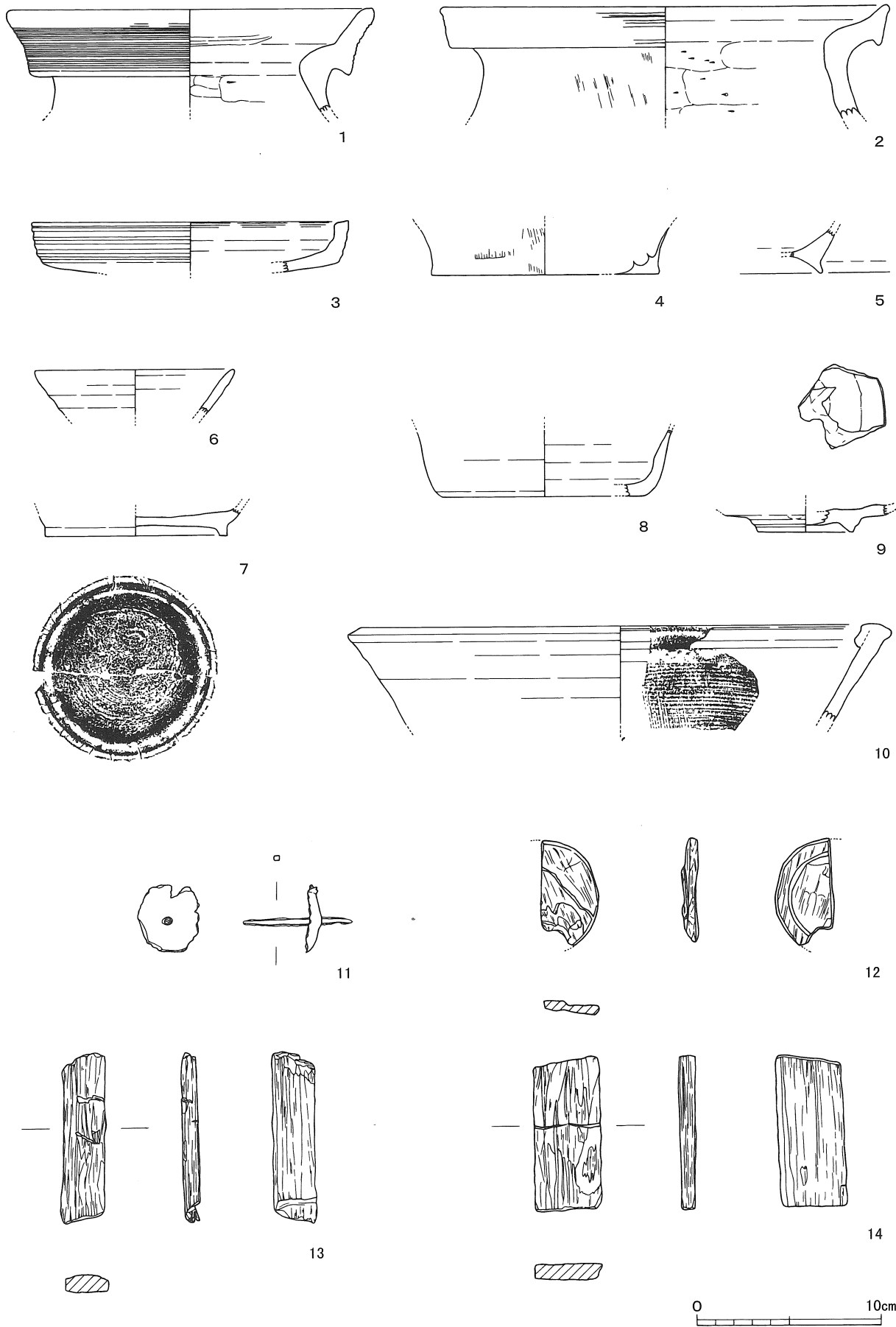
なおボーリング調査では、1300年前に水田として利用され始めたとのデータが得られている。

SD02出土遺物 (第9図)

第9図-1~3は弥生式土器の口縁部であ



第8図 SD02トレンチ出土遺物



第9图 SD02出土遺物実測図



第 10 図 S D O 2 出土遺物実測図 (2)

る。1は外反した後、複合口縁上段でさらに外傾する。口縁部外面には13条の擬凹線が施され、端部は丸く仕上げている。また口縁部内面は強いナデで調整し、体部内面はヘラ削り調整していたようである。2も外反した後、複合口縁上段で外傾するが、複合口縁の大きさは1よりも小形である。口縁部の立ち上がりは、外反した後、複合口縁上段で外形する。口縁部外面には数条の凹線を施しているようであるが、風化が著しく詳細は不明である。体部は頸部の残存部から寸胴形になると考えられ、外面はハケ目、内面はヘラ削りで調整している。3は高坏の口縁部で、口縁部が屈折して直立気味に立ち上がる。口縁部外面には5条の擬凹線を施し、端部は平坦に仕上げている。4、5は弥生式土器の底部である。4は内面の風化が著しく、調整が不明であるが、外面はハケ目により調整している。5は低脚坏の脚部であると推定されるが、風化が著しく、調整は不明である。6、7は須恵器である。6は甗の口縁部と考えられ、回転ナデ調整を施している。口縁部の立ち上がりは直線的に外側に開いている。7は高台付坏で、底部には回転糸切痕が残る。外面には回転ナデ、内面にはナデ調整を施している。8は土師質の坏である。内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部には回転糸切痕の可能性のある痕跡が残っている。9は白磁で胎土に黒い粒子を含む。内面は施釉の後、蛇ノ目釉ハギを施し、外面は露胎で、回転ヘラ調整により高台を削り出している。10は瓦質の播鉢である。口縁部の立ち上がりは、直線的に外側に開き、端部は内側に折り込んでいる。内面には横方向に播溝を彫った後、縦方向の播溝を入れている。11は銅製品で直径3mmの芯棒に直径3.6cm以上の笠を有する。芯棒の端部はそれぞれ尖っており、蠟燭立てと考えられる。12～14は木製品である。12は全体を円形に加工し、片面に円形の繰り込みが見られる。側面には炭化痕が残る。高坏脚部の可能性がある。13は板状の木製品で用途は不明である。両端部ともに折れているため、復原長は不明であるが、一方の端を段状に加工している。14も板状の木製品であるが、やはり用途は不明である。片面に工具痕が明確に残っている。

第10図-1はSD02のトレンチ底面から出土した木製品である。断面正形状に加工しており、表面4面のうち2面は丁寧に仕上げている。先端部は炭化しており、もう一端は折れている。復原長は不明である。

SD03 (第11図)

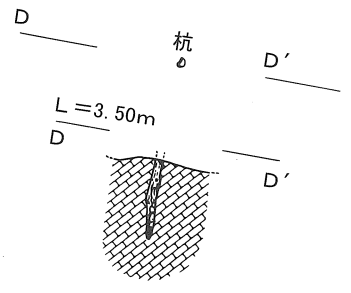
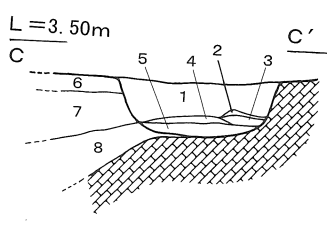
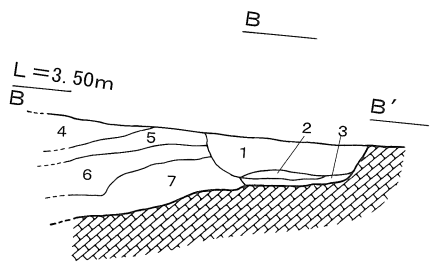
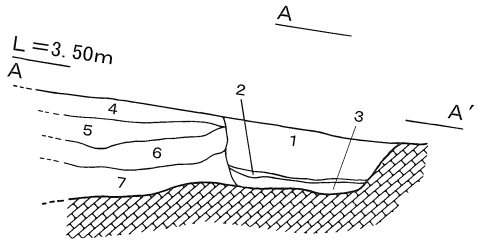
SD02の北側の汀線とSD02に直交するSD01を切っている溝で、切り合い関係からSD01・02よりも新しい遺構と考えられる。遺構の主軸はN \sim 63 $^{\circ}$ ～Wで、検出長約8.3m、幅約1.0m、深さ約0.3mを測り、遺構断面は逆蒲鉾形状を呈し、内湾しながら立ち上がる。埋土は暗灰色砂質土を黒色系粘土が挟んでおり、有機物堆積～溝の機能～有機物堆積という流れが考えられる。

またSD03の北側約0.6mから杭を1本検出している。杭は自然木の下端を削り出した簡単なもので、上端は折れていた。しかし杭の性格は不明で、SD03に伴うものであるかは不明である。

SD04 (第12図)

SD02の南側の汀線を切っている溝で、切り合い関係からSD02よりも新しい遺構と考えられる。主軸はN \sim 57 $^{\circ}$ ～Wで、検出長約7.1m、幅約2.0m、深さ約0.5mを測り、壁は北側で外

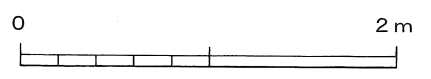
- 1. 暗褐色粘土
- 2. 暗灰色砂質土
- 3. 黒褐色粘土
- 4. 黒褐色粘土
- 5. 灰色粘土
- 6. 黒褐色粘土
- 7. 灰色粘土 (少し粗い)



- 1. 暗褐色粘土
- 2. 暗灰色砂質土
- 3. 黒褐色粘土
- 4. 黒褐色粘土
- 5. 灰色粘土
- 6. 黒褐色粘土
- 7. 灰色粘土 (少し粗い)

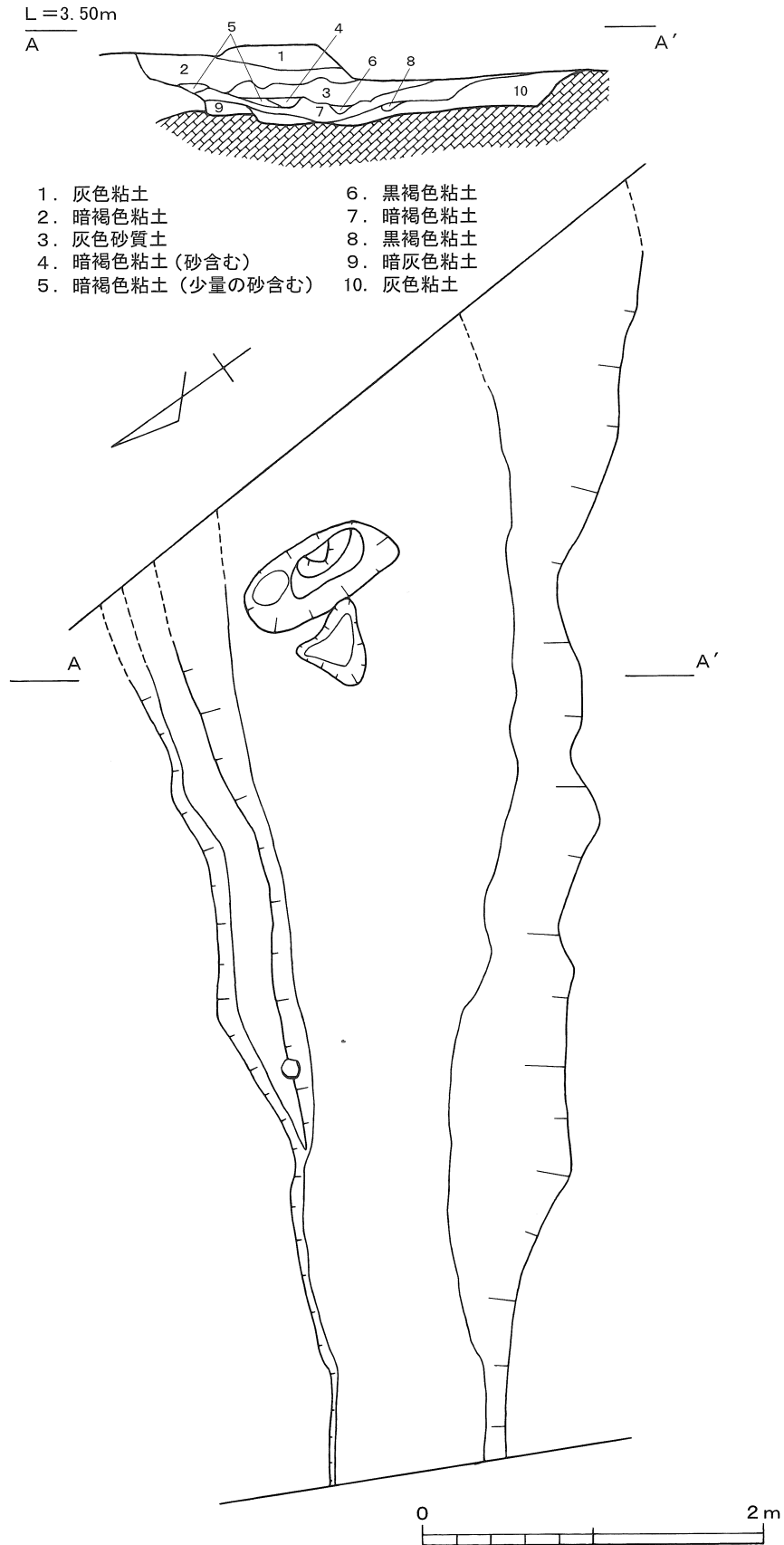
- 1. 暗褐色粘土
- 2. 暗灰色砂質土
- 3. 黒褐色粘土
- 4. 暗灰色砂質土
- 5. 黒褐色粘土
- 6. 灰色粘土
- 7. 黒褐色粘土
- 8. 灰色粘土 (少し粗い)

トレンチ



第11図 SD03遺構実測図

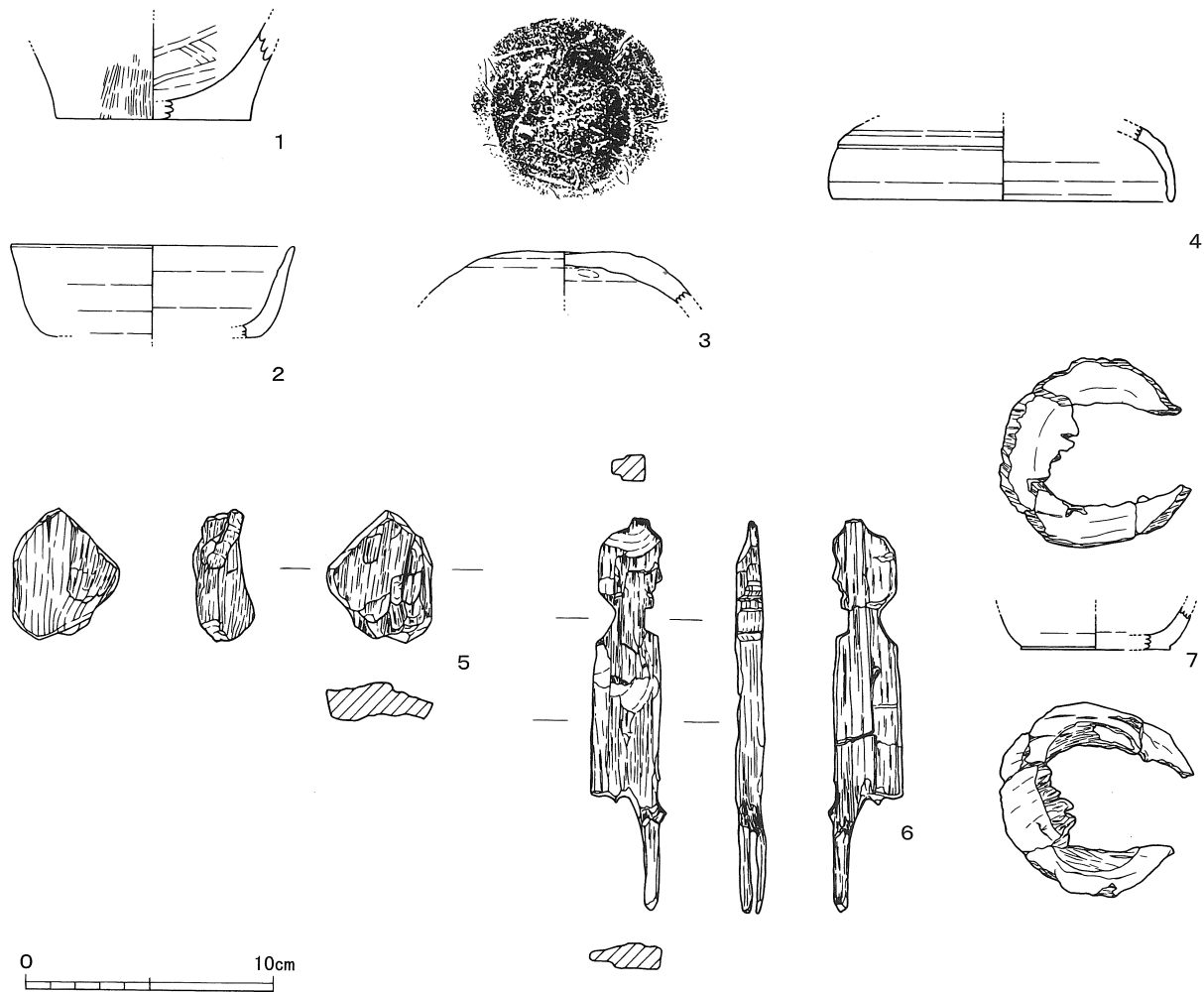
反した後、内湾気味に立ち上がり、南側で外反しながら立ち上がる。埋土は黒色系の粘土が暗灰色砂質土を挟んでおり、SD03と同じように有機物堆積～溝の機能～有機物堆積という流れが考えられる。



第12図 SDO4遺構実測図

SD03・SD04・遺構外出土遺物（第13図）

第13図-1はSD03出土の弥生式土器で、底部のみが出土している。外面にはハケ目調整を施し、内面は粗いヘラ磨きにより仕上げている。2~4はSD04から出土した遺物である。2は土師質の坏で、胎土は緻密である。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部を丸く仕上げている。内外面にはナデを施しているが、底部は風化のため調整不明である。3、4は須恵器蓋である。3は内外面ともに回転ナデ調整を施しているが、天井部については、外面ヘラ切りの後、ナデ調整してお



第13図 SD03・SD04・遺構外出土遺物実測図

り、内面には指頭圧痕が残る。4は天井部は残存していないが、肩部外面に各1条の沈線と稜を、口縁部内面に1条の沈線を残し、内外面ともに回転ナデを施している。口縁端部はやや尖り気味である。5~7は遺構外出土遺物である。5は用途不明の木製品で、側面に明確な加工痕が残る。6は板状の人形木製品である。工具による繰り込みにより、頭上の突起部、額、鼻、口、首を削り出している。脚部は残存が悪いため不明な点が多いが、板正面から加工により2本に分けていたと考えられ、残存する脚部は、板側面からさらに2本に削り分けている。7は漆器である。口縁部は内湾しながら立ち上がっているようである。内外面は暗赤褐色の漆を施している。

註(1) 山本一朗「防長の弥生式土器」『周陽考古学研究所報2 山口県の弥生式土器 一集成と編年一』

第5章 南側調査区の調査

1. 南側調査区の概要

南側調査区は従来より小山遺跡第2地点とされていた旧自然堤防上にあり、帯状に続く水田を挟んで、矢野遺跡が所在する旧自然堤防の反対側にある。

当地域には現状で東に14世紀の創立とされる日蔵寺⁽¹⁾、西には近世に松江藩主から小山村庄屋、神戸郡与頭、神戸郡下郡等の特権を与えられた三木家⁽²⁾が所在しているが、『旧小山村切図』には、日蔵寺、三木家のほか、高畦作りを開発した豪農成相家⁽³⁾の屋敷や三木家の菩提寺であったと考えられている松林寺⁽⁴⁾も記載されている。また付近には、『小山村御検地帳』（元禄15, 1702）に記載される医者見周の御役御免屋敷があったと考えられており、近世には旧小山村の中核であったと考えられる地域である。

発掘調査は道路側溝予定地の調査を先に実施し、道路予定地の調査は後で実施した。道路側溝予定地は幅約1mのトレンチを、また道路予定地は深さ約50～70cmを重機掘削した後、人力により徐々に掘り下げた。道路予定地には、北側調査区の延長で7mグリッドの調査区を一行に設定している。

調査では褐色系土の包含層を除去した後、砂質土を基盤とするベース面から、柵列2、建物跡2、溝20、井戸7、土壌52、土壌墓1、集石遺構1、ピット16、不明遺構7を検出した。遺構は弥生時代の遺構を江戸時代の遺構が大きく破壊しており、包含層には多量の弥生式土器片を含んでいる。確実に弥生時代と確認できる遺構は、中期と推定されるSD13のみである。また近世の遺構は、調査区を斜めに走るSD07、SD20、SD10付近を境にして、遺構の検出数が大幅に変化するようである。

調査区は『旧小山村切図』の日蔵寺西隣に所在する3軒の宅地から成相家所有の畑地辺りまでになると推定される。また切図には畑地東端にも成相家所有の宅地が記載されており、礎石は配列された状態では検出されなかったが、SK28から延石や礎石の製品や未製品と考えられる石が出土していること、SD20上で拳大の石をL字状に配石していること、SD11上で方形状の落ち込みを確認していることから、地盤の悪い砂地のベース面に溝状に地業を施し、その上に基礎石をおいていた可能性も考えられる。⁽⁵⁾

註(1)『神戸郡皇国地誌』1878～85年 には、「日蔵寺々地東西廿四間五歩南北廿四間八歩面積二反三畝五歩西京府禪臨濟宗妙心寺ノ末派ナリ村ノ中央ニアリ貞和二年三木四郎左工門尉宗秀開基創建ス其後衰微セシヲ文化五戊辰年四月僧丈劣再建中興ス」とある。

(2)松尾 寿 「三木家古文書について」『三木家文書目録（近世）付、近代文書』出雲市立図書館 1994年

(3)加藤喜治郎 「旧跡探訪」『四絡郷土誌』四絡郷土誌編集委員会 1986年

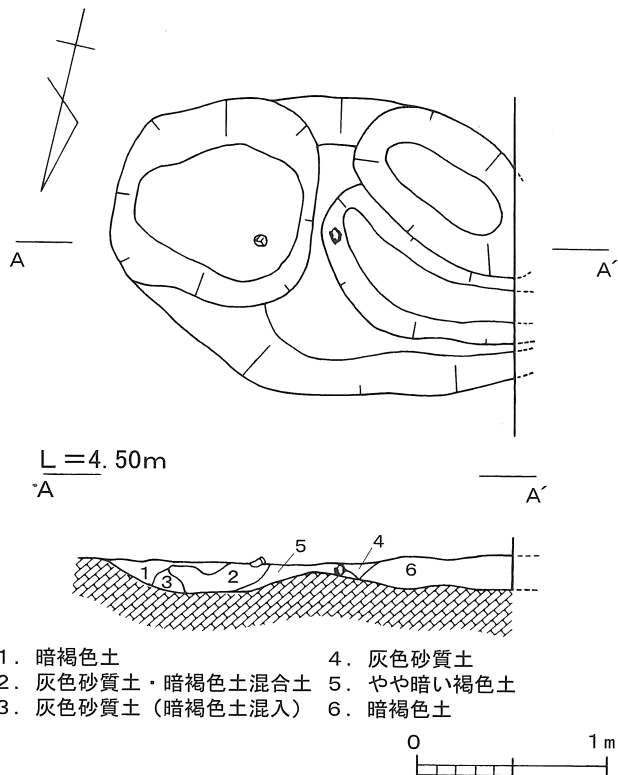
(4)『神戸郡北方萬指出帳』1754年 には、「禪宗松林寺 無旦那寺 寺守無 寺忒間茅ふき本尊文殊菩薩日蔵寺抱敷地四畝歩」とある。

(5)大阪市教育委員会 植木 久氏の御教示による。

2. 遺構と遺物

SK10 (第15図)

地山の砂礫層に掘られた長径 2.1 m 以上、短径約 1.6 m の楕円状の土壇で、深さは約 0.20 m を測る。主軸は長軸で N \sim 78 $^{\circ}$ ～E である。壁は残存部で内湾気味に緩やかに立ち上がる。土壇内には3カ所の凹みが見られ、遺構内からは弥生式土器が出土している。



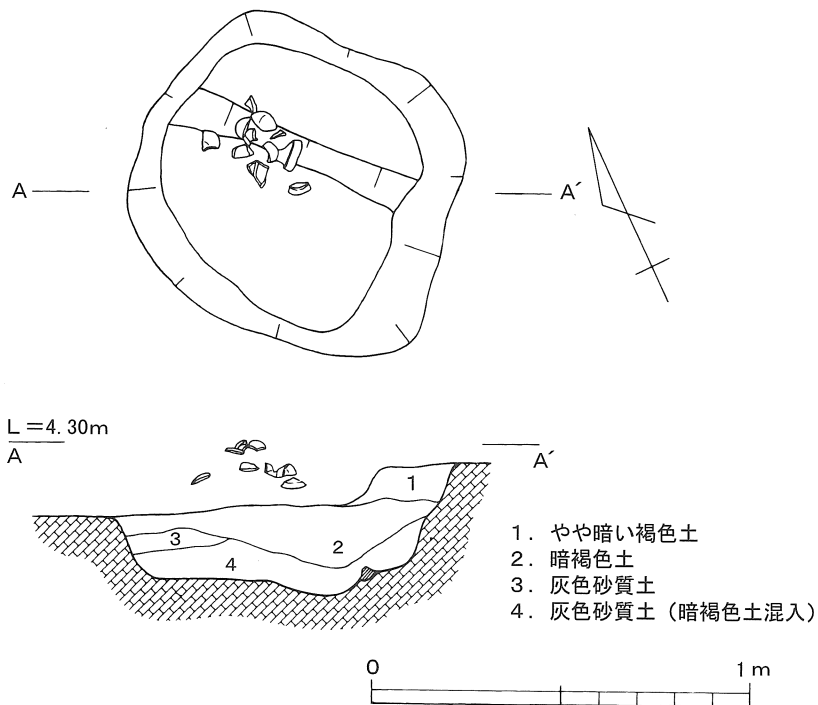
第15図 SK10遺構実測図

SX08 (第16図)

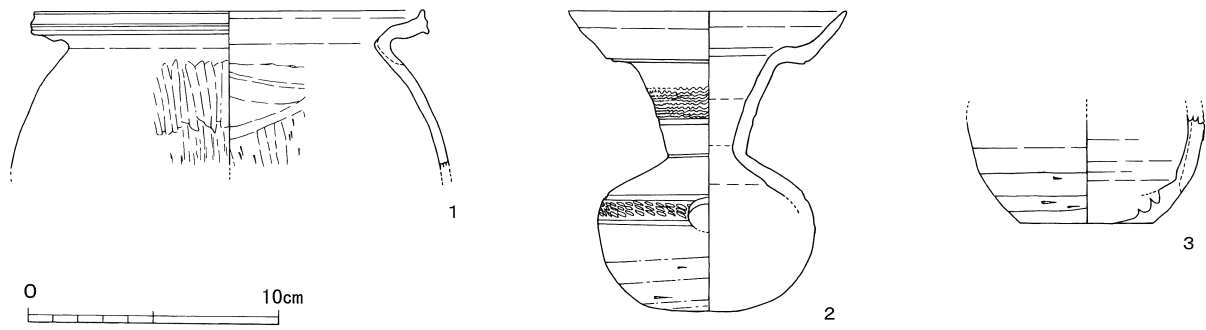
SD06を切っている遺構で、0.88×0.80 m の隅丸形状を呈し、深さは最深部で 0.34 m を測る。主軸は長軸で N \sim 38 $^{\circ}$ ～W である。壁は西側で外反気味に立ち上がるが、東側では外反気味に立ち上がり、段を持った後、再び外反気味に立ち上がる。底部には若干の凹みが見られる。遺構上面から2個体以上の甕が出土している。

SK10・SX08出土遺物 (第17図)

第17図-1はSK10から出土した弥生式土器である。口縁部の立ち上がりは、外方に開いた後、肥厚し、口縁部上段に擬凹線を施す。口縁端部はやや丸みを帯びる。体部外面にはヘラ磨き、ハケ目を施し、体部内面はヘラ磨き、ヘラ削りにより調整している。2、3はSX08から出土した須恵器である。2は甕で、体部に刺突文、頸部に波状文が残るのが特徴である。底部は回転ヘラ調整され、体部外面には2条の沈線の間刺突文を施す。また体部と頸部の繋目に沈線を施し、それぞれを明確に分けている。頸部には波状文が施され、下方に1条の沈線を施している。沈線は口縁部下方にも1条施されている。3も甕で、底部には回転ヘラ調整を施している。



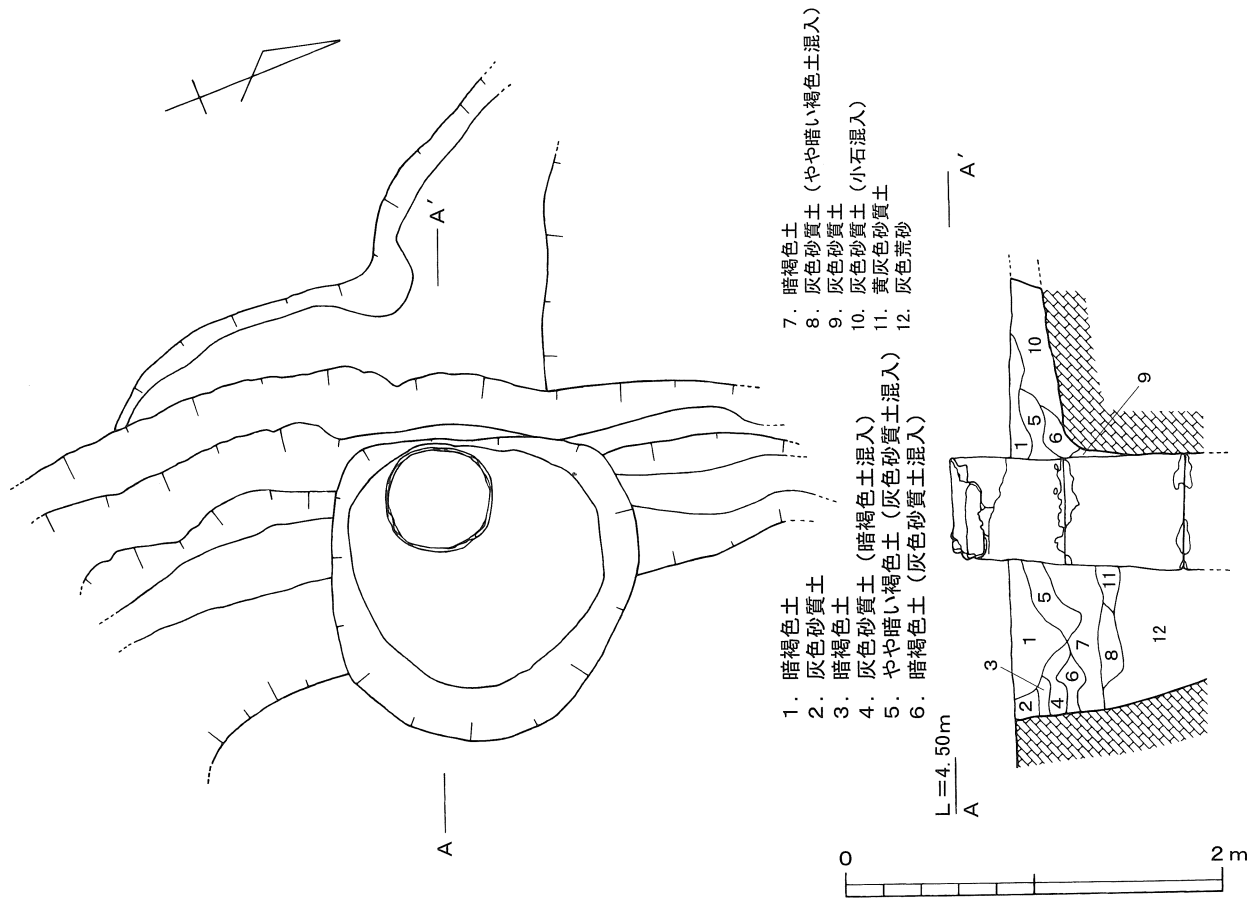
第16図 SX08遺構実測図



第17図 SK10・SX08出土遺物実測図

SE04 (第18図)

直径 54 cmの陶器製井戸で、井戸の掘り方がSD06、SD19を切っている。井戸枠の設置位置は、設置の都合上片側に寄せており、掘り方の壁は、井戸枠に近い方でほぼ垂直に立ち上がり、反対側で内湾気味に立ち上がる。井戸側は表面を黒く仕上げている、大津瓦との関連も考えられる⁽¹⁾。化粧側の下からは2側の井戸枠を確認しているが、第2側は湧水のため調査できなかった。井戸枠の繋目は粘土の目張りを施している。井戸枠内からは遺物は出土しなかったが、掘り方の埋土からはガラス製の飾玉と香炉の一部の可能性のある陶器が出土している。

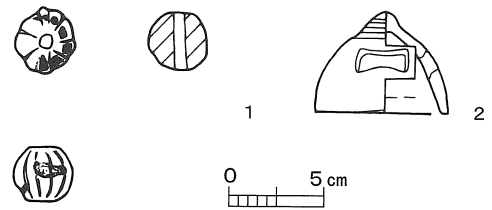


第18図 SE04

SE04出土遺物 (第19図)

第19図-1はガラス製の飾玉である。中心には径約3mmの孔を穿ち、側面には9条の溝を入れてある。ガラス内面には茶色と青色の染料を入れている。2は香炉の一部である可能性を持つ遺物で、

外面に黄色の釉を施し、内面を露胎としている。側面には窓状の繰り込みがあり、天井部は疣状の突起を造り出し、暗緑色または黄緑色に施釉している。



SD06 (第20図)

検出長約7.0 m、幅約2.6 m、深さ約0.8 mの溝状遺構で、壁は外反気味に立ち上がる。主軸はN \sim 81 $^{\circ}$ ～Wであるが、検出部両端ともに北側に突出しているため、溝の形は不整形である。切り合い関係は、SD19とSE04に切られている。遺物は弥生式土器が多く、少量の土師質土器が混入している。

第19図 SE04出土遺物実測図

SD19 (第20図)

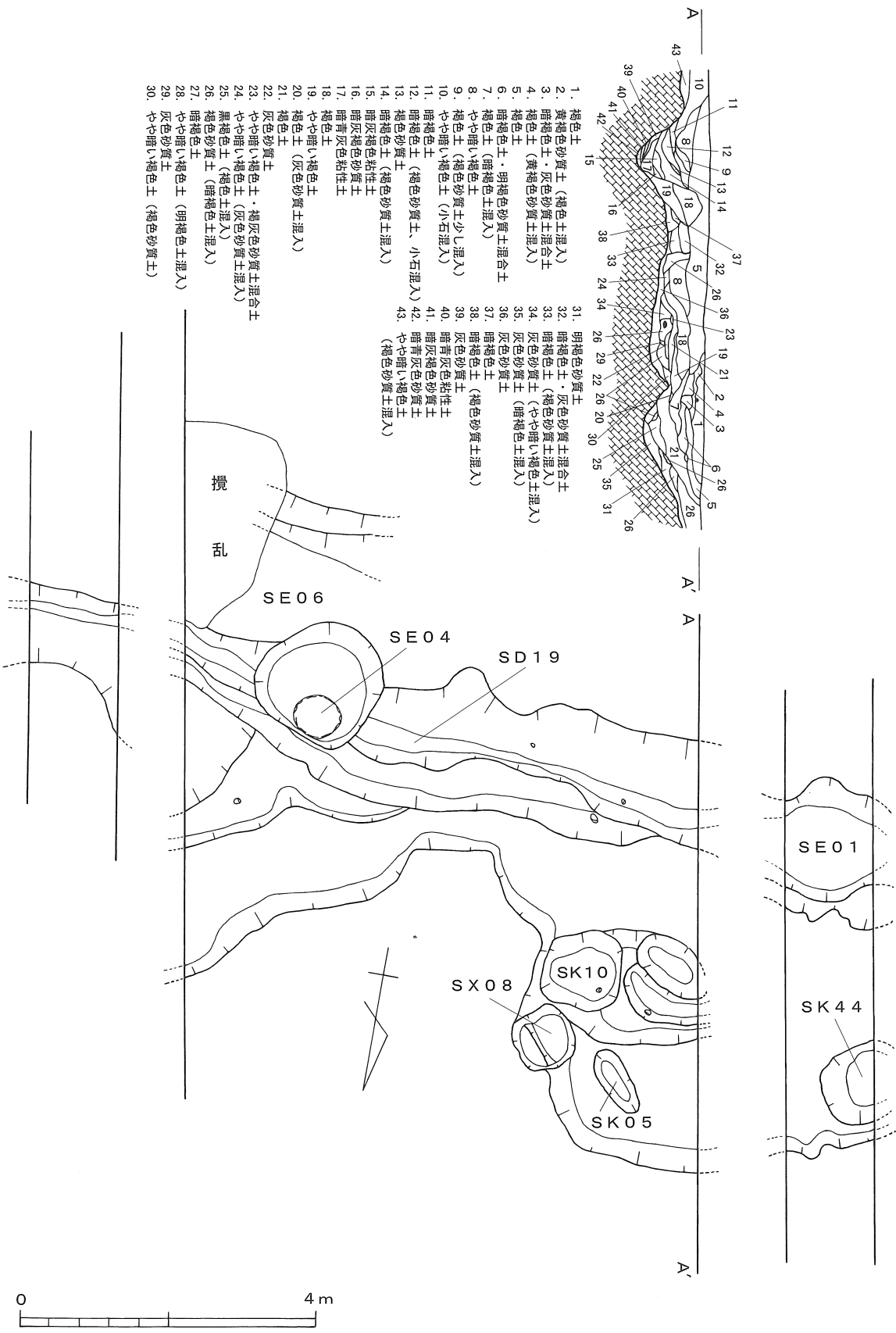
検出長約7.0 m、幅約1.7 m、深さ約1.0 mの溝状遺構で、壁は外方に直線的気味に立ち上がる。主軸はN \sim 83 $^{\circ}$ ～Wで、SD15、SD16とほぼ平行関係にある。切り合い関係は、SD06を切っているが、SE04に切られている。遺物は弥生式土器片が出土しているが、SD06の埋土から土師質土器が出土しており、弥生時代の遺構ではないと考えられる。SD15、SD16との平行関係から、これらの遺構に近い時代の遺構であると推定される。

SE01 (第20図)

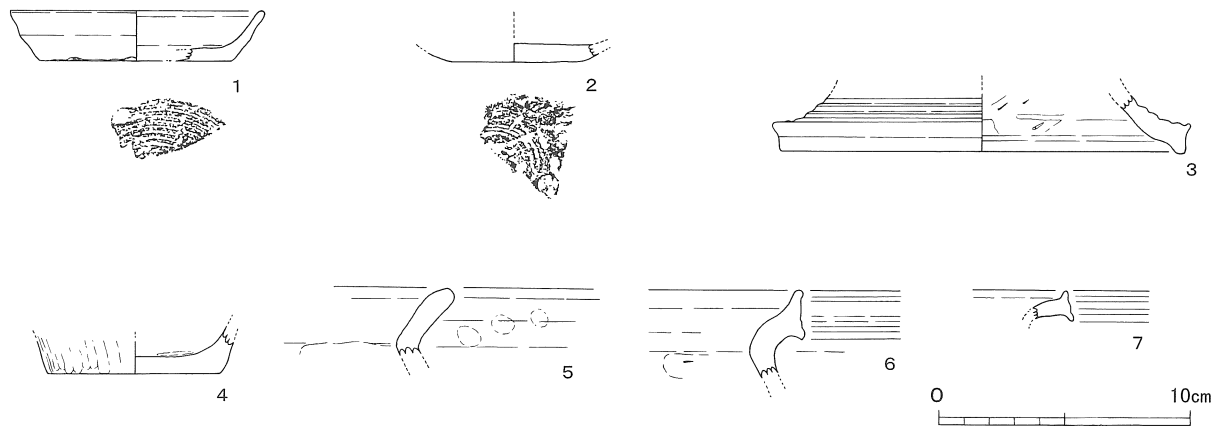
数枚の板を円形状に並べ井戸枠を造っていたが、土圧と湧水で崩落したため詳細は不明である。切り合い関係は、SD06を切っている。遺物は出土しなかった。

SD06出土遺物 (第21図)

第21図-1、2は土師質土器である。1は口縁部が外方に直線的に立ち上がり、端部が丸く仕上げられている。内外面ともに回転ナデ調整を施しており、底部には回転糸切痕が残る。口径と底径の差は小さい。2は残存が悪く、底部しか残っていないが、回転糸切痕が残る。回転ナデにより調整している。3～7は弥生式土器である。3は高坏の脚部で、外面に擬凹線を施す。内面にはヘラ削り調整を施している。4は底部のみ出土した。外面にはヘラ磨きを施し、内面はナデ、指頭圧痕により調整している。5～7は弥生式土器の口縁部である。5はやや外反気味に開く形態のもので、口縁部は肥厚し、端部は扁平気味である。内外面にナデ調整、外面に指頭圧痕を施している。残存部から体部内面はヘラ削り調整していたものと考えられる。6は複合口縁上段に3条の擬凹線を施したものである。口縁部の立ち上がりは、外反した後、やや内傾する。内外面ともにナデ調整を施すが、残存部から体部内面にはヘラ削り調整を施していたものと考えられる。7は複合口縁上段に2条の擬凹線を施したものである。内外面ともにナデ調整を施している。



第20図 SD06・SD19・SE01遺構実測図



第 21 図 SD06 出土遺物実測図

SD15 (第 22 図)

検出長約 9.1 m、幅約 1.0 m、深さ約 0.8 m の溝状遺構で、壁は内湾気味に立ち上がる。主軸は N \sim 86 $^{\circ}$ ～W である。東端部で溝が南向きに直角に方向を変えるが、SE06 に切られており、詳細は不明である。このほか切り合い関係では、SK52 にも切られており、SD15 は SE06、SK52 よりも古い遺構のようである。

遺物は弥生式土器片が多く含まれるが、近世の陶磁器や土師質土器も多く出土している。遺構の時期は 18 世紀頃と考えられる。

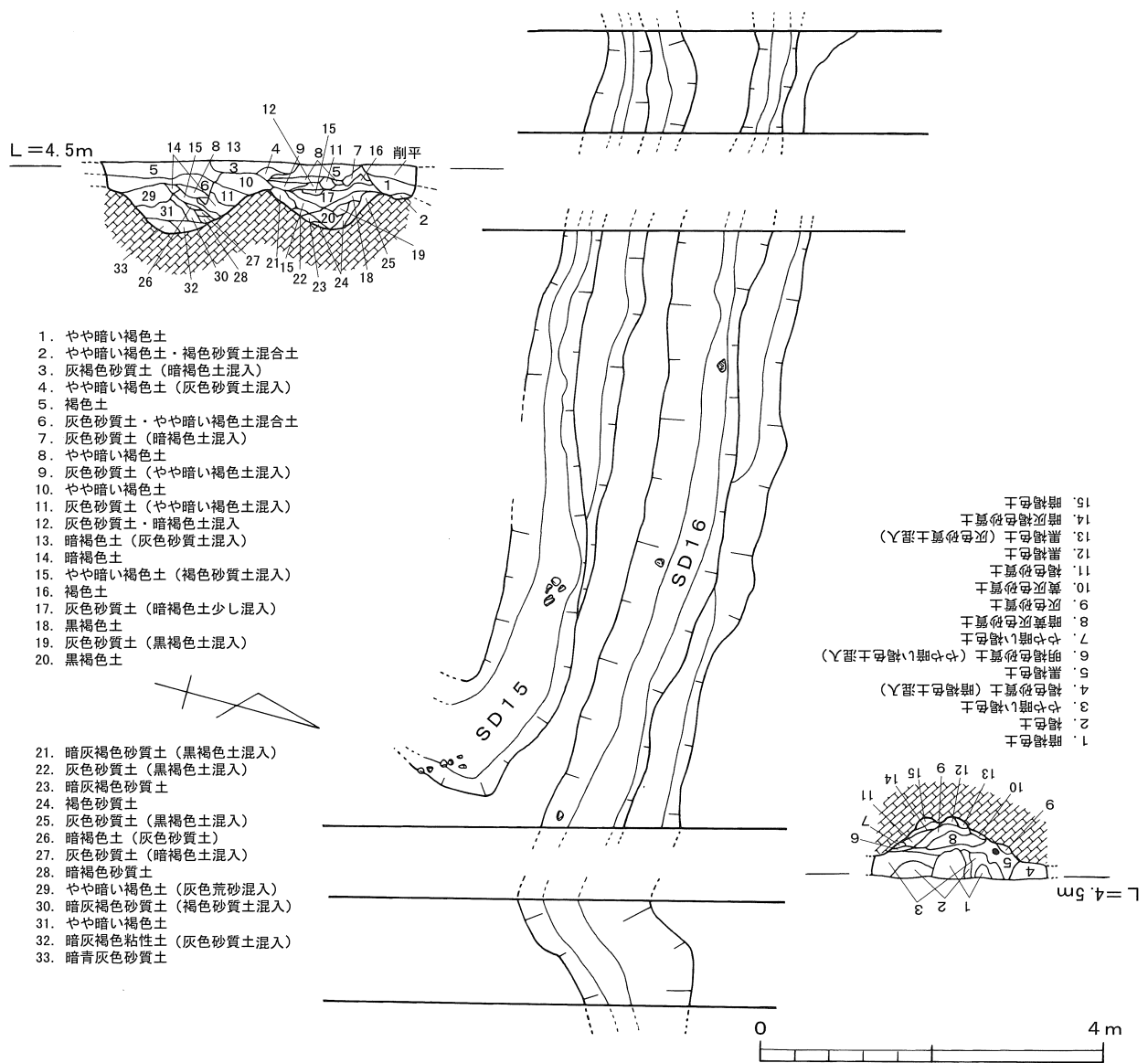
SD16 (第 22 図)

検出長約 11.6 m、幅約 1.4 m、深さ約 0.7 m の溝状遺構で、壁は外反気味に立ち上がる。主軸は N \sim 88 $^{\circ}$ ～W で、SD15 とほぼ平行関係にあり、切り合い関係は見られない。検出部東端で溝の方向を変えている可能性があるが、詳細は不明である。

埋土には弥生式土器片を多く含んでいるが、近世の陶磁器や土師質土器も多く出土しており、遺構の時期は 18 世紀頃と考えられる。

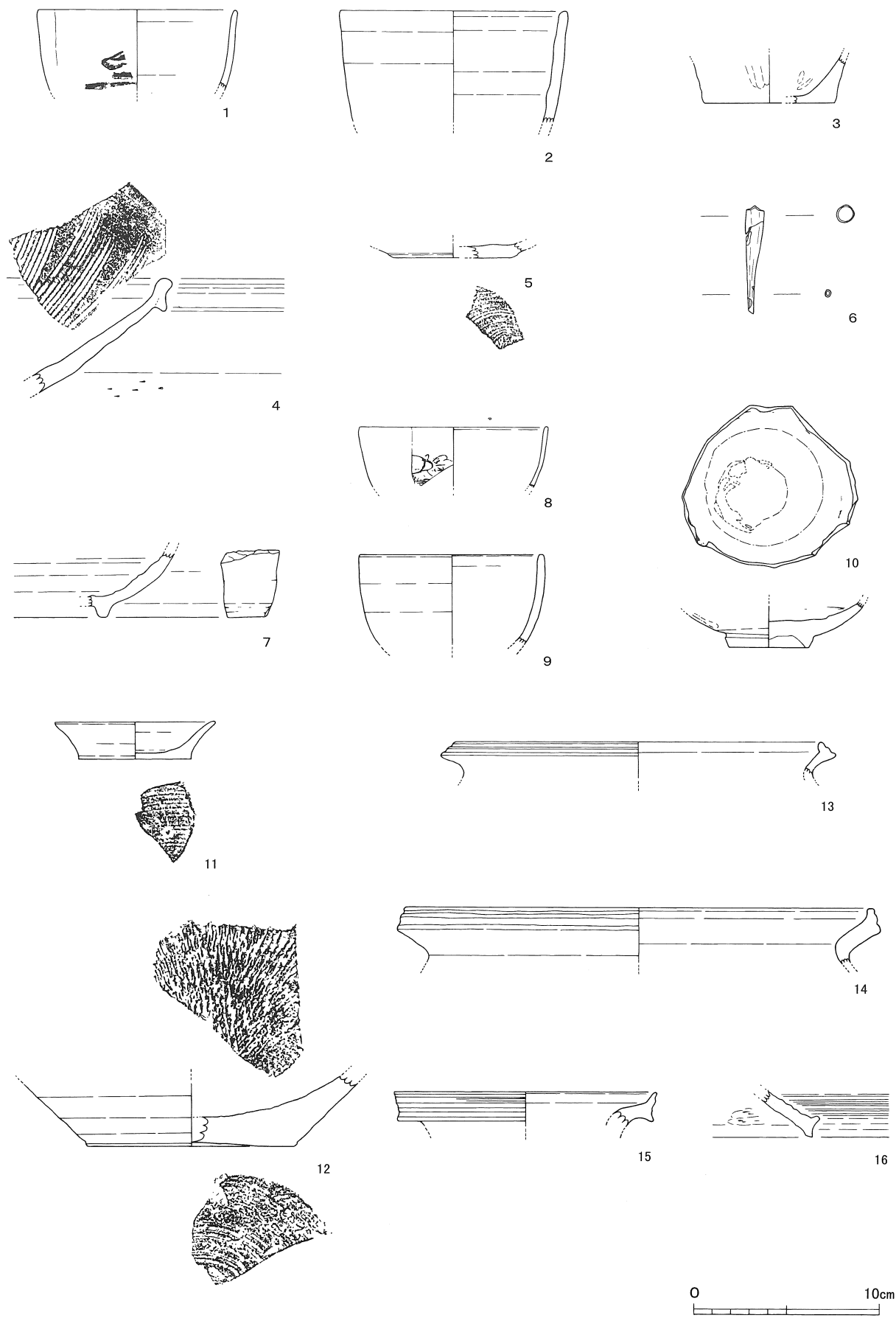
SD15・16 出土遺物 (第 23、24 図)

第 23 図-1～6 は SD15 から出土した遺物である。1 は京焼風陶器である。胎土は淡黄色で、内外面にくすんだ黄色の釉を施しており、貫入が入る。外面には染付を施している。口縁部は内湾気味に立ち上がり、やや外方に直線的に伸びる。端部は尖り気味である。2 は青磁で、胎土に黒色粒が少し混じる。口縁部は直線的に外方に伸び、端部は丸く仕上げている。外面には乳緑色の釉を施し、内面は露胎としている。火鉢や香炉である可能性がある。3 は弥生式土器の底部で、外面にヘラ磨き、ナデ、内面に指頭圧痕を施している。4 は陶器の播鉢で、口縁部は内湾気味に立ち上がった後、端部で外側に折り畳む。外面には回転ナデ調整を施しており、下方は回転ヘラ調整により仕上げられている。内面には 8 条を単位とする播溝を入れている。5 は土師質土器である。内外面ともに回転ナデ調整を施しており、底部には回転糸切痕が残る。6 は銅製の煙管の吸口である。肩部が見られないため、古泉 弘氏の編年の IV 期以降のものと考えられる⁽²⁾。7～16 は SD16 から



第22図 SD15・16遺構実測図

出土した遺物である。7は肥前系の染付で、体部に1条、高台に2条の線を染付している。また内面には粗い回転ナデ、畳付には回転ヘラを施し、露胎としている。口縁部の立ち上がりは、やや肥厚しながら内湾する。8も肥前系の染付で、外面に葉などが染付されている。口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部はやや尖り気味である。9は京焼風陶器で、御器手碗と呼ばれるものである。内外面に乳黄色の釉を施しており貫入が入る。口縁部は内湾しながら立ち上がる。10は唐津系の陶器である。内面見込に蛇ノ目釉ハギ、砂目積みを施し、それらを囲むように2条の染付を施している。外面には一部露胎になる部分があり、高台は回転ヘラによる削り出し高台である。口縁部は内湾しながら立ち上がる。11は土師質土器で、底径と口径の差が小さく、底部の縁がシャープなものである。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げている。内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部には静止糸切痕が残る。12は陶器の播鉢で、外面には回転ナデ、ナデ調整を施し、内面には斜格子状の播溝を入れている。底部には回転ヘラの可能性がある調整痕が残る。13～16は弥生式土器である。13は口縁部で、外反気味に立ち上がった後、複合口縁上段で内径する。複合口縁上段には2条の擬凹線を施しナデ調整している。14は13より肥厚する口縁部である。口縁部



第 23 图 SD 15·16 出土遺物実測图

は外方に直線的に伸び、2条の擬凹線が施された複合口縁上段で内傾する。内外面ともにナデ調整を施す。15も口縁部で、外反気味に立ち上がった後、4条の擬凹線を施した複合口縁上段で外傾する。内外面ともにナデ調整を施している。16は高杯の底部で、内面をヘラ削り、外面をナデにより調整している。外面は擬凹線を施した後、赤色塗彩されている。

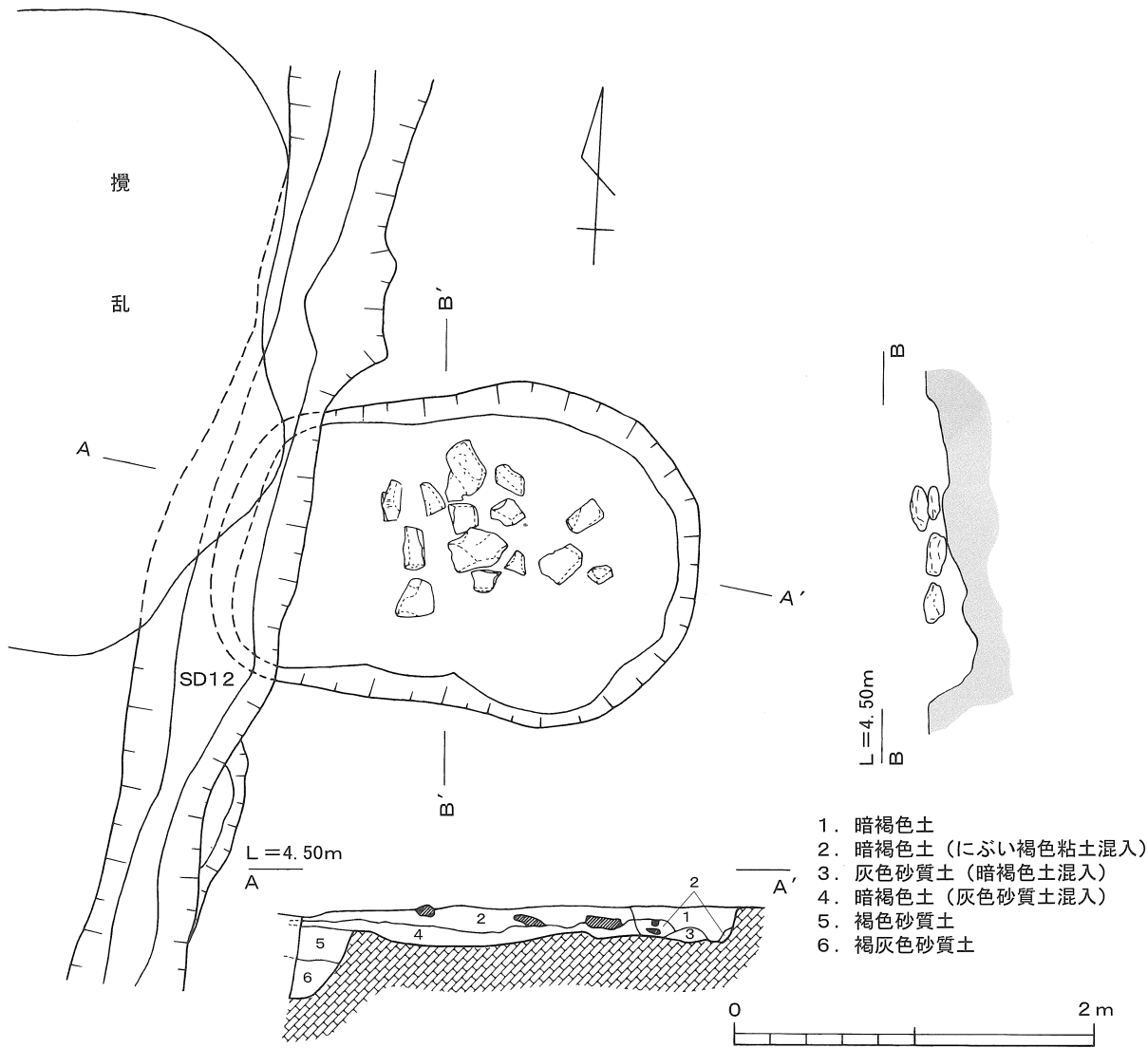
第24図-1はSD16から出土した寛永通寶である。「寛」字の脚部が付着しており、古寛永であると考えられる。裏面に文字はないようである。



SK28 (第25図)

後世に部分的な削平を受けているが、長径2.2m以上、短径1.94mの楕円径を呈す土壇で、深さ約0.2mを測り、壁は内湾気味に立ち上がる。主軸は長軸でN~89°~Wである。切り合い関係はSD12を切っており、遺構内からは基礎石と推定される石の製品・未製品と陶器が1片出土している。切り合い関係から近世以降の遺構と考えられる。

『旧小山村切図』によれば、付近に豪農成相家の屋敷があったとされており、石の製品・未製品は

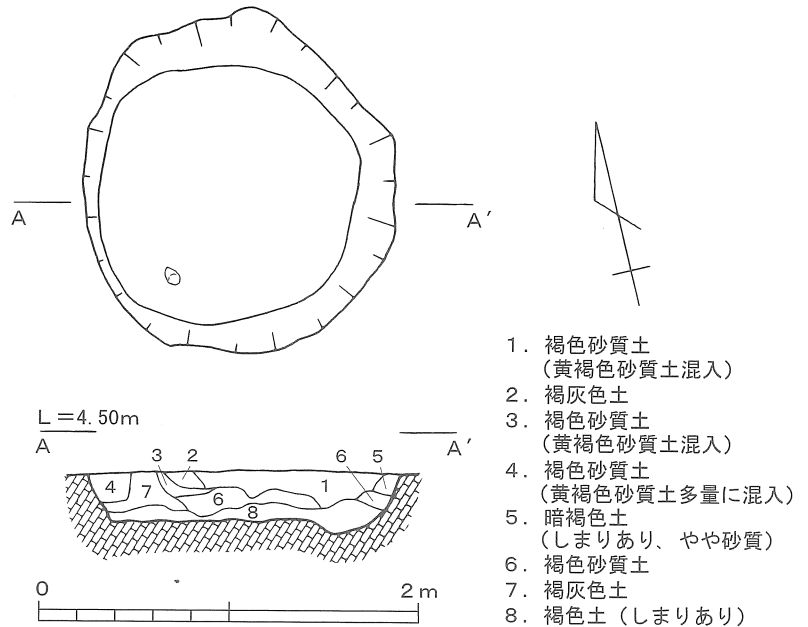


第25図 SK28遺構実測図

この屋敷に関連する遺物である可能性がある。

SK 26 (第 26 図)

長径 1.80 m、短径 1.64 m で、ほぼ円形状を呈す。深さは最深部で 32 cm を測るが、底面は深さ 25 cm 付近で平坦にしている。壁の立ち上がりは、西側で外反気味に立ち上がり、少し内湾するが、東側は内湾しながら立ち上がる。遺構内からは風化の著しい土師質土器が 1 点出土しているが、切り合い関係は、SD 12 を切っており、近世以降の遺構と考えられる。



第 26 図 SK 26 遺構実測図

SK 28・SK 26 出土遺物 (第 27、28 図)

第 27 図-1～3 は凝灰岩製延石の未製品と考えられる。1 は片側に目打ちを施し、石を加工しようとしている。表裏面ともに加工痕が残るが、裏面は湾曲気味に、丁寧に仕上げている。側面 2 面は欠損している。2 は片側に目打ちを施し、長方形の板石状の製品を造ろうとしたと考えられる。加工痕は表裏両面に残るが、裏面は湾曲気味に、丁寧に造られている。3 は大部分を欠損しているが、製品の可能性もある。表裏面ともに加工痕が残る、裏面は丁寧に造られている。

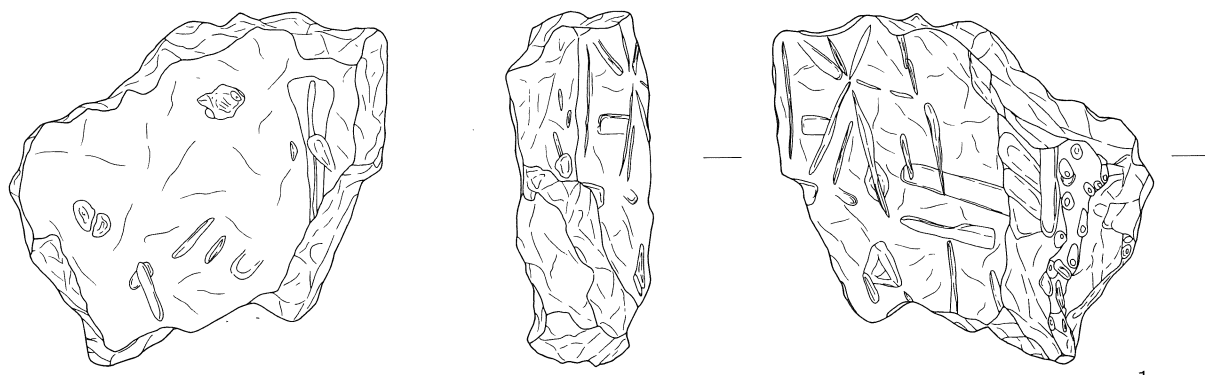
第 28 図-1 は欠損はあるものの、残存部の形状から礎石の可能性があるので、表面には多数の工具痕が残る、裏面は平坦かつ丁寧に仕上げられている。欠損側端部には表面から繰り込み状の加工痕が残る。2 は延石と考えられる遺物で、表裏両面に工具痕が残るが、裏面は丁寧に仕上げられている。片側は欠損しているものの、復原すると裏側に湾曲気味の板石になると考えられる。3 は陶器で、外方に直線的に立ち上がった後、口唇部で外傾し、端部を尖り気味に仕上げる。内外面ともに施釉している。4 は SK 26 から出土した遺物で、外反気味に立ち上がる。風化が著しく、調整も不明であるが、土師質土器の可能性があるのである。

SE 06 (第 29 図)

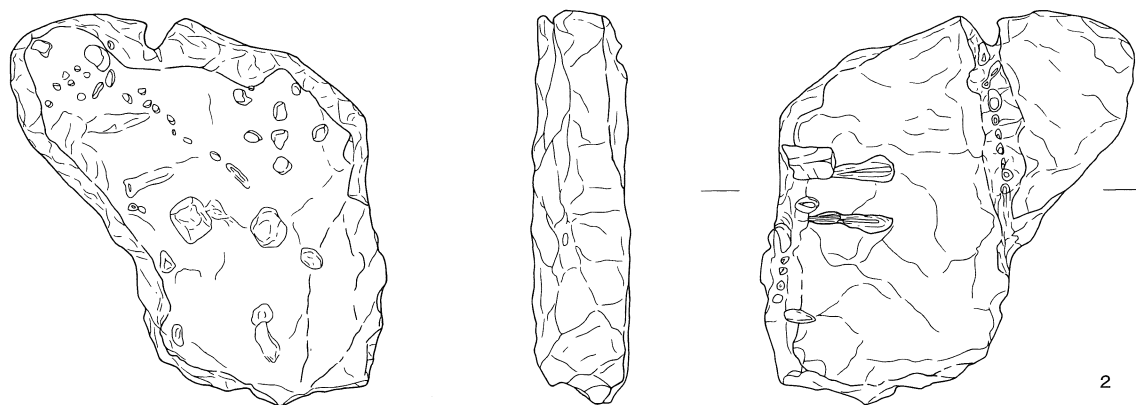
長径 3.46 m、短径 3.14 m のいびつな円形状に掘り込んだ井戸である。壁は南側で外反気味に立ち上がり、少し内湾した後、再び外反する。一方、北側は外方に直線的に立ち上がった後、平坦面を造り、再び外反気味に立ち上がる。掘り方内からは、井戸枠の板 1 枚と竹製のタガが出土している。埋土からは拳大の石が多量に検出されており、共伴遺物から 17 世紀後半から 18 世紀前半頃に井戸を埋め戻したものと考えられる。

SE 06 出土遺物 (第 30 図)

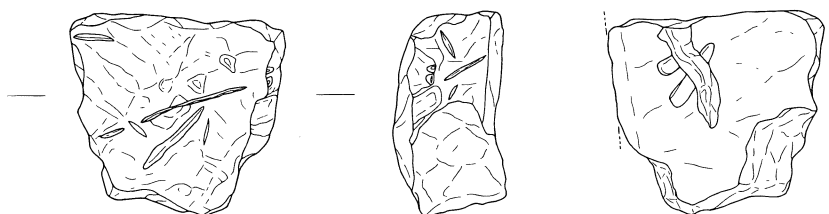
第 30 図-1 は京焼風陶器で、御器手碗と考えられる。口縁部は外側に直線的に立ち上がり、端部



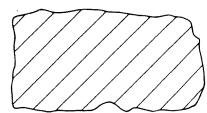
1



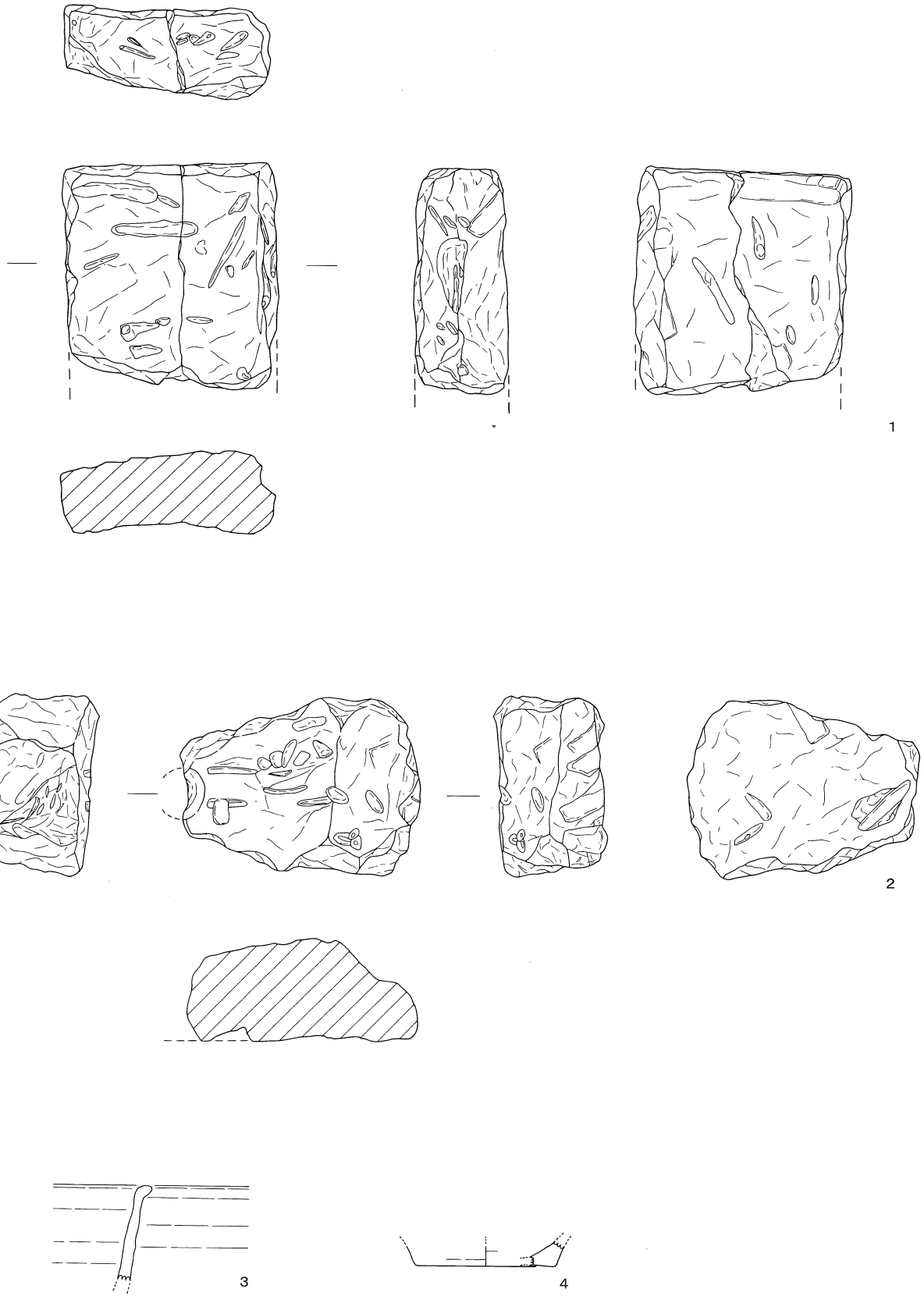
2



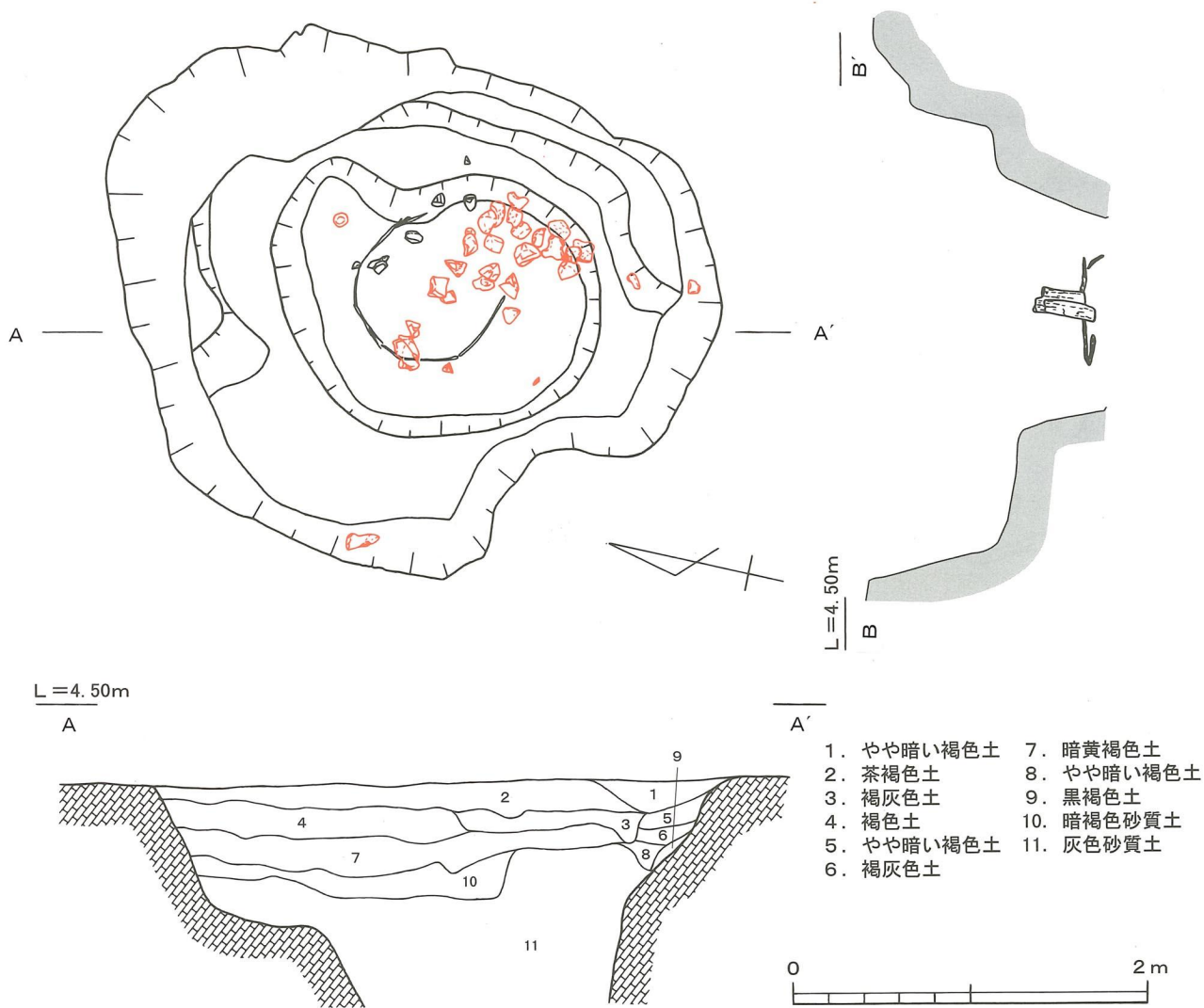
3



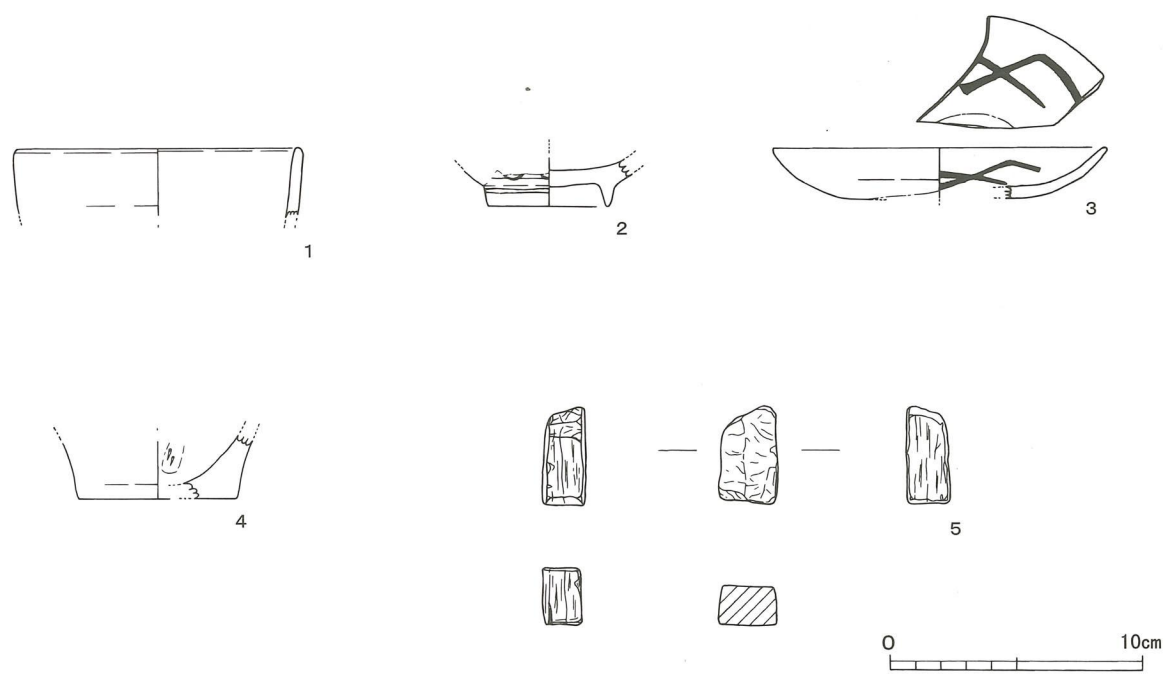
第 27 图 SK 28 出土遺物実測図



第 28 图 SK 28 · SK 26 出土遺物実測図



第29図 SE06遺構実測図



第30図 SE06出土遺物実測図

は丸く仕上げる。内外面ともに施釉し貫入が入る。2は肥前系の染付で高台畳付に砂が付着する。高台見込は周囲よりも深く削られている。内外面ともに施釉し、外面には染付を施す。3は青磁で、口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げる。内面見込には蛇ノ目釉ハギ、染付を施す。4は弥生式土器の底部で、外反気味に立ち上がる。内面はヘラ削りで調整している。5は頁岩製の砥石で、3面に使用痕が残る。

SA01 (第31図)

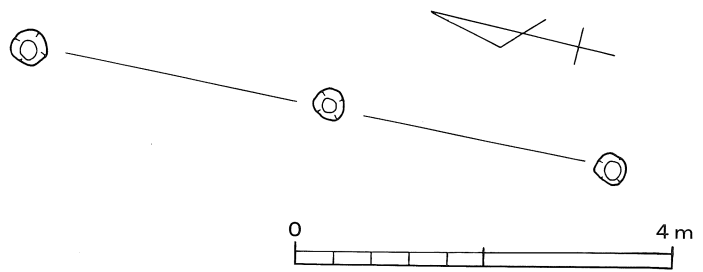
1間約3.2mの柵列で、2間確認している。遺構の主軸はN \sim 2 $^{\circ}$ ~Eで、SD12とほぼ平行関係にある。遺物が出土していないため、詳細は不明である。

SD09 (第32図)

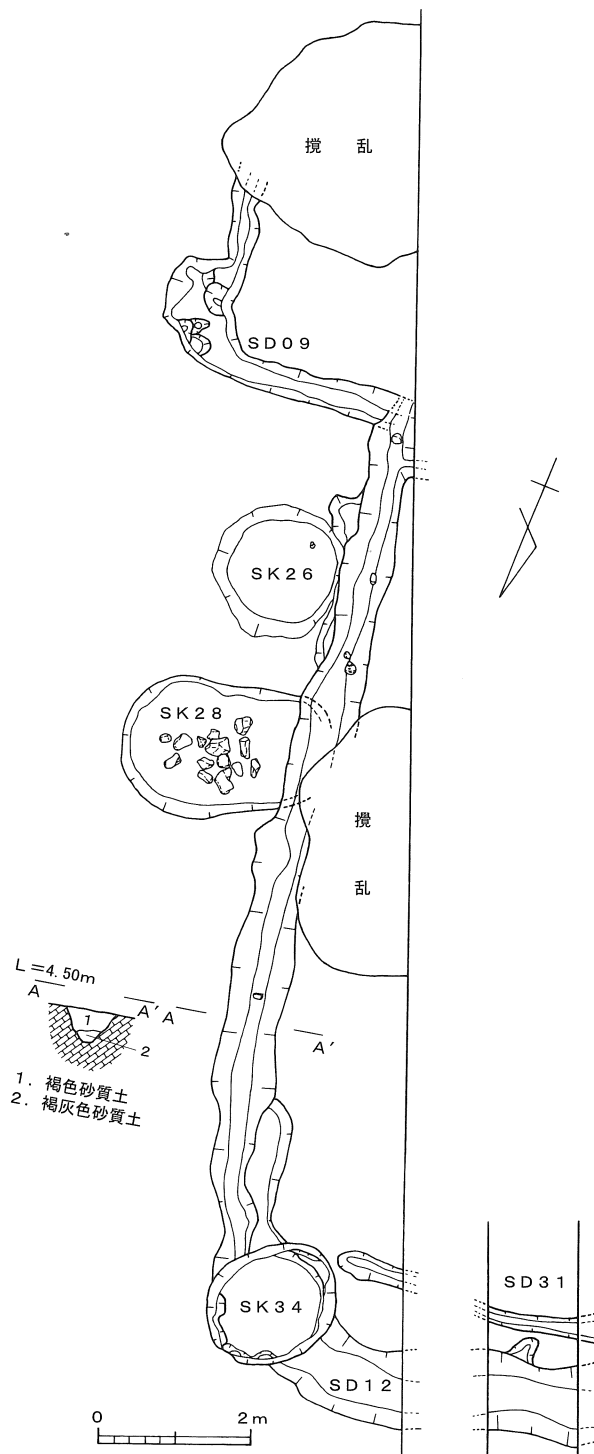
幅約0.4mの溝状遺構で、後世の削平等のため、両端部を確認できないが、検出長は東西で3.4mを測り、ほぼ直角に曲がり、南北で約2.6mを測る。湾曲部では溝の幅が広がっている。主軸は南北でN \sim 83 $^{\circ}$ ~E、東西でN \sim 6 $^{\circ}$ ~Wで、区画された区域の角に当たると考えられる。埋土から遺物は出土していないが、切り合い関係はSD12に切られている。

SD12 (第32図)

深さ約0.4mの溝状遺構で、壁は外方に直線的に立ち上がる。調査区外に伸びるため、両端部を確認できないが、検出長は南北で約13.2mを測り、湾曲して西側に約90 $^{\circ}$ 方向を変え、東西で約6.0mを測る。主軸は南北でN \sim 9 $^{\circ}$ ~W、東西でN \sim 79 $^{\circ}$ ~Eにあり、区画された区域の角に当たる



第31図 SA01遺構実測図



第32図 SD09・SD12・SK34遺構実測図

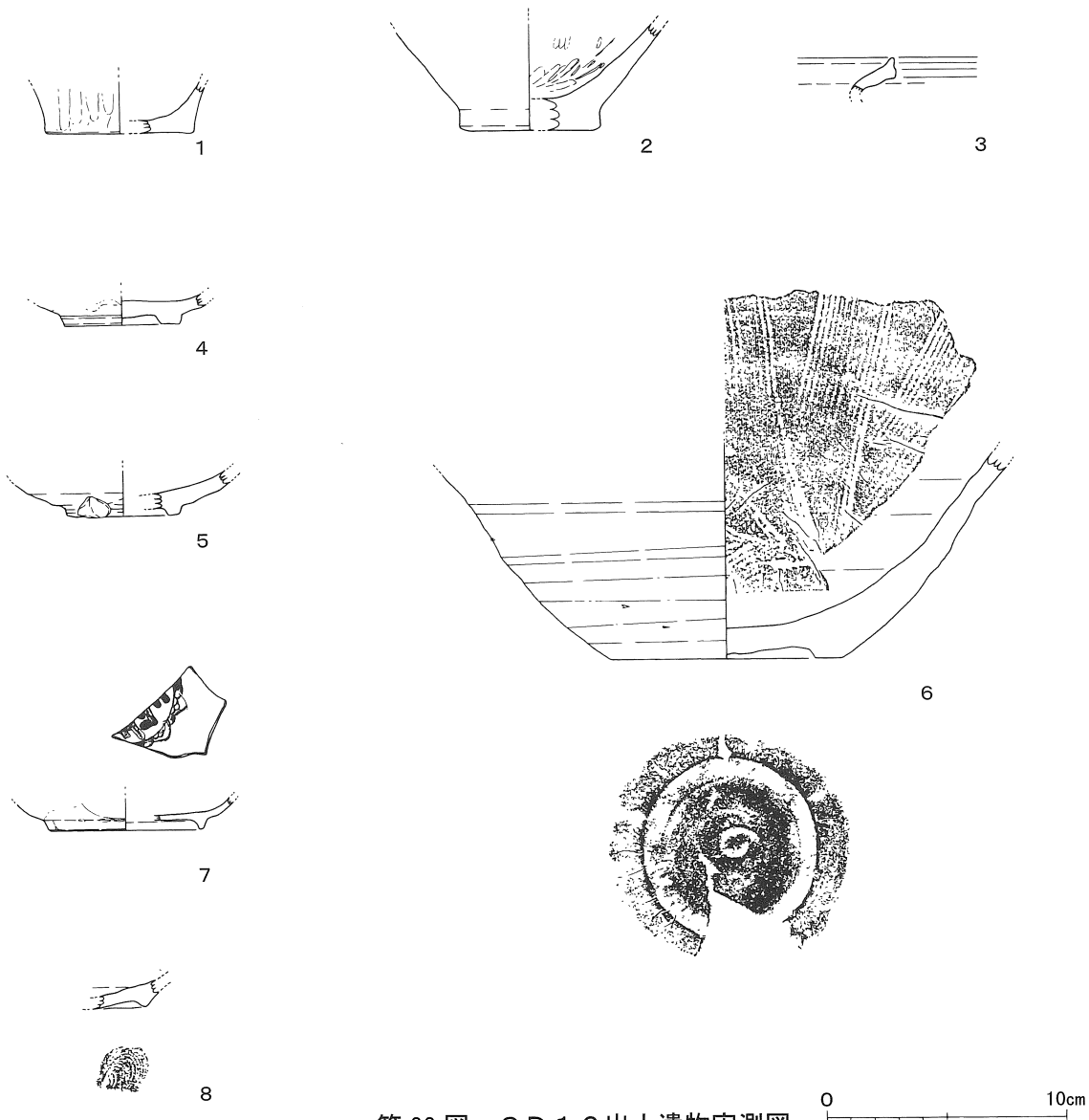
と考えられる。埋土には弥生式土器が混入するが、17～18世紀の陶磁器が含まれており、近世の溝であると考えられる。切り合い関係はSK28、SK26、SK34に切られている。

SK34 (第32図)

長径1.84m、短径1.44mの楕円形を呈す土壌で、主軸は長軸でN～25°～Eにある。遺物は出土しなかったが、近世遺構であるSD12を切っており、近世以降の遺構であると考えられる。検出された位置がSD12の湾曲部と重なるため、SD12に関連する土壌である可能性がある。

SD12出土遺物 (第33図)

第33図-1～3は弥生式土器である。1は底部で、外反気味に立ち上がる。外面にヘラ磨き、内面にナデを施す。2も底部で、外方に直線的に立ち上がる。台状に底部をナデ出し、内面にはヘラ削りを施す。3は口縁部で、1条の擬凹線を施す複合口縁上段で内傾する。端部は尖り気味である。内外面ともにナデ調整を施す。4～6は陶器で4は高台がヘラ削りにより削り出されている。内外面ともに施釉し貫入が入るが、高台周辺は露胎としている。5は内湾気味に立ち上がるもので、高



第33図 SD12出土遺物実測図

台はへら削りにより削り出す三日月高台である。内外面ともに施釉し貫入が入るが、高台周辺は露胎としている。高台に粘土塊が残り、胎土目積みをしているものと考えられる。6は播鉢で、素焼のものである。

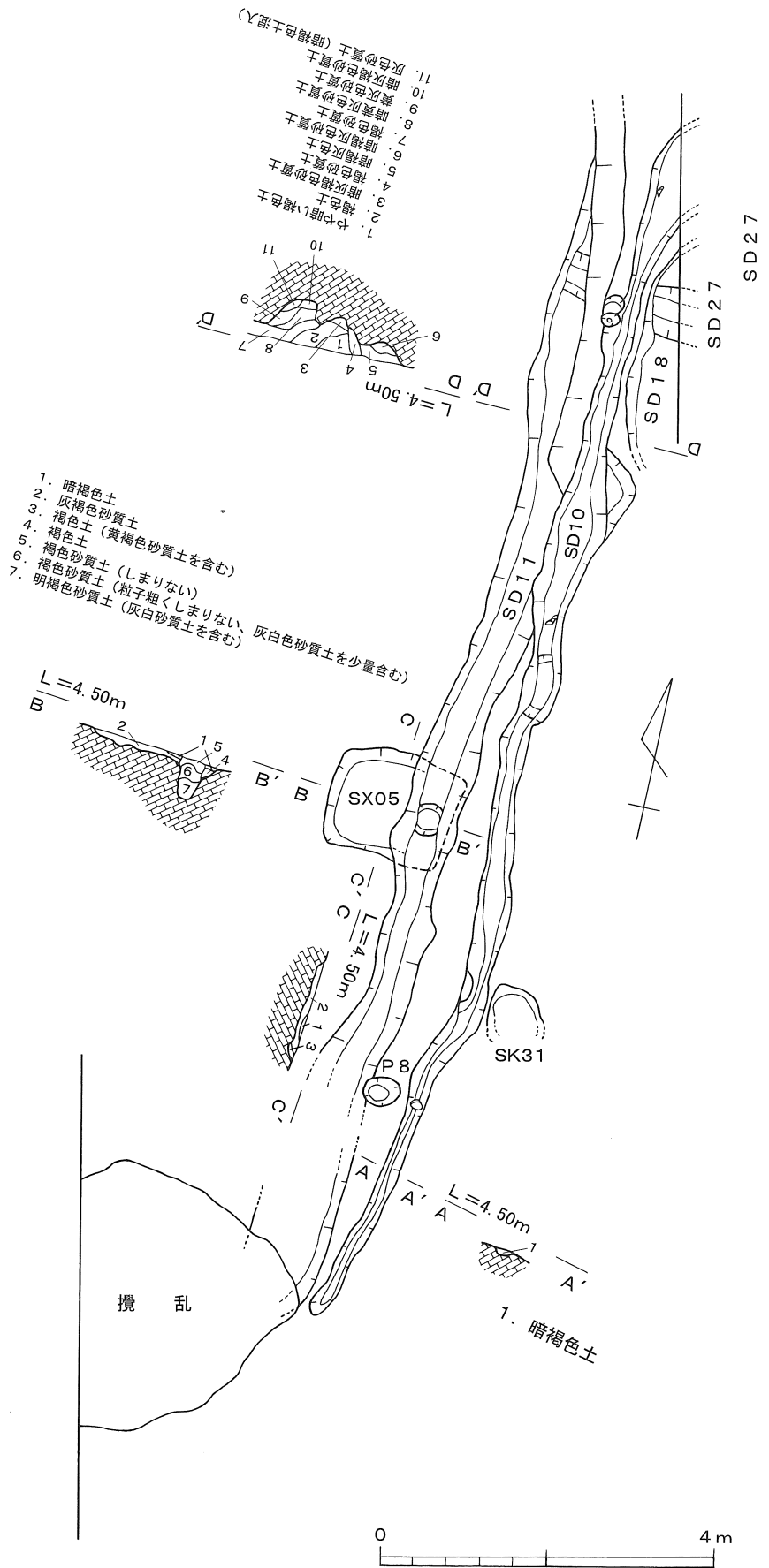
口縁部は内湾気味に立ち上がった後、やや外反する。外面は回転ナデ、回転へらで、内面は回転ナデで調整し、内面には12条を単位とする播溝を施す。底部は回転へらにより高台を造る。7は肥前系の染付皿で、器厚が薄く、内湾しながら立ち上がる。内面見込には「壽」が染付されている。8は土師質土器で、内外面ともに回転ナデで調整する。底部に回転糸切痕が残る。

SK 31 (第34図)

SK 31はSD 07を切っている土壌で、直径約0.6mを測る。後世の削平を受けており、詳細は不明である。遺物は弥生式土器が出土している。

SD 10 (第34図)

調査区外に伸びるため、一方の端部が不明であるが、検出長約15m、幅約0.4m、深さ約0.4mの溝状遺構である。主軸はN \sim 1 $^{\circ}$ ~Wで、SD 11、SD 12、SA 01とほぼ平行関係にある。切り合い関係はSD



第34図 SK 31・SD 10・SD 11・SD 18遺構実測図

11、SD18を切っており、遺構内からは土師質土器が出土している。

SD11 (第34図)

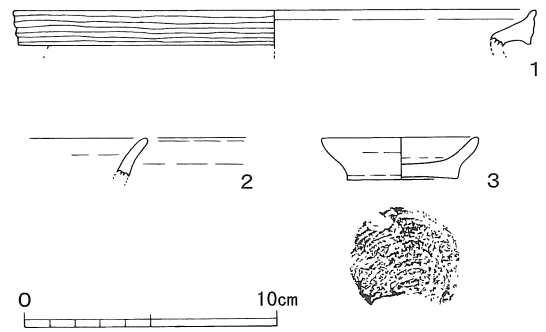
後世の削平等のため、両端部は不明であるが、検出長約14.3m、幅約0.6m、深さ約0.6mの溝状遺構である。主軸はN \sim 7 $^{\circ}$ ~Eで、SD10、SD12、SA01とほぼ平行関係にある。切り合い関係はSD10に切られており、遺構内からは弥生式土器のほか、17~18世紀頃の陶器、土師質土器が出土している。

SD18 (第34図)

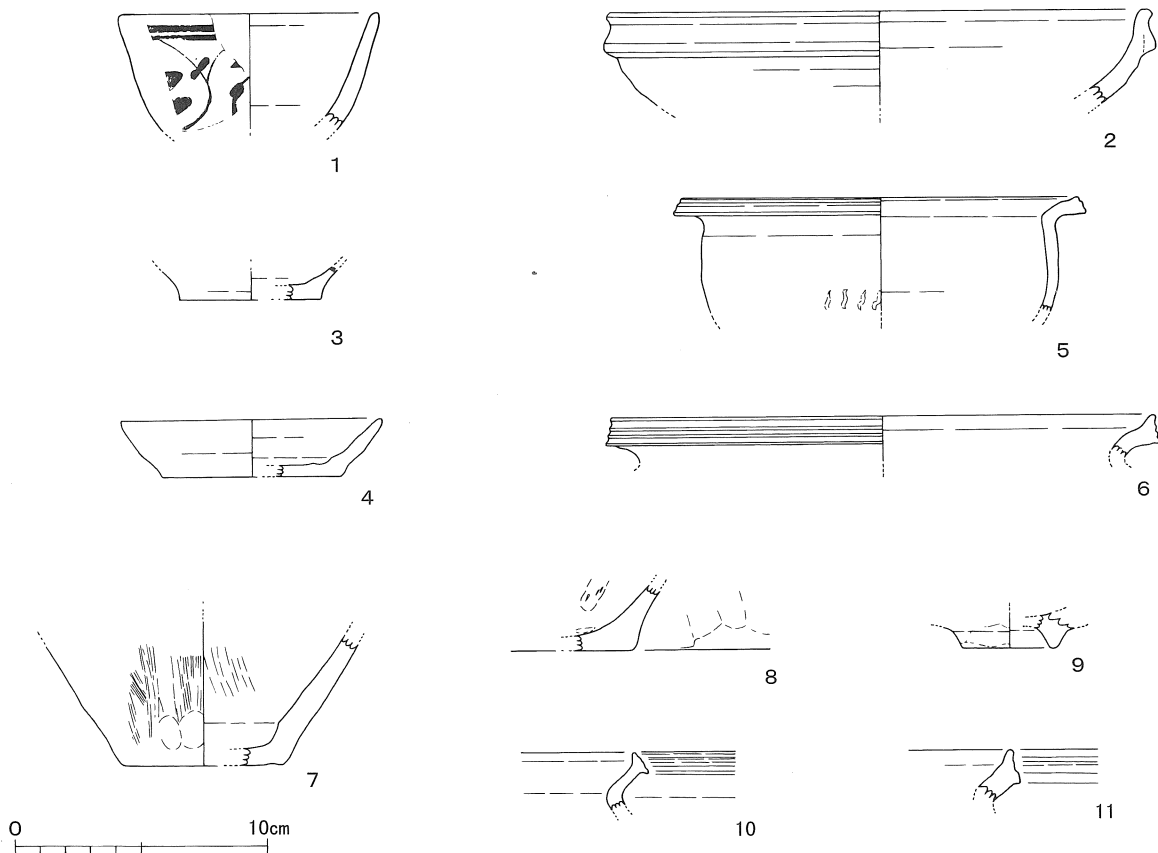
調査区外に伸びるため、両端部は不明であるが、検出長約3.0m、検出幅約0.6m、深さ約0.2mの溝状遺構である。SD10に切られており、遺構内からは弥生式土器のほか、白磁が出土している。

SK31・SD10・SD11・SD18出土遺物
(第35、36図)

第35図-1、2はSK31出土遺物である。1は弥生式土器の口縁部で、3条の凹線を施す複合口縁上段で内傾する。内外面ともにナデで調整している。2は土師質土器の口縁部で、外反しながら立ち上が



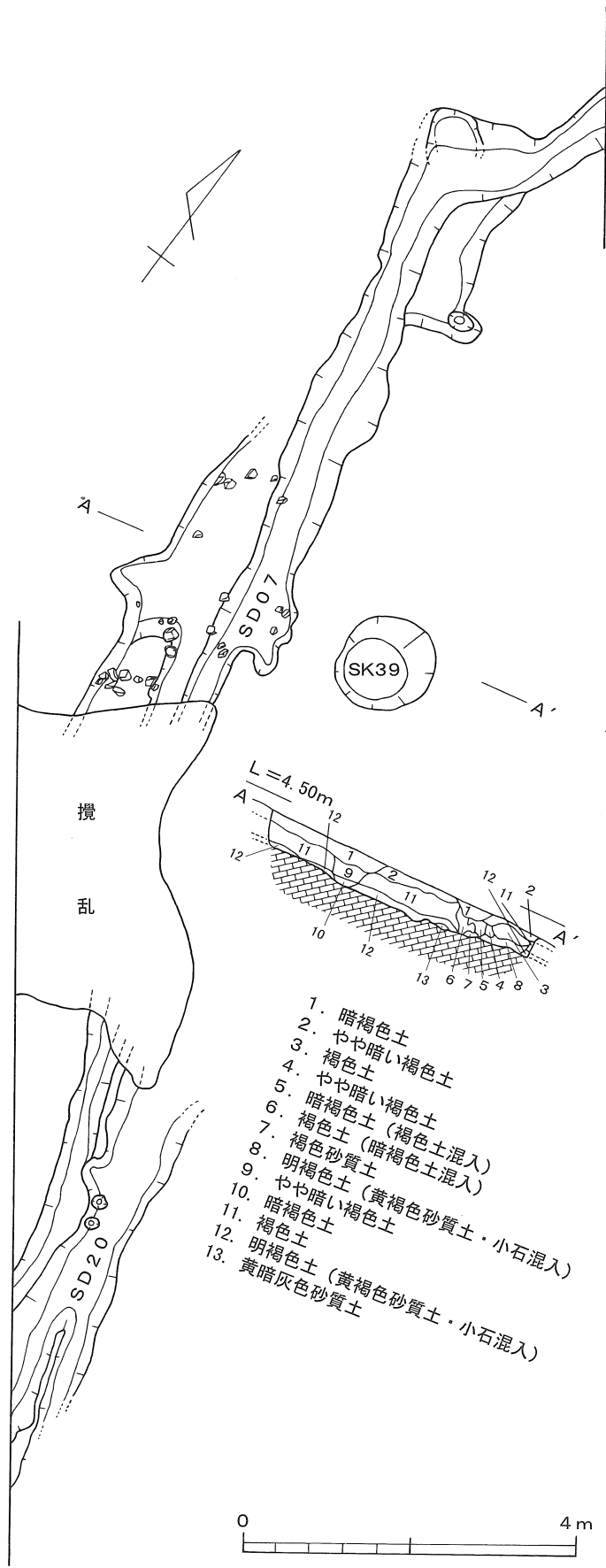
第35図 SK31・SD10出土遺物実測図



第36図 SD11・SD18出土遺物実測図

り、端部を丸く仕上げている。内外面ともに回転ナデを施す。3はSD10出土遺物で、外反しながら立ち上がり、口唇部で内湾気味となるものである。端部は尖り気味である。内外面ともに回転ナデを施し、底部には回転糸切痕が残る。

第36図-1~8はSD11出土遺物である。1は陶胎染付で、外面に染付を施す。口縁部は直線的に外方に立ち上がり、端部は丸く仕上げている。内外面ともに施釉しており貫入が入る。2は陶器の鉢である。口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部で外方に折り畳んでいる。内外面ともに施釉している。3、4は土師質土器である。3は口縁部が外反しながら立ち上がる。内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部の縁はシャープに仕上げている。4は口縁部が外方に直線的に開き、端部を丸く仕上げたものである。内外面ともに回転ナデを施している。5~8は弥生式土器である。5は鉢で、口縁拡張部に擬凹線を施す。体部外面には、ナデ調整の後、刺突文を施している。6は口縁部で、外反しながら立ち上がり、3条の擬凹線を施す複合口縁上段で内傾する。内外面ともにナデを施している。7は底部で、外方に直線的に立ち上がる。外面はハケ目、指頭圧痕、ナデにより、内面はハケ目により調整されている。8も底部で、やや外反気味に立ち上がる。外面にヘラ磨き、内面にヘラ削り、指頭圧痕を施している。9~11はSD18出土遺物である。9は白磁の高台で、一部露胎が見られる。回転ヘラによる削り出し高台と考えられる。10、11は弥生式土器の口縁部である。10は外方に直線的に立ち上がった後、3条の擬凹線を施す複合口縁上段は内傾する。内外



1. 暗褐色土
2. やや暗い褐色土
3. 褐色土
4. やや暗い褐色土
5. 暗褐色土
6. 褐色土 (褐色土混入)
7. 褐色土 (暗褐色土混入)
8. 明褐色土
9. やや暗い褐色土 (黄褐色砂質土・小石混入)
10. 暗褐色土
11. 褐色土
12. 明褐色土 (黄褐色砂質土・小石混入)
13. 黄暗灰色砂質土

第37図 SD07・SD20・SK39遺構実測図

面ともにナデを施す。11は外方に立ち上がった後、2条の凹線を施す複合口縁上段は内傾する。内外面ともにナデを施す。

SD07 (第37図)

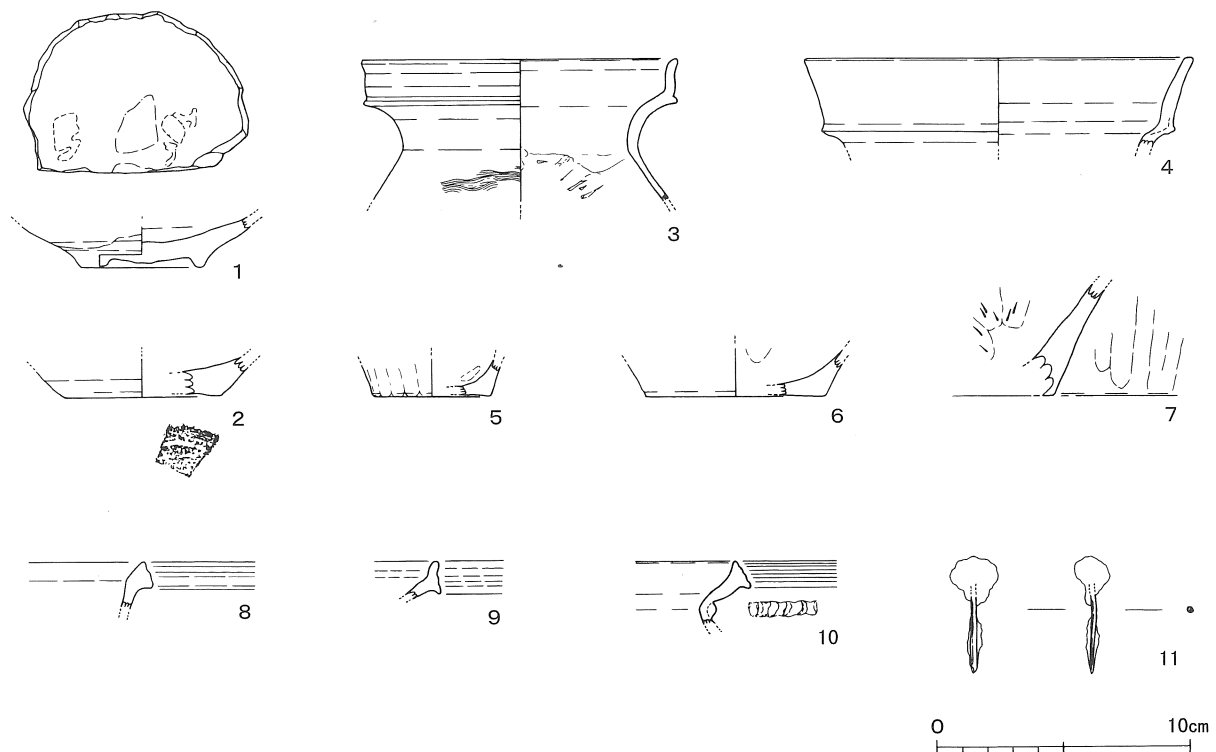
後世の削平等のため、両端部は不明であるが、検出長は南北で約8.6m、幅約0.6～1.5m、深さ0.4mを測る溝状遺構で、北側で東に屈折し調査区外に伸びる。主軸はN～13°～Wで、SD20と平行関係にあるが、1本につながる可能性もある。切り合い関係はSD13を切っており、SD10に切られている。遺構内からは弥生式土器のほか、近世の陶磁器が出土している。

SD20 (第37図)

後世の削平等のため、両端部は不明であるが、検出長約5.7m、幅約1.1mを測る溝状遺構で、主軸はN～14°～Wで、SD07と平行関係にあるが、1本につながる可能性もある。切り合い関係はSK42、SE05に切られている。遺構内からは弥生式土器のほか、近世の陶磁器が出土している。

SK39 (第37図)

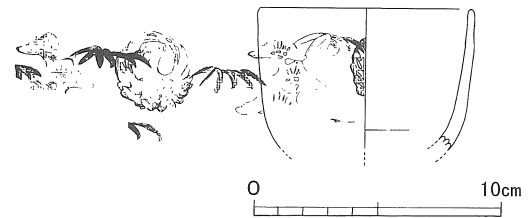
直径約1.1～1.2mの円形状土壇で、切り合い関係は弥生時代中期の遺構と考えられるSD13を切っている。弥生式土器とともに近世の陶磁器が出土している。



第38図 SD07出土遺物実測図

SD07 出土遺物 (第 38 図)

第 38 図-1 は陶器で、外反気味に立ち上がる。内外面ともに施釉するが、高台周辺は露胎としている。高台は体部との区別が明確でなく、回転糸切の後、回転ヘラにより三日月高台を造り出す。内面見込には砂が付着する。2 は土師質土器で、外面に回転ナデを施す。底部には回転糸切痕が残る。3～10 は弥生式土器である。3 は外反しながら立ち上がり、複合口縁上段で直立する。端部はやや外傾し、尖り気味に仕上げている。体部外面に波状文、内面にヘラ削りを施している。4 は口縁部で、外反した後、複合口縁上段でさらに外反し、端部を平坦に仕上げている。内外面ともにナデを施す。5～7 は底部である。5 は外反気味に立ち上がり、外面にヘラ磨き、内面に指頭圧痕を施す。6 も外反気味に立ち上がり、外面はナデ、内面はヘラ削りで調整する。7 も外反気味に立ち上がり、外面にヘラ磨き、内面にヘラ削りを施す。8～10 は口縁部である。8 は 2 条の擬凹線を施す複合口縁上段で内傾する。内外面をナデ調整している。9 は 2 条の擬凹線を施す複合口縁上段で内傾する。端部は外傾し、丸く仕上げている。10 は外反した後、やや内湾し、3 条の擬凹線を施す複合口縁上段で内傾する。頸部外面に刻目突帯文を貼り付ける。11 は鉄製の釘で、径 2 mm の細身のものである。



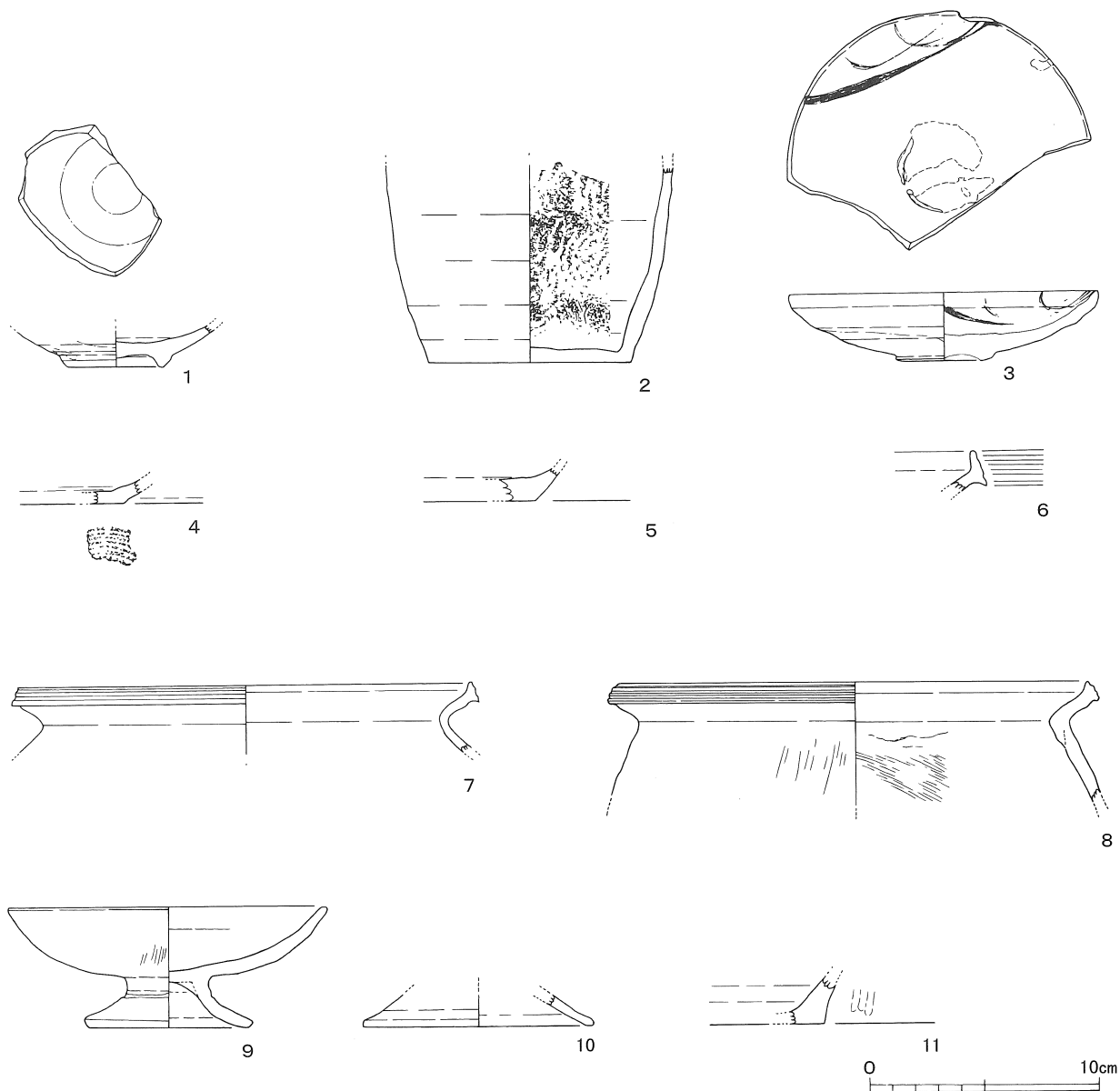
第 39 図 SK 39 出土遺物実測図

SK 39 出土遺物 (第 39 図)

第 39 図-1 は磁器で、内湾しながら立ち上がった後、やや外方に直線的に伸びる。外面には鶴、松をコンニャク印版し、竹を上絵付している。

SD 20 出土遺物 (第 40 図)

第 40 図-1 は白磁で、口縁部は内湾気味に立ち上がる。高台は回転ヘラによる削り出し高台で、周囲は露胎としている。外面には 2 条の工具痕が残る。内面見込には蛇ノ目釉ハギを施す。2 は唐津系の陶器で、外側に直線的に立ち上がり、体部やや下方で少し屈曲する。外面はナデの後、釉を施し、底部に灰が付着する。一方、内面は青海波文、ナデを施し、露胎としている。3 は絵唐津皿で、内湾しながら立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げている。内外面ともに施釉し、内面には施文するが、高台周辺は露胎としている。高台は回転ヘラによる削り出しで、高台畳付は丸く成形されている。内面見込には砂目積みを施すが、高台の溶着痕が残る。4、5 は土師質土器である。4 は外反気味に立ち上がり、内外面ともに回転ナデを施す。底部には回転糸切痕が残る。5 は内湾気味に立ち上がり、内外面ともに回転ナデを施す。6～11 は弥生式土器である。6 は口縁部で、3 条の擬凹線を施す複合口縁上段で内傾する。内外面ともにナデを施し、端部は平坦に仕上げている。7 も口縁部で、外反した後、内湾気味に立ち上がり、2 条の擬凹線を施す複合口縁上段で内傾する。端部は尖り気味に仕上げている。内外面ともにナデで調整しているが、体部外面にはハケ目を施していたようである。8 は体部内外面をハケ目で調整している。内外面ともにナデ調整を施す口縁部は、外方に直線的に立ち上がり、3 条の擬凹線を施す複合口縁上段で内傾する。9 は外面と脚部内面を赤彩する低脚坏である。口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部は丸く仕上げている。外面は



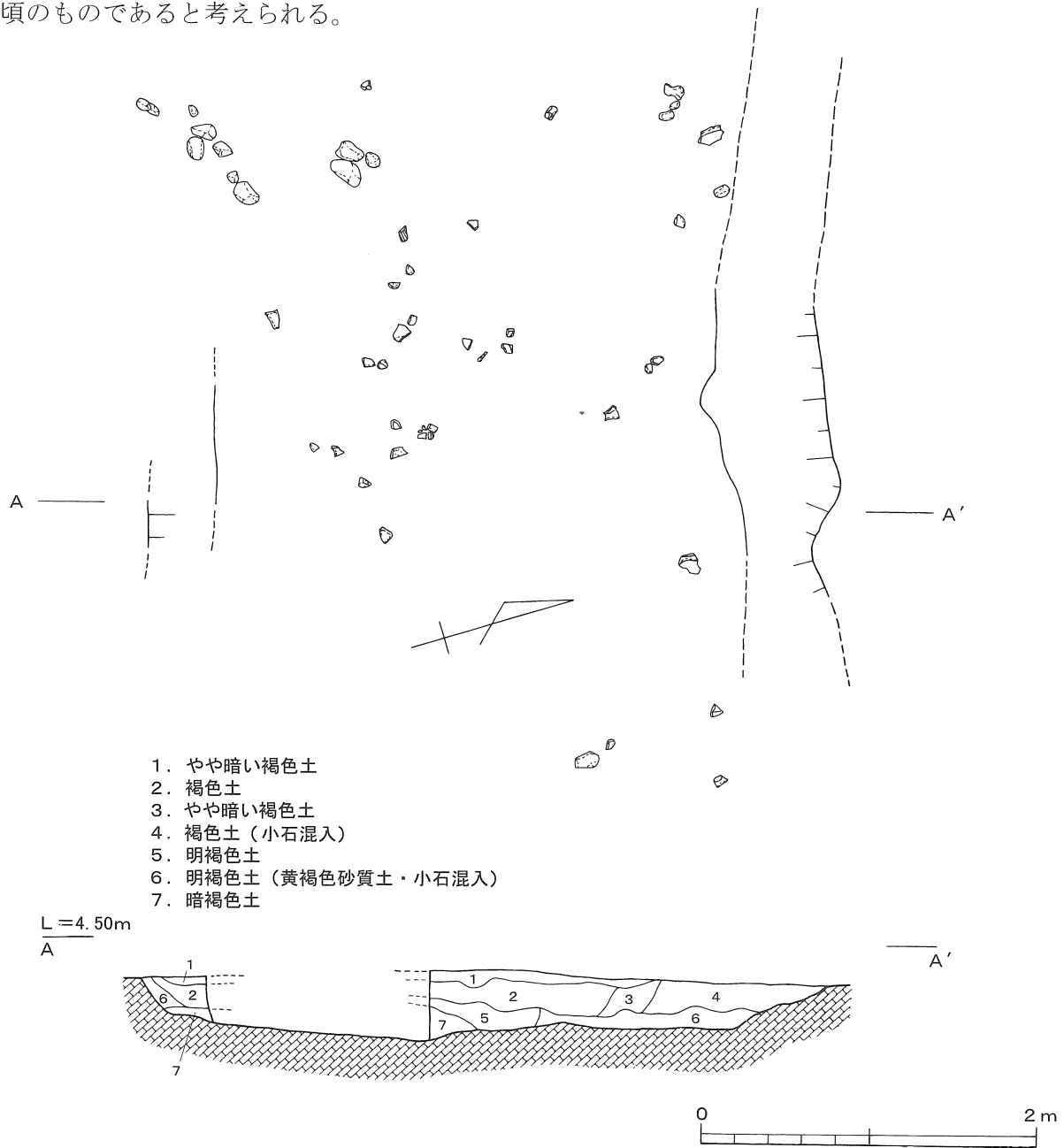
第40図 SD20出土遺物実測図

ハケ目、内面はナデで調整している。脚部は外面をナデ、内面をヘラ削りで調整する。外面には1条のヘラ状工具痕が残る。10は高杯の脚部で、外反気味に伸び、端部を丸く仕上げている。風化が著しいが、内面はヘラ削りで調整している可能性がある。11は底部で外反気味に立ち上がり、外面にヘラ磨きを施す。

SD13 (第41図)

東西端部はともに調査区外に伸び、近世以降の破壊を多分に受けているため、詳細は不明であるが、検出長約1.8m、幅約4.1m、深さは最深部で約0.4mを測る。SX05の検出状況からSD13の遺構上面が削平されている可能性は高く、実際には深さのある溝であったと推定され、環濠のようなものも考える必要もあろう。底面は中央部付近が若干凹むが、比較的平坦に造っており、壁は北側で外反した後、内湾気味に立ち上がる。一方、南側は内湾気味に立ち上がる。主軸はN \sim 73 $^{\circ}$ ~Wで、SD06 (N \sim 81 $^{\circ}$ ~W) と平行関係にある可能性があり、平行関係にあるなら2重

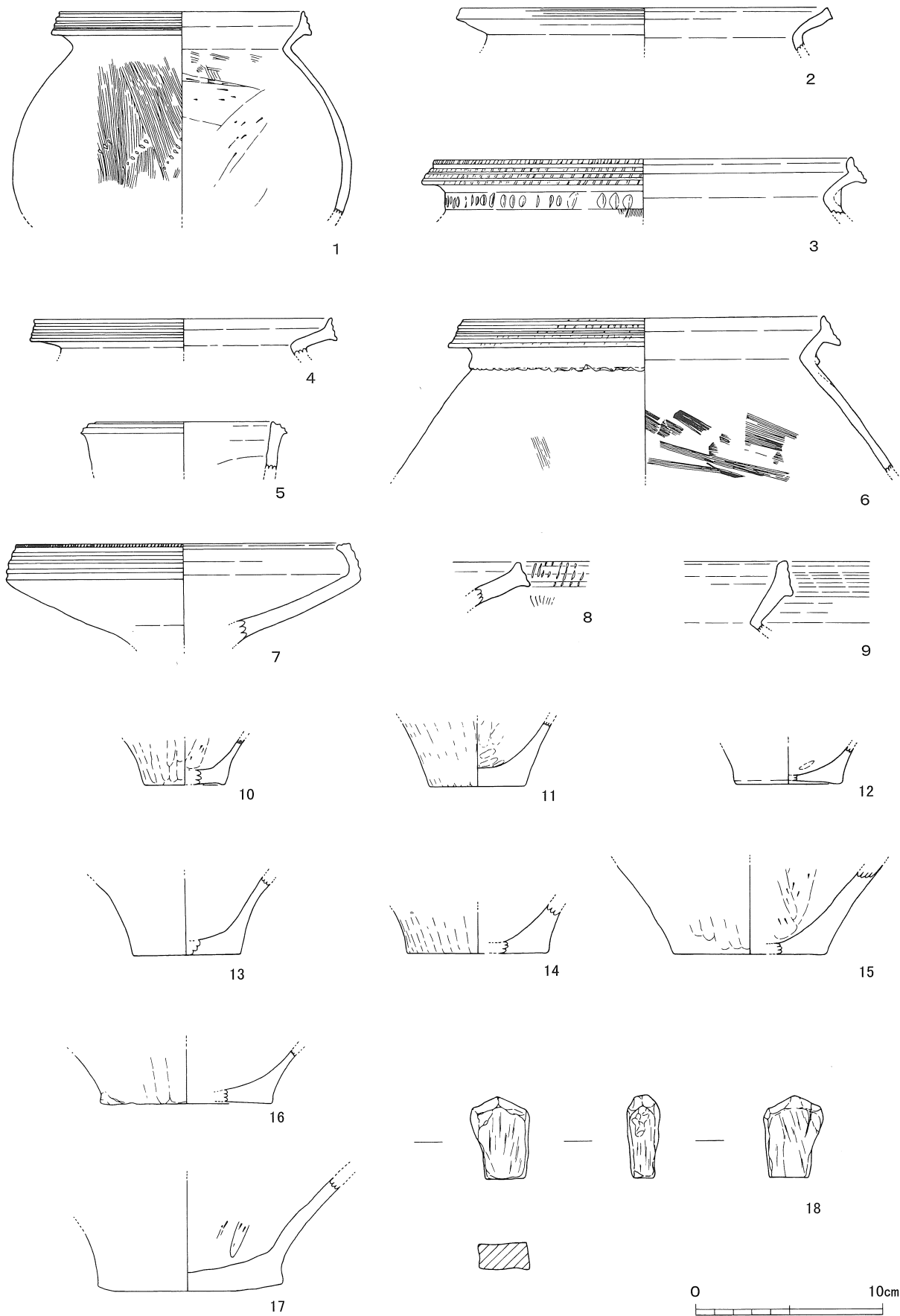
の環壕のようなものも考える必要がある。切り合い関係は、近世以降と推定される遺構に破壊されており、SK39、SP01、SX07、SD07、SK20、SX06に切られている。遺物は大部分が弥生式土器で、松本岩雄氏の編年のIV-2に当たる時期のものが多く⁽³⁾、遺構の時期もこの頃のものであると考えられる。



第41図 SD13遺構実測図

SD13出土遺物 (第42図)

第42図-1~17は弥生式土器である。1は体部外面にハケ目を施した後、列点文を施す。内面はハケ目、ヘラ削りで調整している。口縁部は外反気味に立ち上がった後、3条の擬凹線を施す複合口縁上段で内傾する。2~5は口縁部で、2は外方に直線的に立ち上がり、口縁部拡張部に2条の擬凹線を施す。内外面ともにナデ調整を施す。3は外反気味に立ち上がり、3条の擬凹線と刻目文を施す複合口縁上段で内傾し、端部は少し外反する。頸部外面に突帯を貼り付け、体部はハケ目で調整しているようである。4は外方に直線的に立ち上がり、3条の擬凹線を施す口縁部上段で内

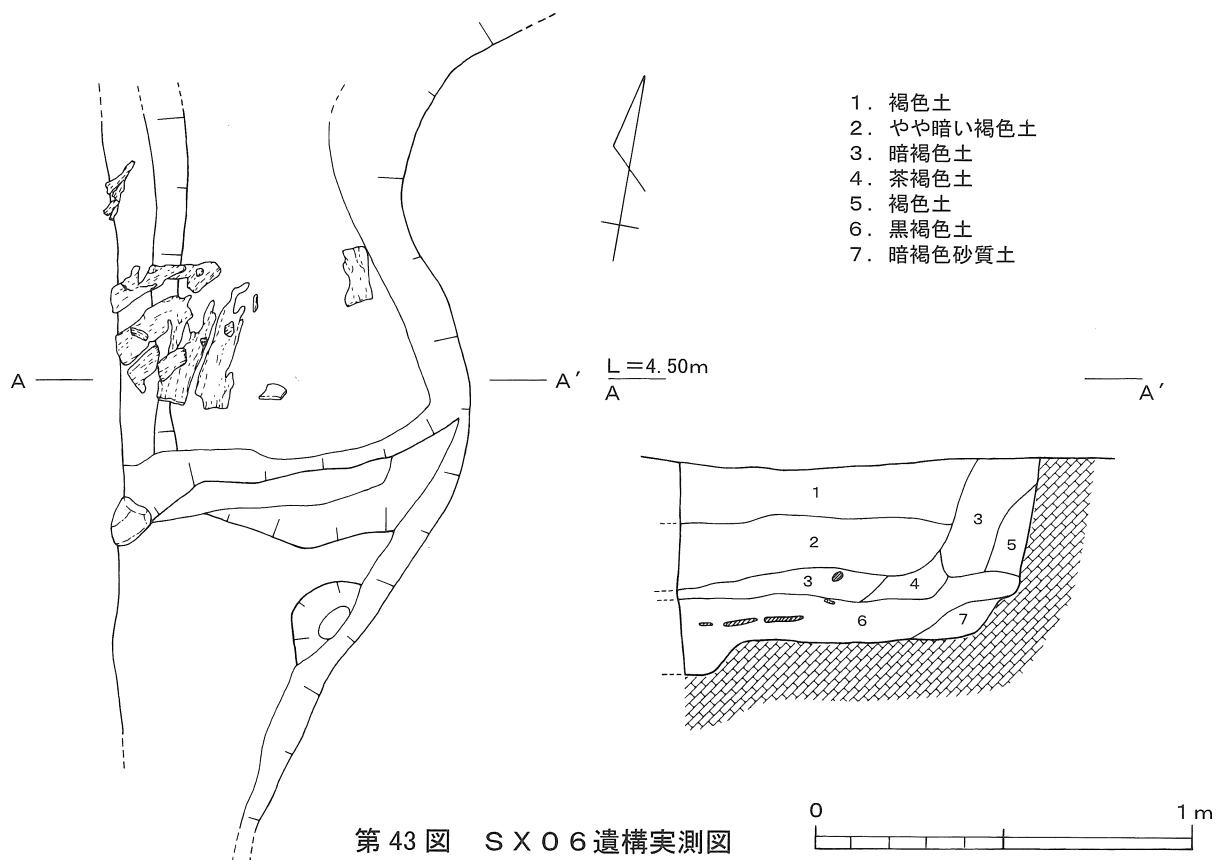


第 42 图 SD 13 出土遺物実測図

傾する。5は外方に直線的に立ち上がり、端部に3条の擬凹線を施す。内外面にはナデ調整を施している。6は体部内外面にハケ目を施し、口縁部は外反気味に立ち上がった後、4条の擬凹線、刻目文を施した複合口縁上段は内傾する。頸部外面には突帯を貼り付ける。7は高坏の口縁部で、外方に直線的に立ち上がった後、内側に屈折する。口縁部外面と端部に擬凹線を施す。内外面をナデ、ヘラ磨きで調整している。8、9は弥生式土器の口縁部である。8は外方に直線的に立ち上がり、2条の擬凹線に刻目文を施す複合口縁上段は内傾する。外面はハケ目調整している。9は外方に直線的に立ち上がり、4条の擬凹線を施す複合口縁上段で内傾する。内外面ともにナデを施し、体部内面はヘラ削り調整していたようである。10～17は弥生式土器の底部である。10はやや外反気味に立ち上がる。外面はヘラ磨き、内面はヘラ削りで調整している。11もやや外反気味に立ち上がり、外面はヘラ磨き、内面は指頭圧痕を施す。12も外反気味に立ち上がる。内面に指頭圧痕を施している。14は外反しながら立ち上がる。内外面はナデ調整している。14は外反気味に立ち上がる。外面にヘラ磨きを施す。15も外反気味に立ち上がる。外面はヘラ磨き、内面はヘラ削りで調整している。16も外反気味に立ち上がる。外面はヘラ磨き、内面は粗いナデで調整している。底部の縁に粘土塊が付着する。17は外反しながら立ち上がる。内外面ともに粗いナデで調整している。18は長石、石英に富む砂岩製の砥石である。3面に使用痕が残る。

SX06 (第43図)

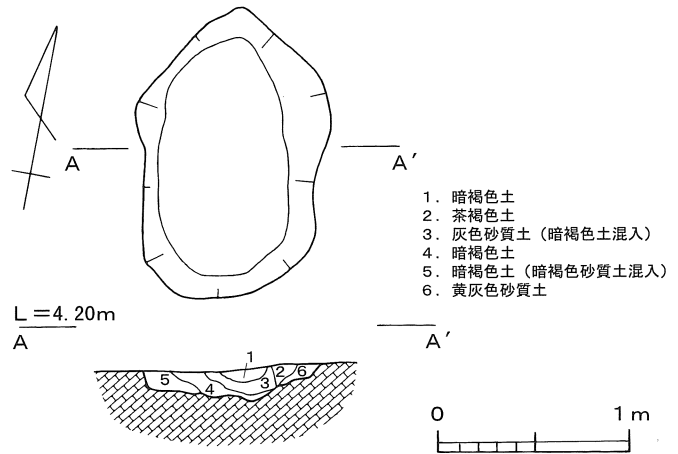
後世の削平を受け南北両端が欠損しており、西端は調査区外に伸びる。検出長は南北で1.90 m、東西で0.92 mを測り、深さは0.46～0.50 mで、底面に平坦面を造るが、検出部西端に落ち込みがあり、最深部は0.56 mを測る。壁は外方に直線的に立ち上がり、段を持った後、内湾気味に伸び



る。主軸はN \sim 11 $^{\circ}$ ~Wである。切り合い関係はSD13を切っており、遺物は細片が多いものの、弥生式土器、鉄製品が出土している。底面に近い部分からは腐食した板の残片が多数検出されているが、詳細は不明である。

SX07 (第44図)

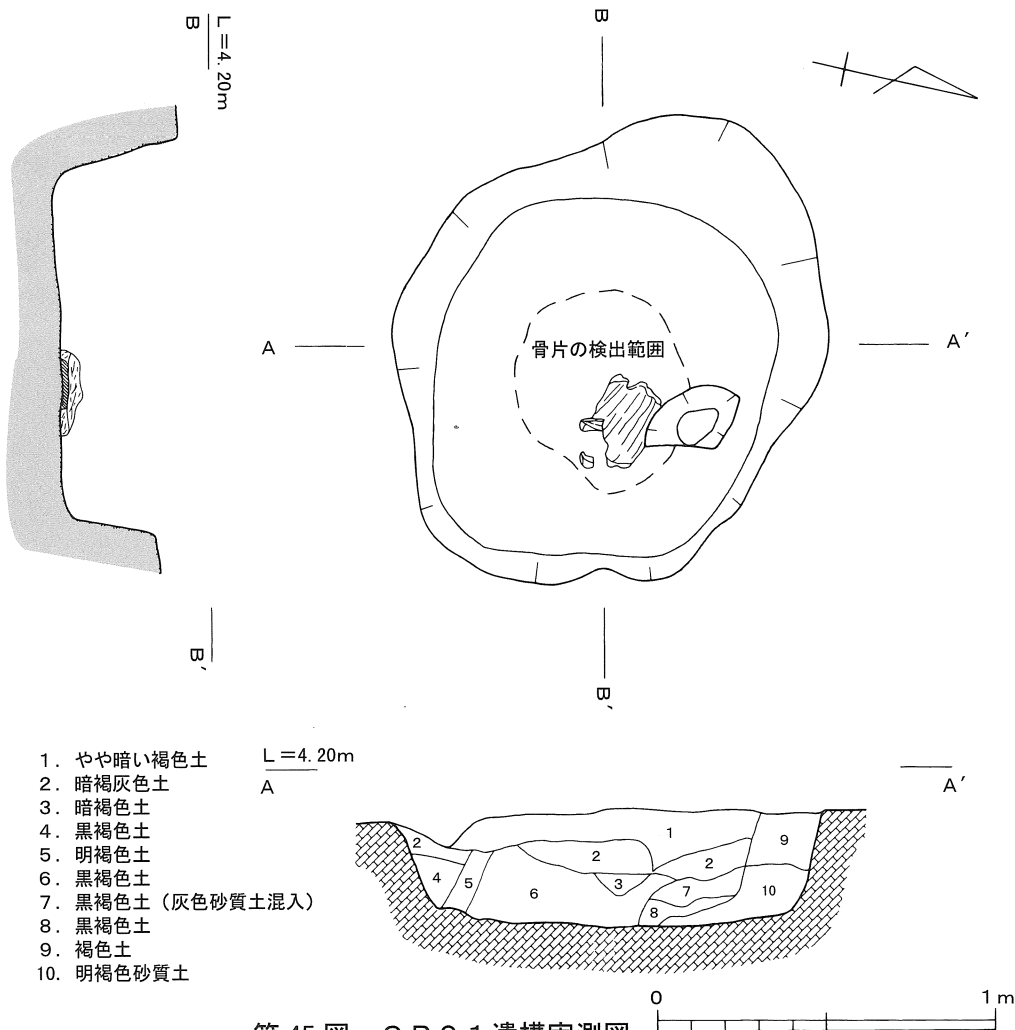
長径 1.52 m、短径 1.04 m、深さ 0.16 m のいびつな楕円形を呈す遺構で、中央部が若干深くなっている。主軸は長軸でN \sim 12 $^{\circ}$ ~Wにある。壁は東側で外反した後、外方に直線的に伸び、西側で外方に直線的に立ち上がる。遺物は弥生式土器片、土師質土器片が出土しているが、小片のため詳細は不明である。切り合い関係はSD13を切っている。



第44図 SX07遺構実測図

SP01 (第45図)

長径 1.34 m、短径 1.28 m、深さ 0.34 m のいびつな方形を呈す土壙墓で、底面は平坦に造られて

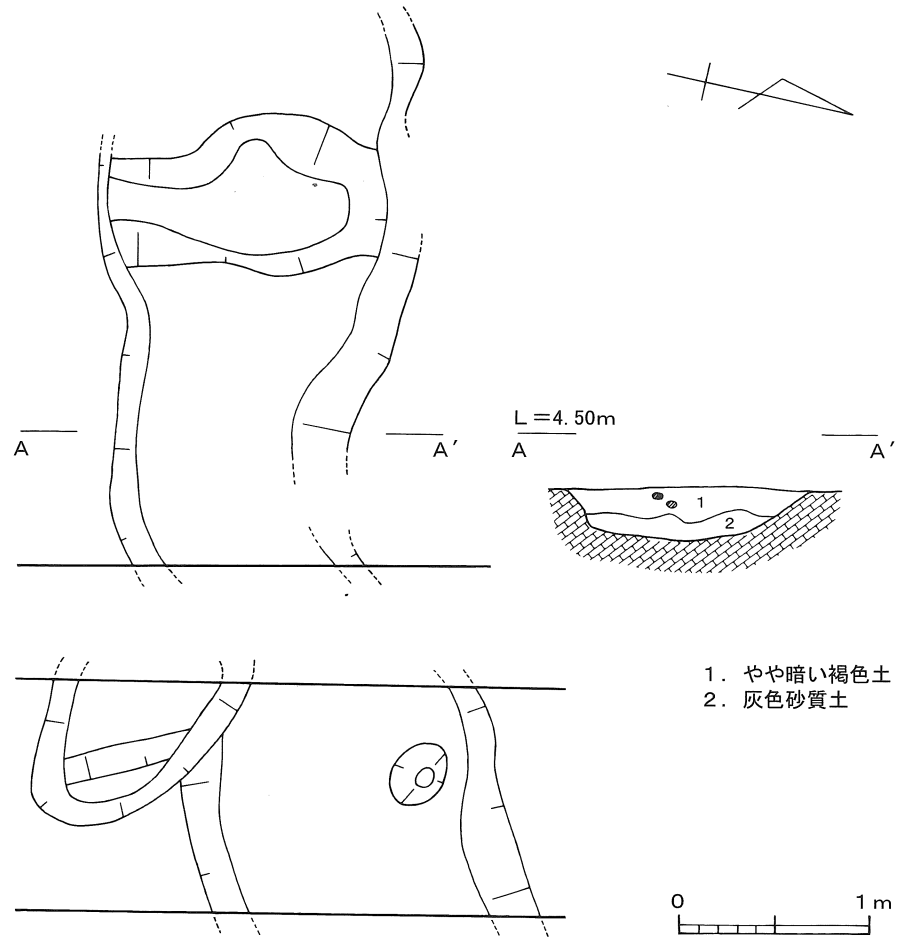


第45図 SP01遺構実測図

いる。壁は東西北側ともに外方に直線的に立ち上がり、南側は外反気味に立ち上がる。底面北側には南北0.28 m、東西0.18 mの落ち込みがあり、中央部には木櫃の側板と考えられる部材と人骨片が残存していた。蓋、底板と考えられる部材は出土しなかった。骨片の保存状態は極めて悪かったが、出土状況から土葬墓である可能性は低いと考えられ、火葬した人骨を木櫃に納めて埋葬したものと推定される。また土層1～8は2次堆積である可能性があり、改葬を行っていることも考えられる。遺物は小片のため詳細は不明であるが、肥前系の染付や陶器の破片が出土している。17世紀後半以降は火葬墓の例はあまり多くないが⁽⁴⁾、このような木櫃を納めた土葬墓は、一丁田遺跡からも検出されていることから、江戸後半期頃のものとして推定される⁽⁵⁾。

SD14 (第46図)

SD13の南側に位置する溝状遺構で、平面プランはいびつで若干蛇行している。西端部は後世の削平により、東端部は調査区外に伸びるため、詳細は不明であるが、検出長約4.9 m、幅約1.2～4.3 m、深さ約0.3 mを測り、検出部西端部に浅い落ち込み、同東端部にピット状の落ち込みを有する。土層は2層を確認したのみであるが、SX05の検出状況からSD14の遺構上面が削平されている可能性は高く、実際には深さのある溝であった可能性もある。底面は中央部がやや凹むものの、比較的平坦に造ら

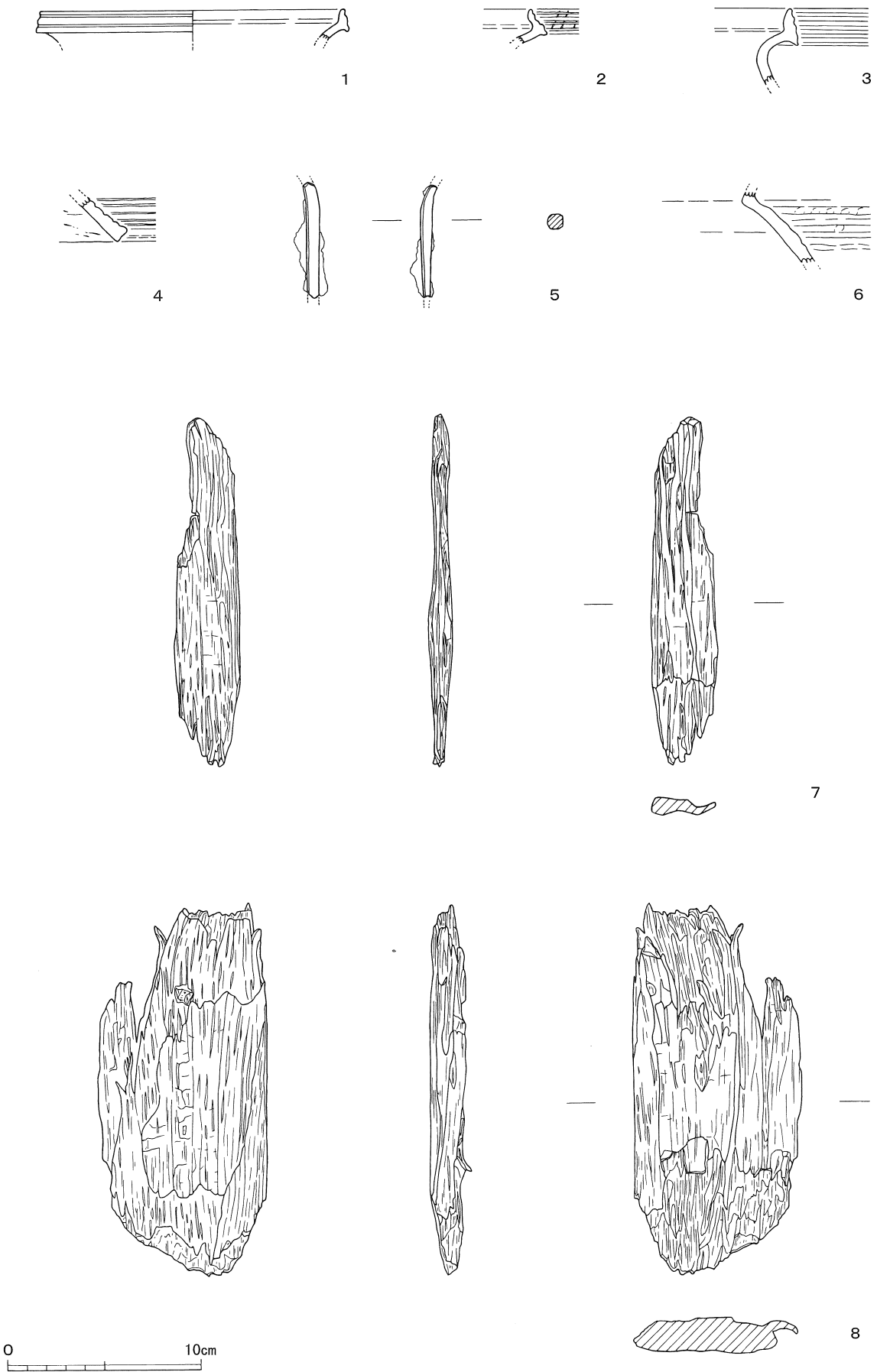


第46図 SD14遺構実測図

れており、壁は北側で外反するものの、南側は外方に直線的に立ち上がる。主軸はN～69°～Eで、SB02の短軸(N～71°～E)とほぼ平行関係にある。切り合い関係は、近世以降と推定される遺構に破壊されており、SA02、SB02、SK25に切られている。遺物が出土しなかったため、時期は不明であるが、切り合い関係から近世以前と考えられる。

SX06・SX07・SP01出土遺物 (第47図)

第47図-1～5はSX06出土遺物で、1～4は弥生式土器である。1は口縁部で、外反気味に立ち上がった後、2条の擬凹線を施す複合口縁上段で内傾する。内外面ともにナデ調整を施す。2

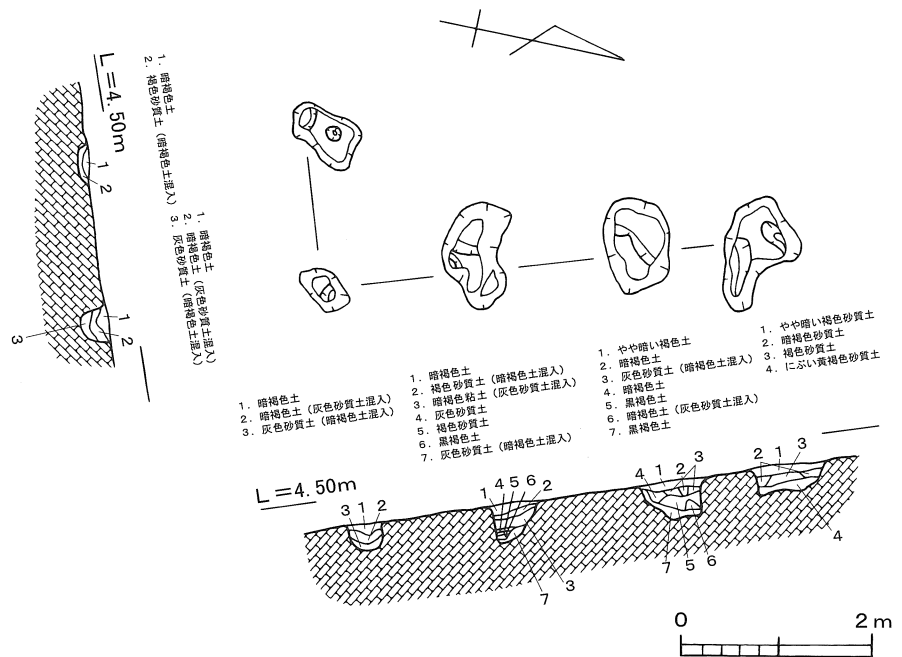


第47图 SX06·SX07·SP01出土遺物実測図

も口縁部で、4条の擬凹線に刻目文を施す複合口縁上段で内傾し、端部は少し外反する。内外面ともにナデ調整を施す。3も口縁部で、外反しながら立ち上がった後、4条の擬凹線を施す複合口縁上段内傾する。内外面ともにナデ調整し、複合口縁上段内面に1条の沈線を施す。4は高坏脚部で、外面に擬凹線を施し、内面はへら削りにより調整している。端部はナデによりやや凹む。5は鉄製品で角柱状を呈す。鉄製角釘の可能性はある。6はSX07出土遺物で、弥生式土器の肩部である。外面に凹線文、刺突文を施す。7、8はSP01出土の木製の部材である。7はやや残存の状態が悪いが、片面に練り込みが残る。櫃の側板であると考えられる。8は7よりも残存の状態が良く、片面に練り込みが残る。櫃の側板であると考えられ、残存径から木櫃の蓋なしの高さは8.8 cmになると推定される。

SB02 (第48図)

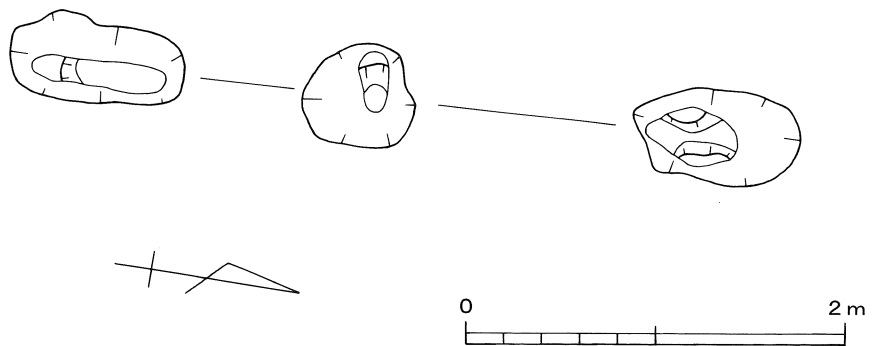
1間1.6 m、4×1間以上の建物跡である。主軸は長軸でN \sim 19 $^{\circ}$ ~W、短軸でN \sim 71 $^{\circ}$ ~Eにある。切り合い関係はSD14を切っており、SD14の主軸(N \sim 69 $^{\circ}$ ~E)とSB02の短軸はほぼ平行関係にある。遺物は土師質土器、染付等が出土しており、時期は17~18世紀頃と推定される。当地方で掘立柱建物がいつ頃まで残ったかは検討の余地があるが、坪地業を行っていた可能性も考えられる⁽⁶⁾。



第48図 SB02遺構実測図

SA02 (第49図)

1間1.6 m、2間以上の柵列遺構である。主軸はN \sim 2 $^{\circ}$ ~Eにあり、周辺に平行関係にある遺構は見られない。切り合い関係はSD14を切っており、遺物は弥生式土器、磁器が出土しているが、何れも小片であるため詳細は不明である。

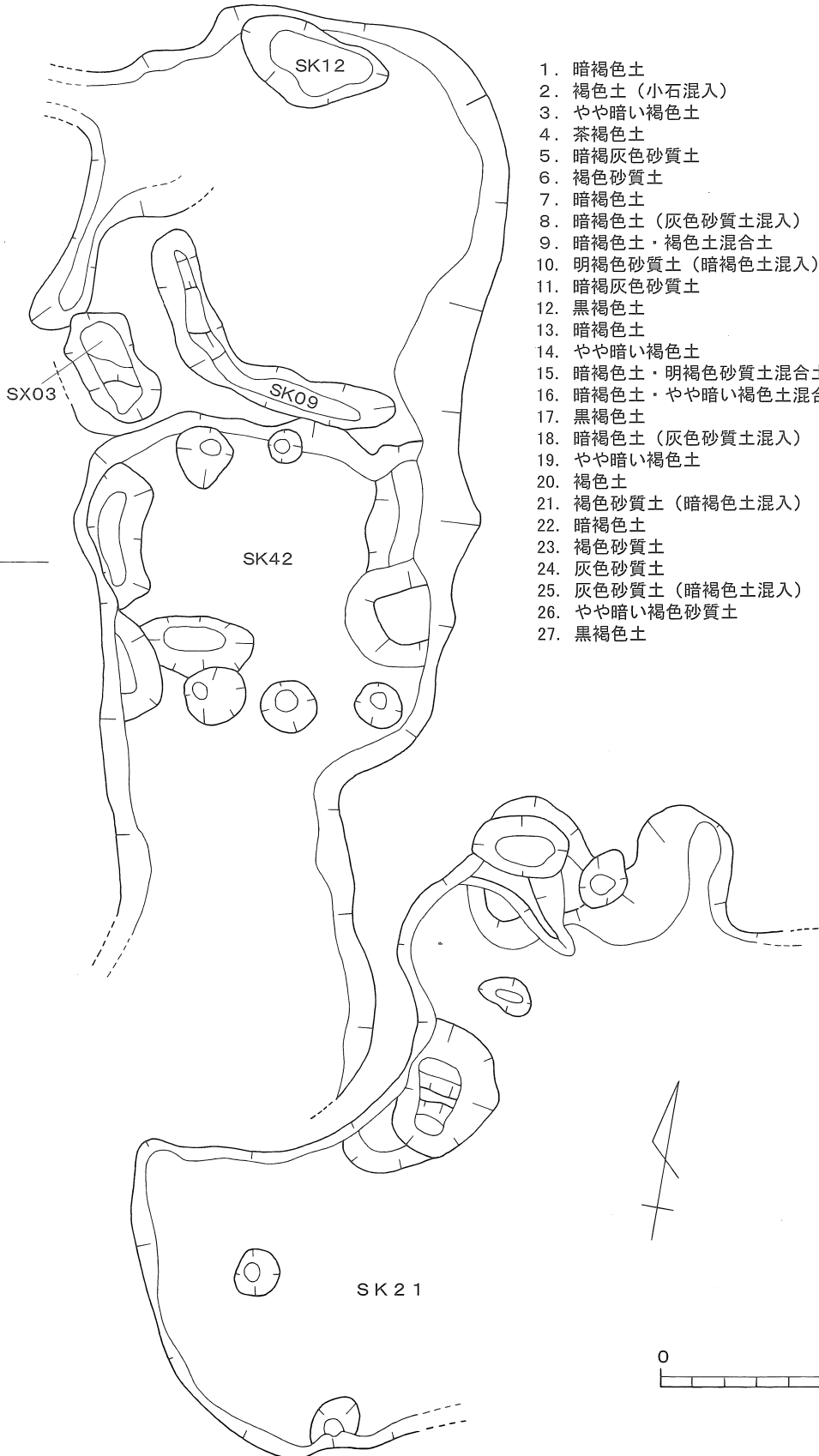
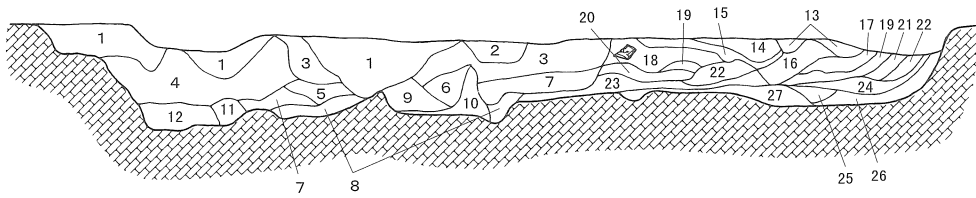


第49図 SA02遺構実測図

L = 4.50m

A

A'



1. 暗褐色土
2. 褐色土 (小石混入)
3. やや暗い褐色土
4. 茶褐色土
5. 暗褐色灰砂質土
6. 褐色砂質土
7. 暗褐色土
8. 暗褐色土 (灰色砂質土混入)
9. 暗褐色土・褐色土混合土
10. 明褐色砂質土 (暗褐色土混入)
11. 暗褐色灰砂質土
12. 黒褐色土
13. 暗褐色土
14. やや暗い褐色土
15. 暗褐色土・明褐色砂質土混合土
16. 暗褐色土・やや暗い褐色土混合土
17. 黒褐色土
18. 暗褐色土 (灰色砂質土混入)
19. やや暗い褐色土
20. 褐色土
21. 褐色砂質土 (暗褐色土混入)
22. 暗褐色土
23. 褐色砂質土
24. 灰色砂質土
25. 灰色砂質土 (暗褐色土混入)
26. やや暗い褐色砂質土
27. 黒褐色土

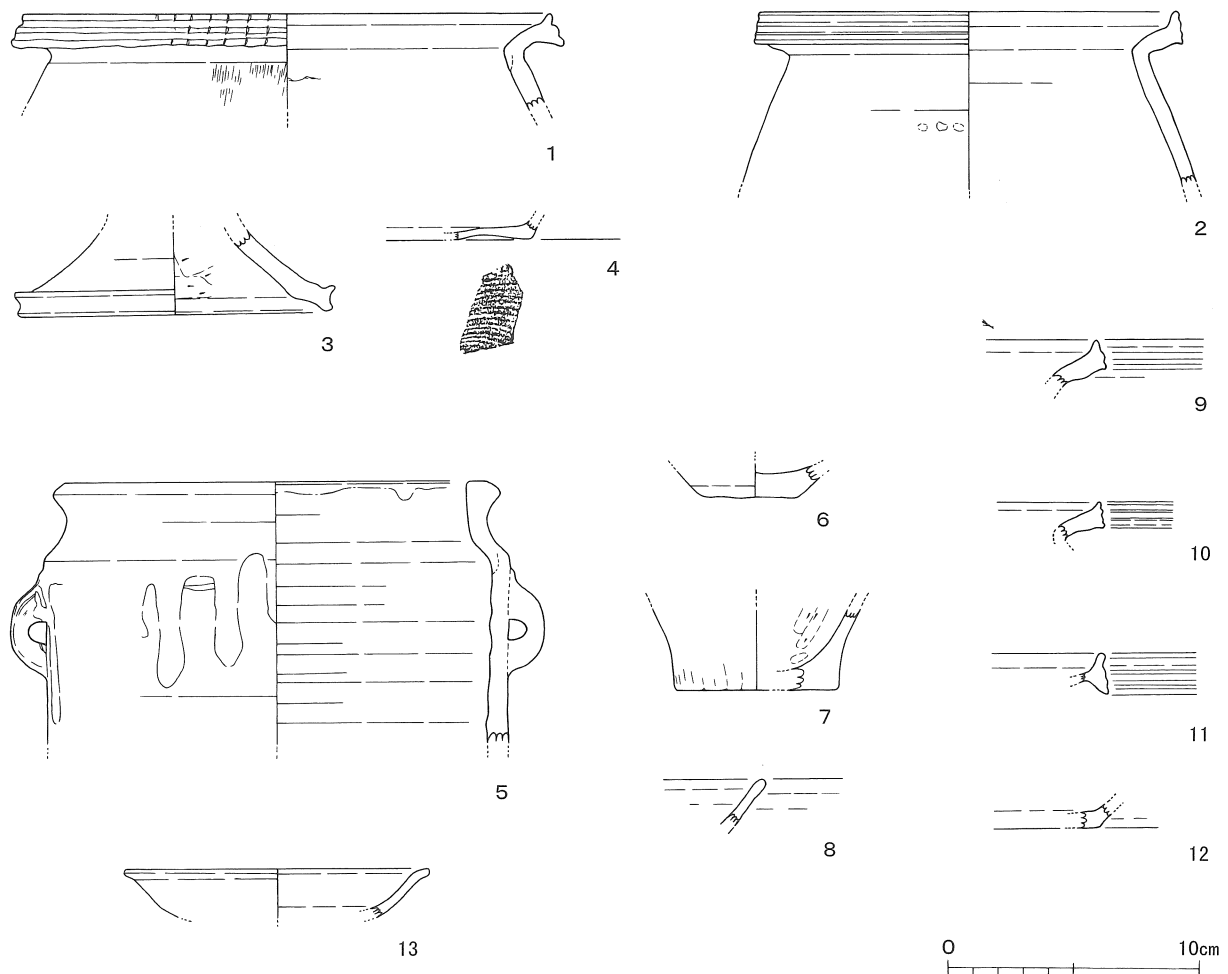
第50図 SK42・SK09・SK12・SK21遺構実測図

SK42・SK09・SK12・SK21 (第50図)

何れも規格性が見られない土壌で、切り合い関係からSK42が最も古いと考えられる。SK42はSD20を切っているが、SK09・SK12・SE05に切られており、SE05はSK21に切られている。

SK42・SK09・SK12・SB02・SK20出土遺物 (第51図)

第51図-1~7はSK42出土遺物で、1~3は弥生式土器である。1は口縁部が外反気味に立ち上がり、2条の擬凹線に刻目文を施す複合口縁上段で内傾する。外面はナデ、ハケ目で調整し、内面はナデ調整している。2は寸胴形を呈するもので、体部外面にナデ調整の後、刺突文を施す。口縁部は外方に直線的に伸び、3条の擬凹線を施す複合口縁上段で内傾する。3は高坏の脚部で、内面をへら削りで、端部をナデにより調整している。4は土師質土器で、内外面を回転ナデ調整している。底部には回転糸切痕が残る。5は陶器で、口縁部は内傾気味に立ち上がり、端部は肥厚し平坦部を造る。体部外面には把手を施す。内面は露胎としているが、外面には銅釉を施し貫入が入る。布志名焼の可能性ある⁽⁷⁾。6は陶器で、内外面にナデを施す。内面に灰が付着する。7はSK42の北側から出土した弥生式土器の底部で、外反しながら立ち上がり、外面にへら磨き、内面

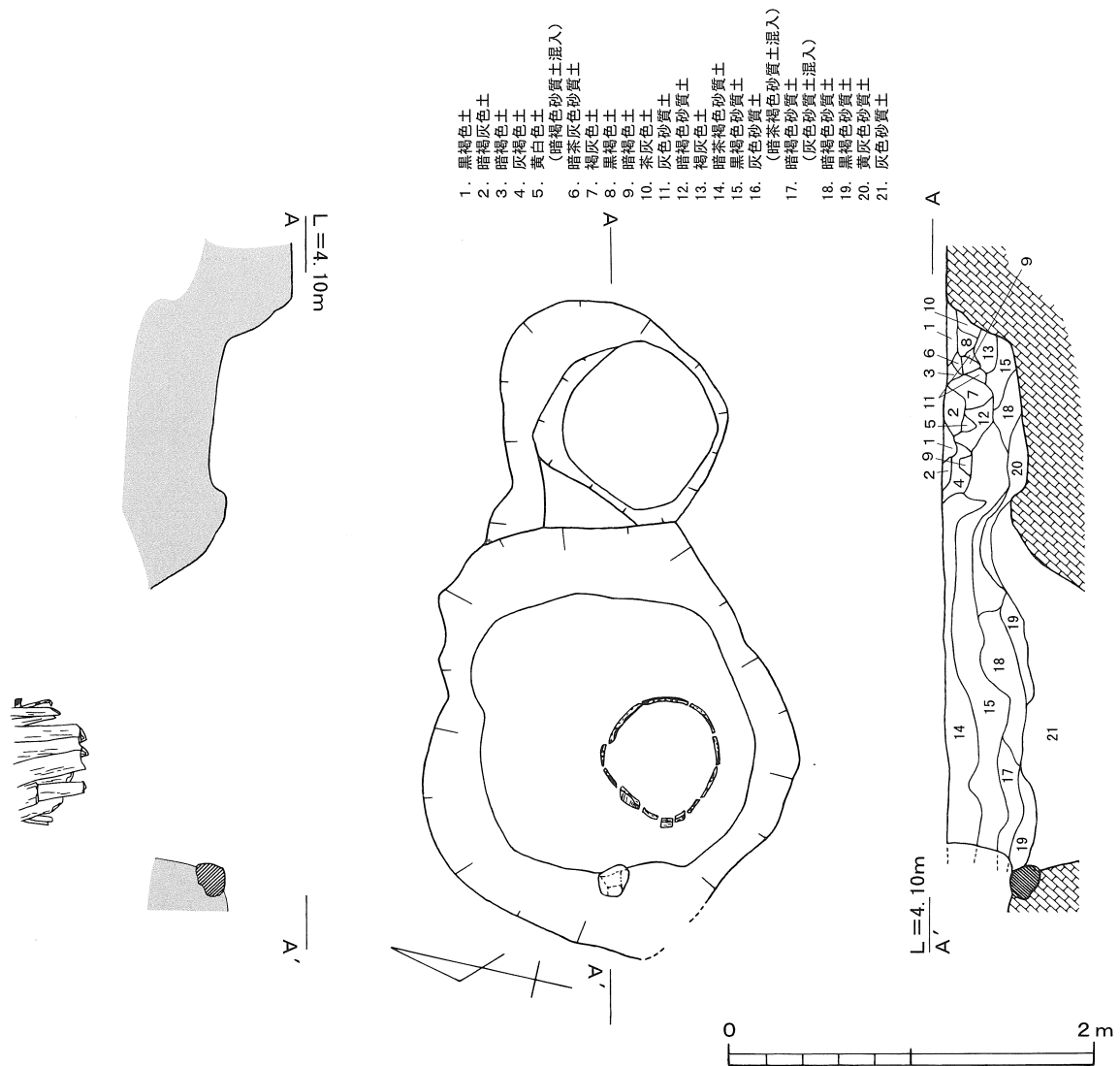


第51図 SK42・SK09・SK12・SB02・SK20出土遺物実測図

にヘラ削り、指頭圧痕を施す。8はSK09から出土した土師質土器の口縁部で、内外面ともに回転ナデを施し、端部を丸く仕上げている。9はSK12から出土した弥生式土器の口縁部で、2条の擬凹線を施す複合口縁上段は内傾する。内外面ともにナデを施す。10～12はSB02出土遺物である。10、11は弥生式土器の口縁部である。10は3条の擬凹線を施す複合口縁上段でやや内傾する。11は3条の擬凹線を施す複合口縁上段でやや内傾する。端部は丸くやや外方に伸びる。12は土師質土器で、外反しながら立ち上がる。底部の縁はシャープに仕上げている。内面を回転ナデ調整している。13はSK20から出土した磁器皿で、口縁部は内湾気味に立ち上がった後、外反する。端部は丸い。

SEO5 (第52図)

長径 2.16 m、短径 2.08 mのいびつな方形に掘り込んだ井戸で、井戸枠が確認されている。東隣には東西 1.20 m、南北 1.26 m、深さ 0.46 mの小穴を伴う。井戸の掘り方の壁は、東西ともに外反しながら立ち上がるが、東側の方が緩やかである。小穴は底面を平坦に造り、壁の立ち上がりは

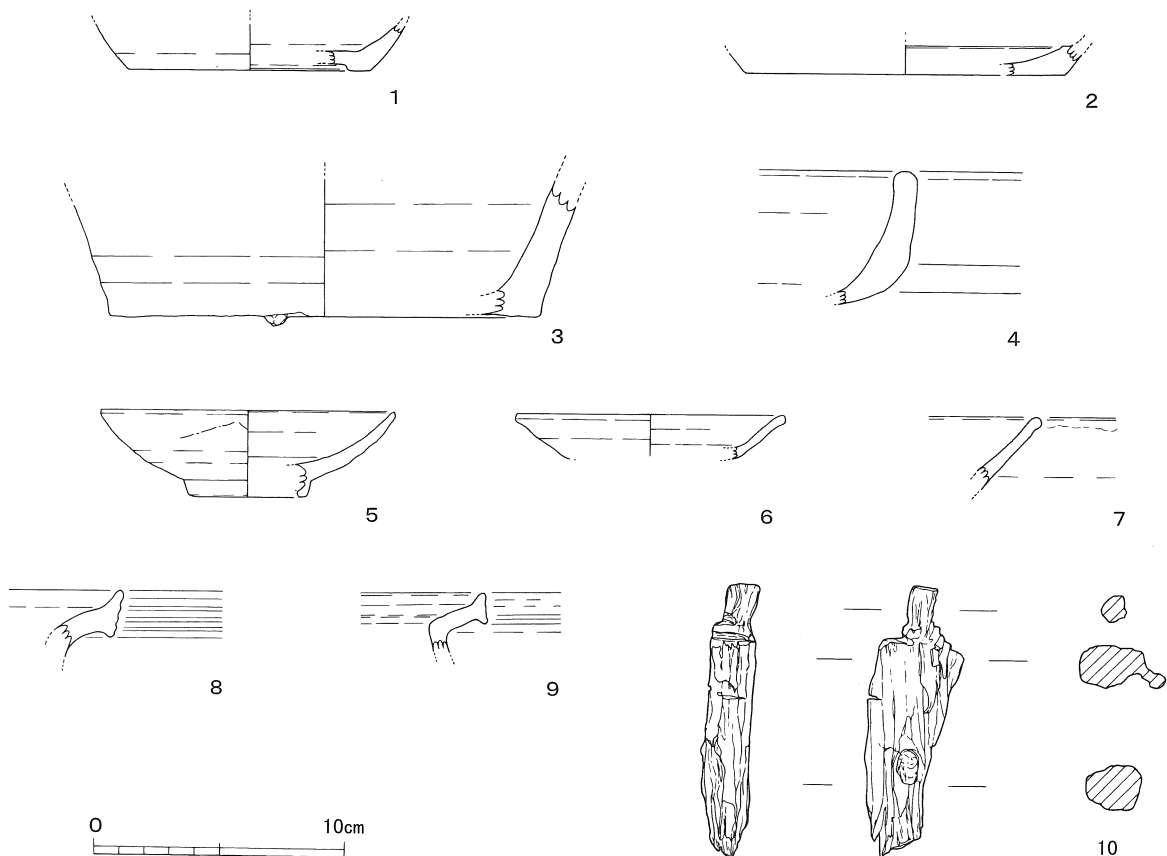


第52図 SEO5遺構実測図

東側は外反するが、西側は外方に直線的に伸びる。埋土からは肥前系の陶磁器、土師質土器、陶胎染付等が出土しており、井戸は 18 世紀頃に埋没したと考えられる。切り合い関係は SK 4 2、SD 2 0 を切っており、SK 2 1 に切られている。

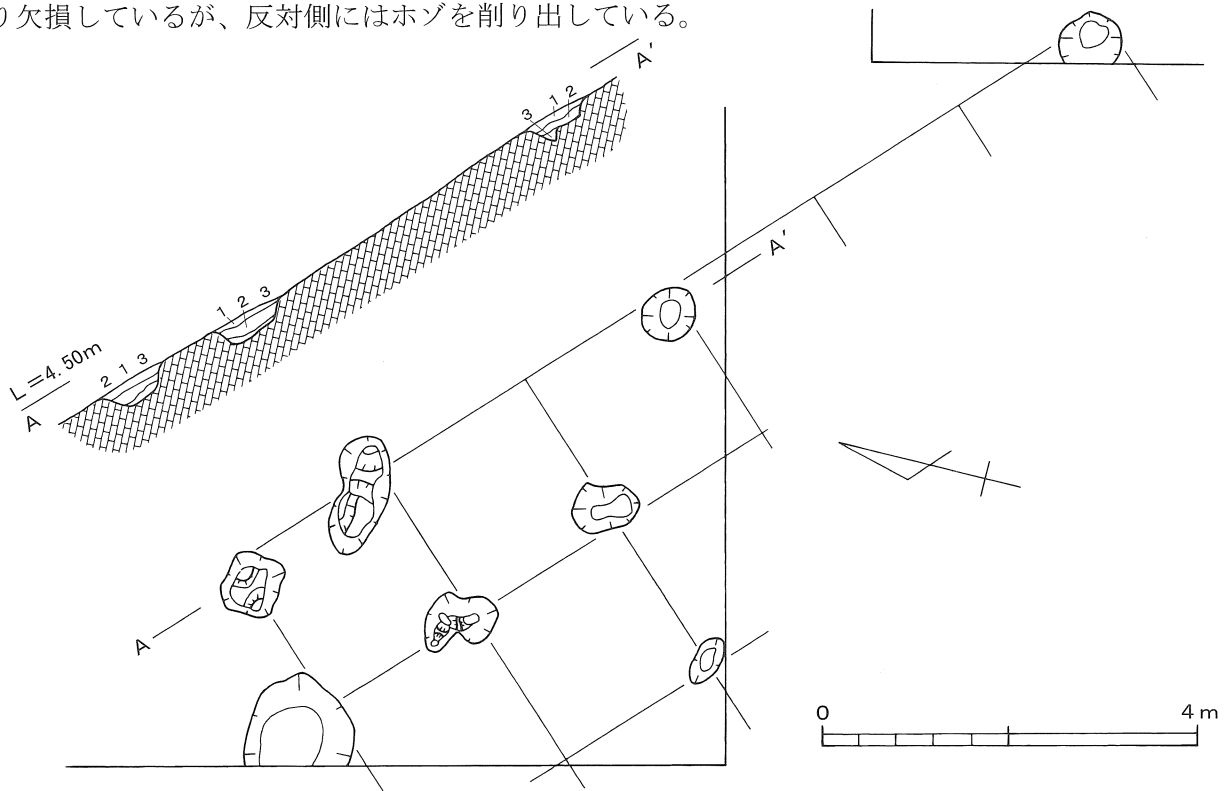
SE05 出土遺物 (第 53 図)

第 53 図-1~4 は陶器である。1 は鉢で、内湾気味に立ち上がる。内外面ともにナデを施し、露胎としている。高台は逆台形状を呈す。2 は外面をナデ調整し、内面はヘラ削りの後、ナデ調整している。底部は丁寧なヘラ切りを施している可能性がある。内外面ともに施釉する。3 は外方に直線的に立ち上がり、器壁はかなり厚手である。内外面ともにナデを施すが、底部は灰の付着のため調整不明である。内外面ともに露胎としている。4 は焙烙で内湾しながら立ち上がり、端部は丸く仕上げる。内外面ともにナデを施すが、外面下方はヘラ削りで調整されている。外面にはススが付着する。5 は染付で、内湾しながら立ち上がり、端部は尖り気味に仕上げる。内外面ともに施釉するが、外面下方はナデ、ヘラ削りを施し、露胎としている。一方、内面見込には蛇ノ目釉ハギが施され、口唇部内面には染付が残る。6、7 は土師質土器である。6 は外方に直線的に立ち上がった後、口唇部で外傾し、端部を平坦に仕上げている。内外面ともに回転ナデを施し、底部には回転糸切痕の可能性のある痕跡が残る。7 は内湾気味に立ち上がり、やや外傾する。端部は丸く仕上げられている。内外面ともにナデを施している。8、9 は弥生式土器である。8 は外反した後、4 条の擬凹線を施す複合口縁上段で、外傾する。内外面ともにナデを施す。9 は外方に直線的に立ち上がり、3 条の擬凹線を施す複合口縁上段でやや内傾する。10 は用途不明の木製品で、片側は折れによ



第 53 図 SE05 出土遺物実測図

り欠損しているが、反対側にはホゾを削り出している。



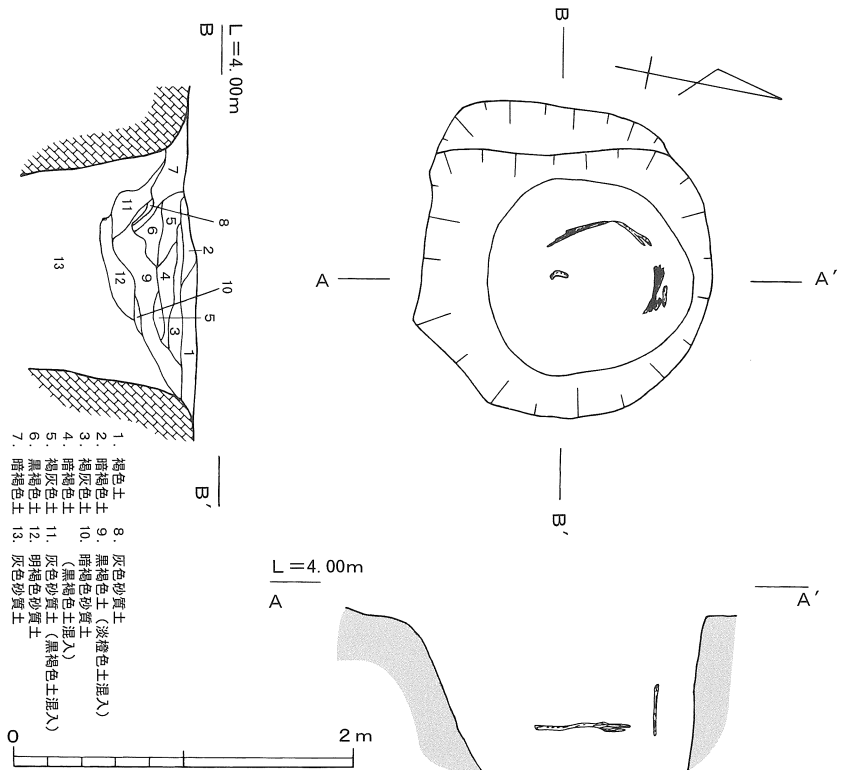
第54図 SB01遺構実測図

SB01 (第54図)

1間1.8m、2×6間以上の建物跡である。主軸は長軸でN～46°～W、短軸でN～44°～Eにある。切り合い関係はSD17、SK17を切っており、周辺に平行関係にある遺構は見られない。遺物は弥生式土器、土師質土器が出土しているが、小片のため時期は不明である。切り合い関係から近世以降の遺構と考えられる。

SEO7 (第55図)

長径1.86m、短径1.72mのいびつな円形状に掘り込んだ井戸である。壁は南側で内湾気味に緩やかな立ち上がりを呈し、北側で外反気味に直立する。一方、東西の壁は何れも外反気味に立ち上がる。掘り方内には、井戸枠の板1枚、竹製のタガが残り、井戸の中心部はやや北側寄りにある。埋土には弥生式土器、染付が含まれており、染付は小片のため時期は不明確であるが、近世以降のものと推定され、井戸は近世以降に埋め戻され

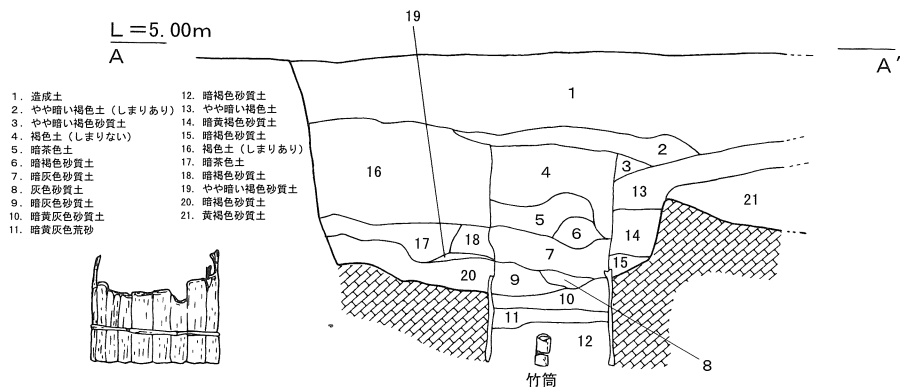


第55図 SEO7遺構実測図

たものと考えられる。切り合い関係はSD17、SK04を切っている。

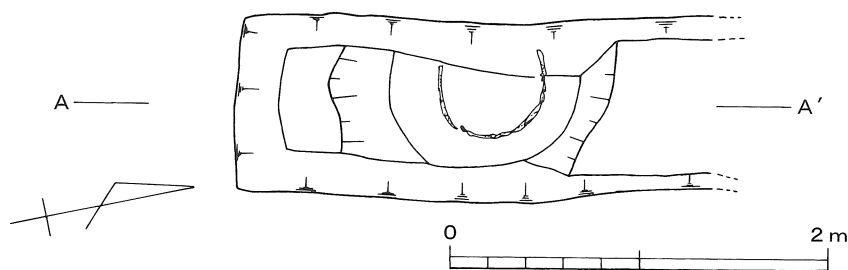
SE03 (第56図)

井戸枠の一部が調査区外に伸びるため、詳細は不明であるが、円形状に板を並べ、竹で縛る形態の井戸と推定される。井戸枠上部は、腐食または引き抜きのため残存していないが、残存部から井戸枠径は南北で0.56mを測る。井戸枠内からは、節を抜き空洞状にした竹筒が直立した状態で出土したが、上部は腐食のため残存していなかった。遺物は磁器の小片が1片出土しているが、時期は不明である。



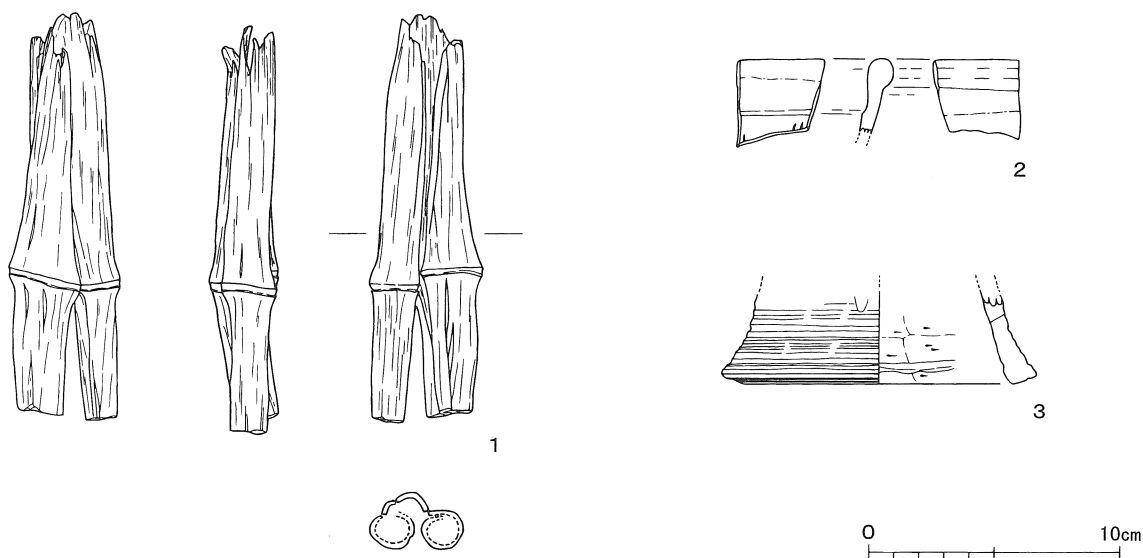
SE03・SK16・SE07出土遺物 (第57図)

第57図-1はSE03出土の竹筒で、節を抜いて空洞状にしている。民俗事例では、井戸を埋める際、水神さんが息ができるように、節を抜いた青竹やパイプをさす例が多数あり、



第56図 SE03遺構実測図

出土した竹筒もこの事例に当てはまるものと考えられる⁽⁸⁾。2はSK16出土の陶器の播鉢で、内湾気味に立ち上がり、口縁部を玉縁状に仕上げている。内面には播溝が施され、上方に肩を造り、口縁部と明確に分けている。大部分は露胎としていたようで、口縁部に施釉されるのみである。3

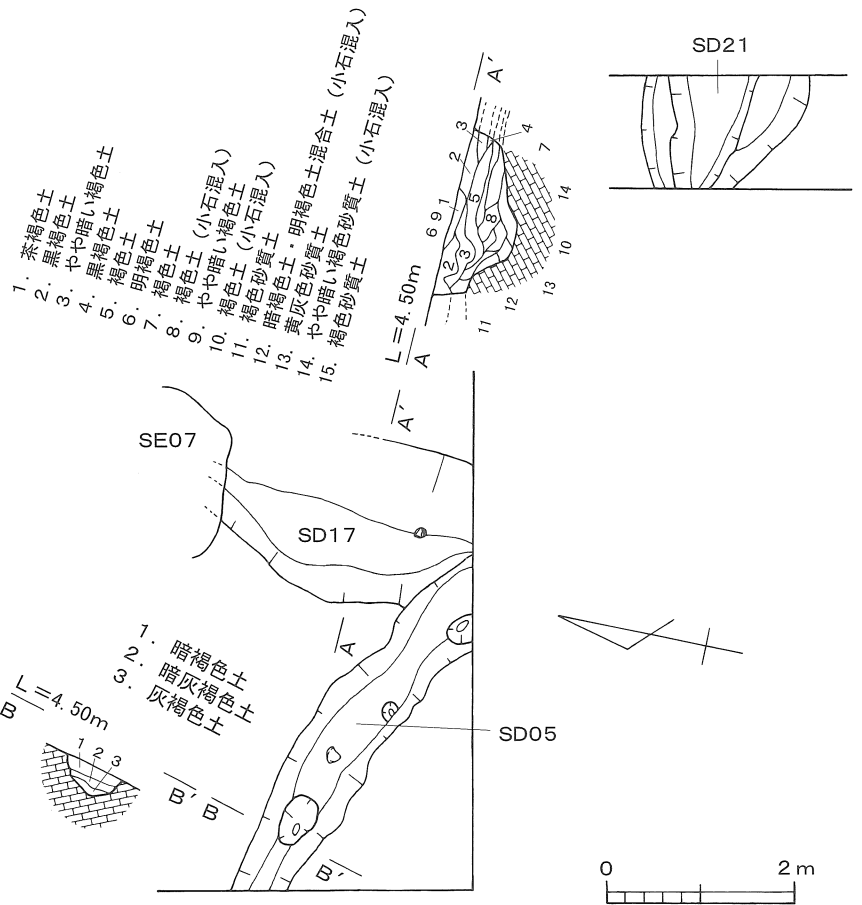


第57図 SE03・SK16・SE07出土遺物実測図

はSE07出土の弥生式土器で、高坏の脚部である。外面及び端部に凹線が施され、透かしを造る。内面はヘラ削り調整を施している。

SD05 (第58図)

調査区外に伸びるため、両端部は不明であるが、検出長約4.5m、幅約0.9m、深さ約0.3mを測る溝状遺構で、若干湾曲している。主軸はN \sim 23 $^{\circ}$ ~Wで、付近に平行関係にある遺構は見られない。埋土には弥生式土器片、染付片を含んでおり、切り合い関係はSD17を切っている。近世以降の遺構と考えられる。



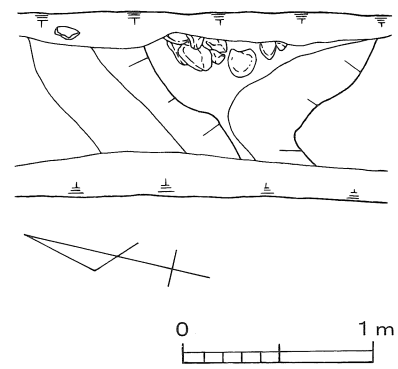
第58図 SD05・SD17遺構実測図

SD17 (第58図)

切り合い関係等のため、両端部は不明であるが、検出長約2.7m、幅約1.8m、深さ約0.7mを測る溝状遺構である。主軸はN \sim 5 $^{\circ}$ ~Eで、SD20 (N \sim 14 $^{\circ}$ ~W) と平行関係にある可能性がある。遺物は出土していないが、切り合い関係はSD05、SE07に切られている。

SS01 (第59図)

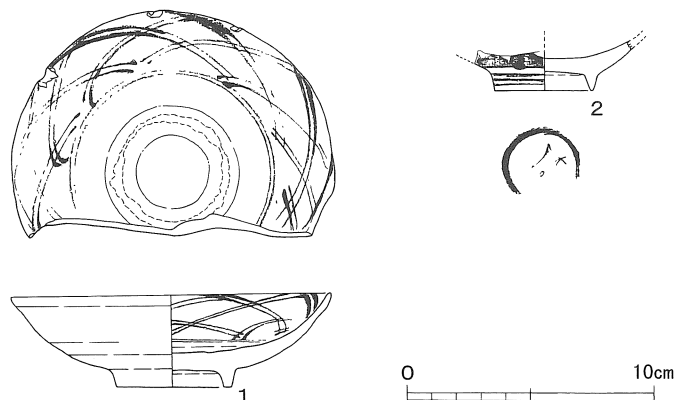
最近まで荒神様が置かれていたとされる地点の真下から検出した集石遺構で、遺構の一部は調査区外に伸びる。出土遺物から近世の遺構と推定されるが、詳細は不明である。



第59図 SS01遺構実測図

SS01・SD31出土遺物 (第60図)

第60図-1はSS01出土の肥前系染付皿で、内湾気味に立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げている。内面には染付を施し、見込には蛇ノ目釉ハギを施す。高台は逆台形状に成形し、高台畳付は露胎としている。2はSD31出土の肥前系染付で、内湾気味に立ち上がり、外面に染付を施す。高台は逆三角形を呈し、高台見込には円内に「大日一」と

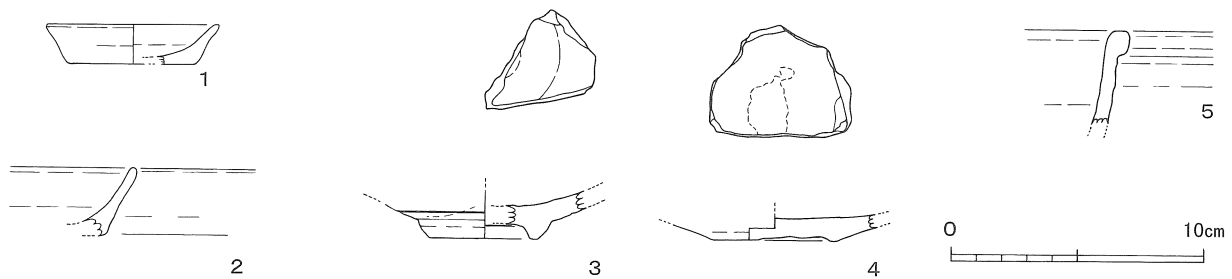


第60図 SS01・SD31出土遺物実測図

染付されているが、「大明成化年製」等が形骸化したものと考えられる⁽⁹⁾。

SK17・SK07出土遺物（第61図）

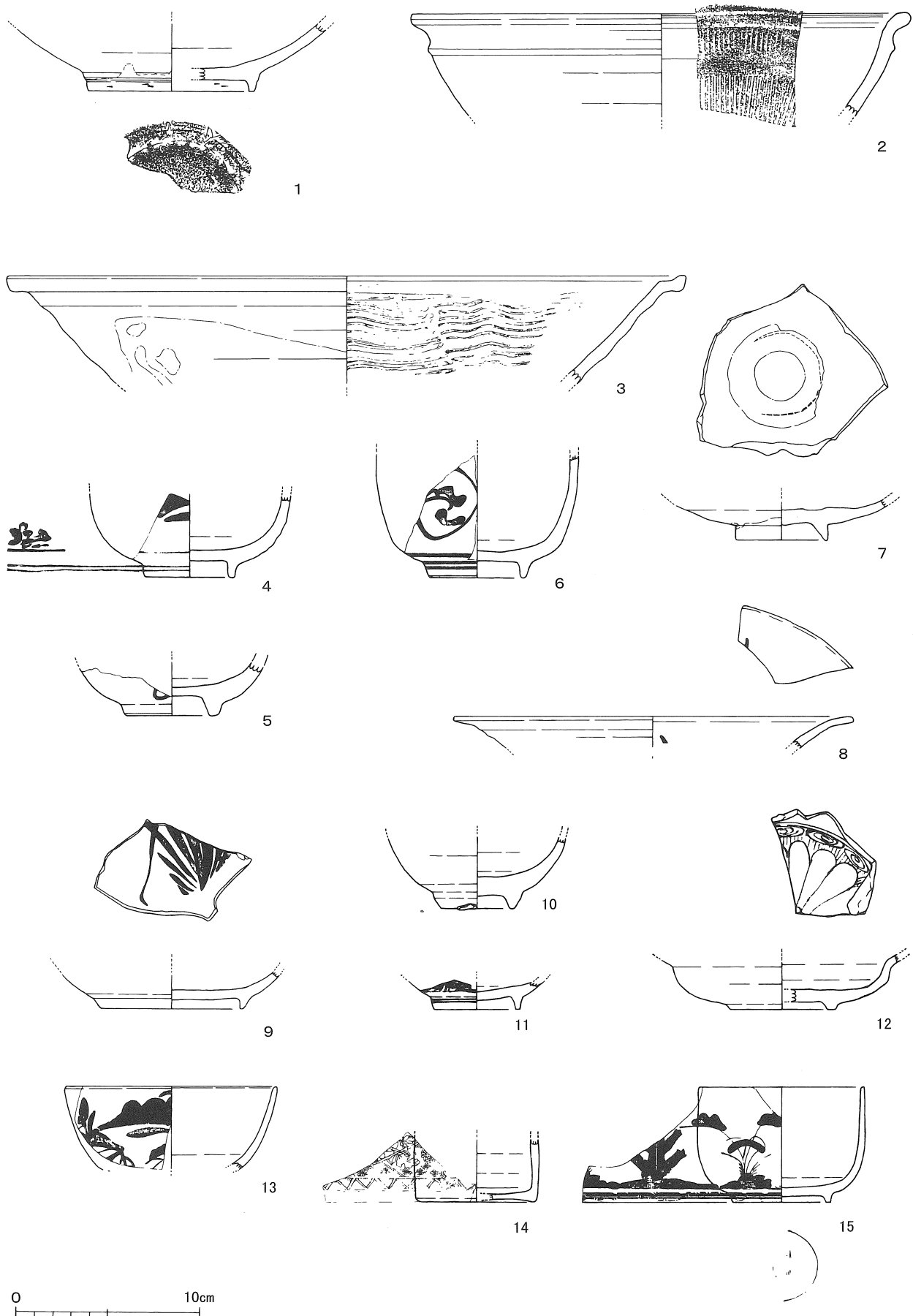
第61図-1～3はSK17出土遺物である。1は土師質土器で、外反しながら立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げる。内外面ともに回転ナデを施し、底部には回転糸切痕が残る。2も土師質土器で、外方に直線的に立ち上がり、端部は丸く仕上げる。内外面ともに回転ナデを施す。3は白磁で、内湾気味に立ち上がる。内外面ともに施釉するが、回転ヘラにより削り出された高台周辺は露胎としており、内面見込には蛇ノ目釉ハギを施す。外面には1条の沈線が残る。4、5はSK07出土遺物である。4は陶器で、口縁部は外反気味に立ち上がる。底部は回転糸切の後、回転ヘラにより三日月高台にしている。外面は回転ナデにより調整しており、高台と体部の界線は明確でない。内面見込は施釉され、砂目積みを施している。5は陶器の口縁部で、内湾気味に立ち上がり、端部を玉縁状に仕上げている。内外面ともに施釉するが、口縁端部は露胎としている。



第61図 SK17・SK07出土遺物実測図

遺構外出土遺物（第62、63、64、65図）

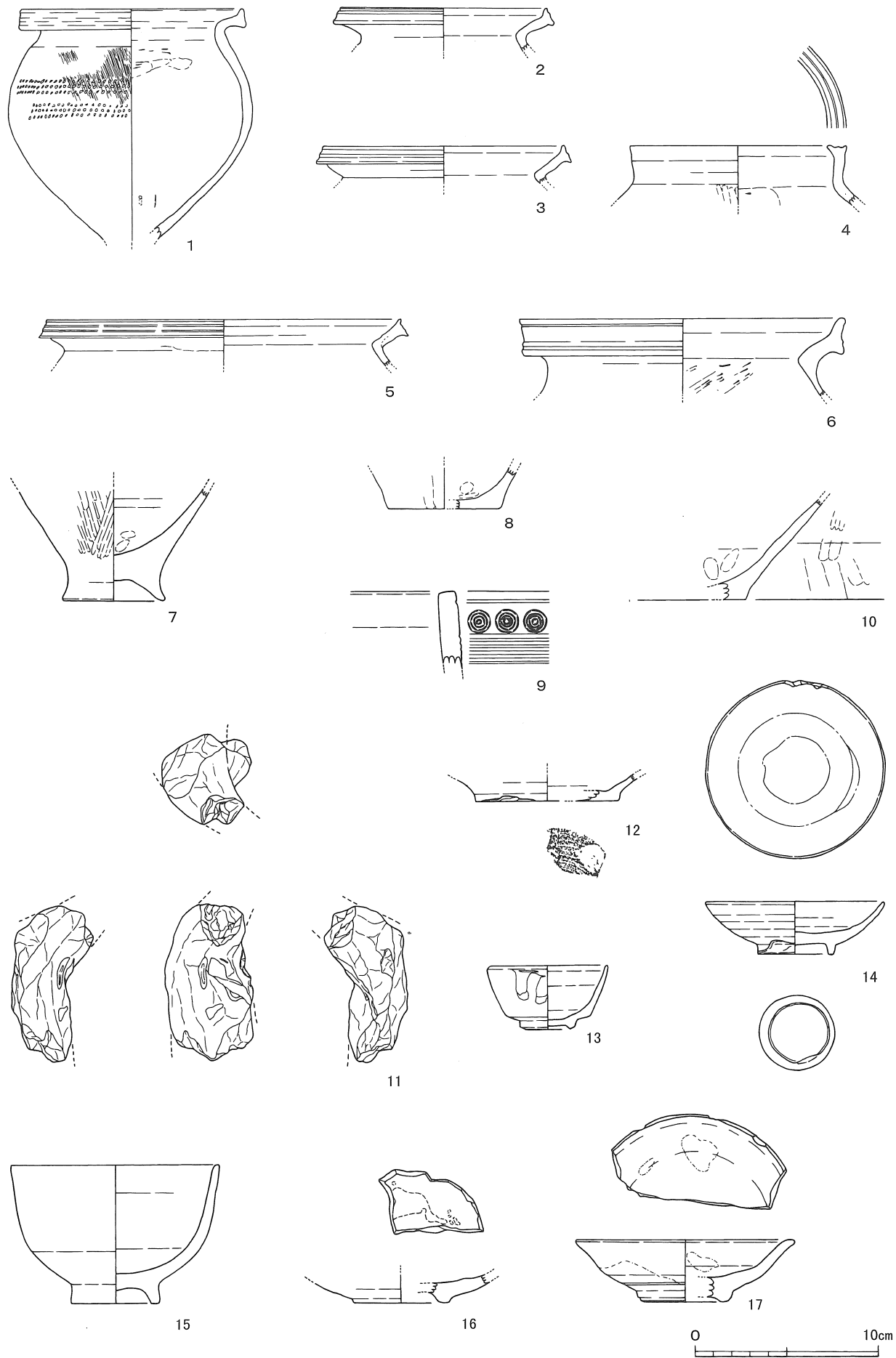
第62図-1～6は陶器である。1は内湾しながら立ち上がり、高台は回転ヘラにより成形している。内外面ともに施釉するが、高台及び高台見込は露胎としている。内面見込に粘土の剥離痕があり、胎土目積みをしていた可能性もある。2は播鉢で、内湾しながら立ち上がった後、口唇部で段を造り、外反する。端部は丸く仕上げている。内外面ともに回転ナデの後、施釉しており、内面には播溝を施す。3は唐津系の捏鉢で、外方に直線的に立ち上がった後、口唇部で屈折して平坦部を造り、口縁部で外傾する。内外面ともに施釉するが、外面下方は露胎としている。一方、内面は施釉後、ハケ状の調整を行っている⁽¹⁰⁾。4～6は陶胎染付である。4は内湾しながら立ち上がる。外面には染付を施し、高台見込は高台周囲よりも深く造られている。内外面ともに施釉し貫入が入る。5も内湾しながら立ち上がる。外面には染付を施し、高台見込は高台周囲よりも深く造られている。内外面ともに施釉し貫入が入るが、高台畳付には鉄釉が施されている。6は内湾した後、体部で内湾気味に立ち上がる。内外面ともに施釉し貫入が入るが、高台畳付は露胎としている。外面には染付を施している。7は肥前系の磁器で、内湾しながら立ち上がる。内外面ともに施釉するが、回転ヘラにより逆三角形に削り出した高台周辺は露胎としている。内面見込には蛇ノ目釉ハギを施している。8～10は青磁である。8は染付で、外方に直線的に立ち上がった後、屈折し外方に伸びる。端部は丸く仕上げている。内外面ともに施釉し、内面には染付を施す。9も染付で、内湾気味に立



第 62 図 遺構外出土遺物実測図(1)

ち上がるものである。内外面ともに施釉するが、高台畳付は露胎としている。内面見込には染付が施される。10は碗で、内湾しながら立ち上がる。高台は回転ヘラによる削り出しで成形されており、高台畳付には砂が付着する。内外面ともに施釉し貫入が入る。11～13は肥前系の染付である。11は内湾気味に立ち上がり、内外面ともに施釉するが、高台畳付は露胎としている。高台見込は高台周囲よりも少し深く造られている。外面には染付を施す。12は内湾しながら立ち上がり、口唇部で外反する。高台は逆台形状を呈す。内外面ともに施釉し、内面見込には染付を施している。13は碗で、内湾しながら立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げる。外面には山水、水車小屋を染付している。14は外面に竹や花の文様をプリントする磁器で、口縁部は直立気味に立ち上がる。底部はヘラ削り調整している。15は肥前系の染付で、内湾した後、直立気味に立ち上がる。端部は丸く仕上げている。内外面ともに施釉するが、高台に露胎を造る。外面には染付を施し、高台見込には円内に「大川口」と染付している。「大明年製」が形骸化したものと考えられる。

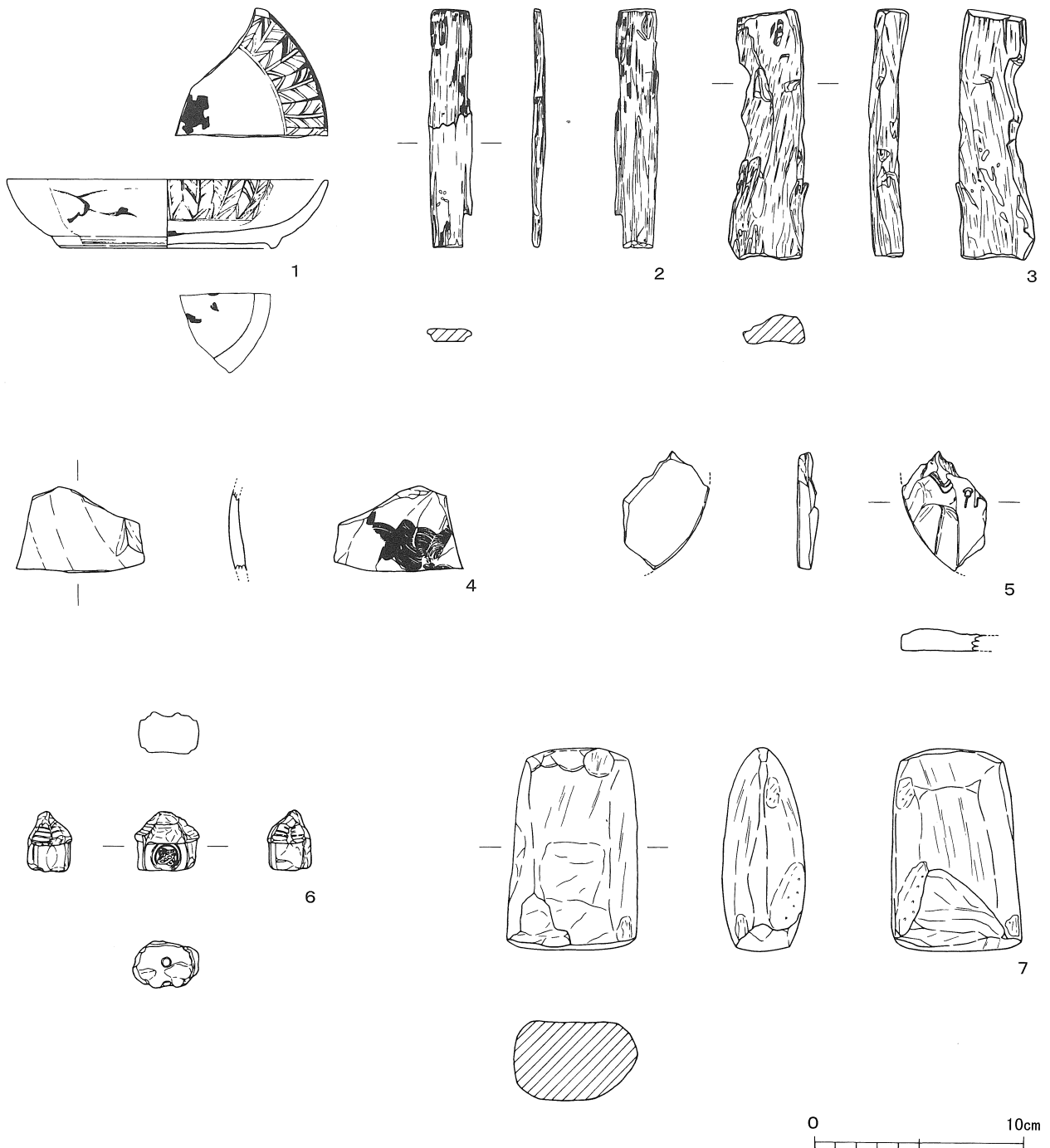
第63図-1～10は弥生式土器である。1は体部外面をハケ目、ヘラ磨きで調整した後、列点文を施す。内面はヘラ削りの後、オサエを施している。口縁部の立ち上がりは、外反した後、3条の擬凹線を施す複合口縁上段で内傾する。2、3は口縁部で、外方に直線的に立ち上がった後、2条の擬凹線を施す複合口縁上段で内傾する。内外面にナデを施す。4は直口壺の口縁部で、やや外傾しながら立ち上がる。端部は肥厚し、擬凹線を施す。体部外面にはヘラ磨き、体部内面にはヘラ削りによる調整がされていたようである。5も口縁部で、外方に直線的に立ち上がった後、3条の擬凹線を施す複合口縁上段で内傾する。内外面ともにナデを施す。6も口縁部である。口縁部は外反気味に立ち上がった後、2条の擬凹線を施す複合口縁上段でやや外傾する。体部内面はヘラ削り調整していたようである。7は外方に直線的に立ち上がる台付のもので、外面をヘラ磨き、ナデ、内面を指頭圧痕で調整している。8は底部で、外反気味に立ち上がる。外面をヘラ磨き、内面を指頭圧痕で調整している。9はスタンプ文土器で、外面に数条の擬凹線と4重同心円のスタンプ文を施す⁽⁴⁾。内外面ともにナデで調整し、端部を平坦に仕上げている。10は底部で、外方に直線的に立ち上がる。外面にヘラ磨き、内面に指頭圧痕を施す。11は土製支脚である。風化が著しいが、ヘラ磨きで調整している可能性がある。突起が1本残存している。12は土師質土器で、口縁部は外反しながら立ち上がり、底部の縁はシャープに仕上げている。内外面ともに回転ナデを施し、底部には回転糸切痕が残る。13～17は陶器である。13は口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げている。内外面に施釉するが、高台周辺は露胎にしている。高台は回転ヘラによる削り出しである。ぐい呑みと考えられる。14は皿で、内外面ともに施釉するが、高台畳付は露胎としている。口縁部は内湾しながら立ち上がった後、端部で丸く仕上げている。内面見込には蛇ノ目釉ハギを施す。高台見込は回転ヘラにより高台周囲よりも深く削られている。内外面に朱色の顔料が付着する。15は御器手碗である。口縁部は内湾した後、外方に直線的に伸び、端部を尖り気味に仕上げている。内外面ともに施釉しており、貫入が入るが、高台畳付は露胎としている。16は口縁部が内湾気味に立ち上がるものである。外面は回転ナデ、回転ヘラを施し、露胎としている。一方、内面見込は施釉の後、砂目積みしている。17は内外面ともに施釉するが、高台周囲は露胎としている。口縁部は外方に直線的に伸びた後、内側に屈折し、外反気味に立ち上がる。端部は尖り気味である。



第 63 図 遺構外出土遺物実測図 (2)

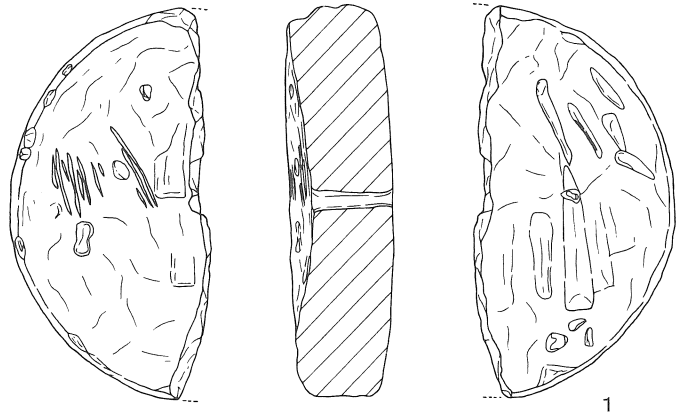
高台は回転ヘラによる削り出しで、丸みを帯びる。

第64図-1は染付で、内湾しながら立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げる。内外面に染付を施し、内面見込には五弁花文を印版する。高台見込にも染付されているが、描かれている内容は不明である。18世紀後半頃のものと考えられる。2、3は木製品である。2は板状に加工した木製品で、表面を丁寧に仕上げている。用途は不明である。3も板状に加工された木製品で、表面には工具による削り痕が残る。2よりも粗雑な造りで、用途は不明である。4～6は土製の玩具である。4は土人形の破片と考えられるもので、外面にV字状の溝を造り、ナデ調整している。内面はナデ、指頭圧痕により調整されており、指紋が多数残る。5は円盤状を呈するもので、外面に人、立札、建

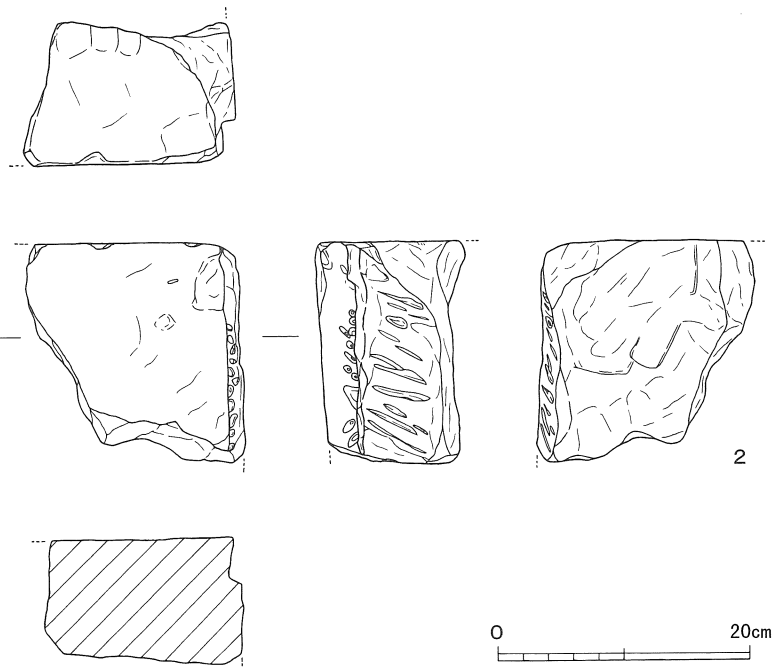


第64図 遺構外出土遺物実測図(3)

物を表現している。全面に丁寧なナデを施している。6は家形のものである。全面には丸に葉を2枚重ねた家紋が記されている。下面には孔が穿たれており、部品になるものと考えられる。7は安山岩質凝灰岩製の磨製石斧で、やや台形状を呈する。表面は丁寧に加工されている。



第65図-1は花崗斑岩製の石臼で、雄臼（下臼）と考えられる。表裏面ともに加工痕が残るが、溝の目のパターンは全く不明である。中央には芯棒孔が穿たれているが、芯棒となる支持木は残存していなかった。2は砂岩製未製品で、各面を丁寧に加工している。側面は加工痕が多数残るが、成形途中であると考えられ、最終的には全面を丁寧に加工しようとしていたと考えられる⁽¹²⁾。一部欠損しているため、不明な点も多いが、完形の製品は正方形もしくは長方形の板石状になると推定される。



第65図 遺構外出土遺物実測図(4)

- 註(1) 永田鉄雄 『出雲大津窯業誌』 1990年
 (2) 古泉 弘 『考古学ライブラリー48 江戸の考古学』 ニュー・サイエンス社 1987年
 (3) 正岡睦夫・松本岩雄編 『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰』 木耳社 1992年
 (4) 谷川章雄 「江戸および周辺村落における墓制の変遷」『帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集「中世」から「近世」へ -考古学と中世史研究5-』 名著出版 1996年
 (5) 岸 道三編 『出雲市駅前白枝線街路事業地内 吉丁田遺跡発掘調査報告書』 出雲市教育委員会 1998年
 (6) 内田祐治編 『下宿内山遺跡』 東京都清瀬市下宿内山遺跡発掘調査会・東京都清瀬市下宿内山遺跡発掘調査団 1986年
 (7) 布志名焼 湯町窯 福間琇士氏に御教示いただいた。
 (8) 成城大学民俗学研究会編 『成城大学民俗調査報告書第十集 島根県出雲市大塚町民俗調査報告書』 1987年
 (9) 松山智宏・遠藤正樹編 『上塩冶横穴墓群第34支群発掘調査報告書』 出雲市教育委員会 1998年
 (10) 盛 峰雄・船井向洋編 『伊万里市文化財調査報告書第31集 川内野遺跡・平山遺跡』 伊万里市教育委員会 1990年
 (11) 出雲市教育委員会編 『遺跡が語る古代の出雲 -出雲平野の遺跡を中心として-』 1997年
 (12) 三輪茂雄 『増補 石臼の謎』 クオリ 1994年

第6章 考

察

調査の結果、旧自然堤防の間に位置する北側調査区からは、幅約70mの河川跡(SD02)を確認した。米軍の空撮写真によれば、SD02は旧自然堤防の間を、現在の県道遙堪今市線沿いに流れていたものと考えられ、木道が確認された姫原西遺跡⁽¹⁾の河川と同一であると推定される。底面から遺物が出土しておらず、上面の遺物も攪乱しているため、SD02の時期は不明であるが、土層から徐々に縮小し、湿地化したものと考えられる。付近に残る萱原・茅原等の地名はこのような地勢を反映したのと考えられる⁽²⁾。一方、調査区には間(はざま)という地名が残っているが、旧河道を境界として矢野の集落と小山の集落の間であったという可能性も考えられよう。

SD01はSD02に直交する形で確認された。SD03に切られているため、SD02との切り合い関係は不明であるが、出土遺物から弥生中期から後期の遺構と推定される。遺構内からは防長地域に見られる渦巻文を施した土器が出土している⁽³⁾。このような土器は矢野遺跡からも出土しており⁽⁴⁾、遺構が矢野遺跡の方向に続いていることから、SD01は矢野遺跡に関連する遺構であると考えられる。また遺構内から付近ではあまり見られない径数10cmの巨石が幾つも確認されており、SD01の遺物密度が高いことから、人為的に排水施設を造っていた可能性も考えられる。

SD03・SD04はSD02の両側汀線を平行に切る形で検出された。検出位置からSD02を意識して造られたものであると推定されるが、土層からSD02がある程度埋没縮小してから造られたと考えられ、用途は不明である。

一方、地質調査ではSD02の北側・中央・南側の3地点について、ボーリング及び¹⁴C・花粉分析・ケイソウ分析を実施した。

調査の結果、4800y.B.P.頃に出雲平野中央部に位置する小山遺跡周辺の水位は±0mで、遺跡内はハンノキ・アシ等が生息する湿地帯であったことが判明した⁽⁵⁾。この資料が局地的なものであるかは、今後の資料の増加を待つしかないが、縄文海進により水没していたと考えられていた場所に、陸地の存在が考えられたことは、出雲平野形成を考える上で重要な知見であった。

南側調査区は弥生の遺構が近世の遺構に大幅に破壊されていた。

近世の破壊が激しく、確実に弥生時代と考えられる遺構はSD13(弥生中期)のみであるが、包含層における弥生式土器の割合は高く、破壊された遺構や調査区外に弥生時代の遺構が存在する可能性がある。

近世の遺構は、溝状遺構、井戸等多数の遺構が確認されている。またSD07・20を境界として遺構の密度に違いが見られる。調査範囲が限られており、明確なことは言えないが、SD07・20辺りが、『旧小山村切図』⁽⁶⁾の日蔵寺西隣3軒と成相家敷地の境界になると推定される。

SD07・20の東側は『旧小山村切図』によれば、現在の佐藤宅と土江宅の祖先に当たる人物が住んでいた敷地と考えられる。佐藤宅と土江宅の境界となる部分は不明であるが、敷地内からは17～18世紀と考えられる4×1間以上の建物跡も検出している。しかしながら当地方で掘立柱建物がいつまで残ったかは、検討の余地があり、坪地業の例⁽⁷⁾も含めて今後の検討課題としたい。

SD07・20の西側は『旧小山村切図』の成相家の畑地及び敷地東端の成相家の別宅に当たる

と考えられ、切図に見られる成相家の本宅は、西側調査区外にあるものと推定される。別宅は畑を挟んで反対側にあることから、厠や馬小屋等も考える必要があるかも知れないが、詳細は不明であるので、ここでは別宅としておく。別宅はSX16出土の板材からSD09で囲まれた辺りに位置すると推定される。建物の工法については、SD07上面から検出されたL字状の配石と、SK28から出土した延石と推定される遺物から、溝状に地業を施した上で、小型で一様な石敷きの間にやや大型の切石を交えた霰崩しと呼ばれる目地のパターンの基礎を造り、その上に木造の建物を建てていた可能性が考えられる⁽⁸⁾。

しかしながら、『旧小山村切図』の畑地に位置するであろう区域についても溝が検出されている。屋敷地を囲む溝も含まれているかも知れないが、SD11は深さ数cmの方形状遺構(SX05)に切られており、この遺構が標高の最も高い位置にあることから、切土により破壊された同様の遺構もあったと考えられ、建物遺構である可能性も考えられる。建物遺構であるなら布堀地業の後、礎石を置き、礎石の間に地覆石を並べ、その上に地覆(土台)を乗せる形態の建築基礎が考えられる⁽⁹⁾。遺物は17～18世紀の遺物が出土しているが、切り合い関係から、検出された溝の中では古い方に当たると考えられ、あるいは『旧小山村切図』の畑地部分には、切図以前に建物が存在していたのかもしれない。

註(1) 出雲市教育委員会編 『遺跡が語る古代の出雲 一出雲平野の遺跡を中心として』 1997年

(2) 永田滋史 「村名・地名考」『四絡郷土誌』 四絡郷土誌編集委員会 1986年

(3) 山本一朗 「防長の弥生式土器」『周陽考古学研究所報2 山口県の弥生式土器 一集成と編年一』 周陽考古学研究所 1979年

(4) 出雲市教育委員会 川上 稔氏の御教示による。

(5) 渡辺正巳・遠藤正樹 「出雲平野中央部小山遺跡における地質層序と古環境」『LAGUNA 汽水域研究 No. 5』 島根大学汽水域研究センター 1998年

(6) 鎌田稔造氏所蔵

(7) 内田祐治編 『下宿内山遺跡』 東京都清瀬市下宿内山遺跡発掘調査会・東京都清瀬市下宿内山遺跡発掘調査団 1986年

(8) 成瀬晃司・寺島孝一 「東京医学校本館の基礎遺構」『江戸遺跡研究会第6回大会・発表要旨「遺跡による幕末から明治」』 江戸遺跡研究会 1993年

(9) 大阪市教育委員会 植木 久氏の御教示による。

出土遺物観察表(土器)

挿図番号	出土地点	器種	法 量 (cm)			形態・手法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
			口 径	底 径	器 高					
7-1	SD01	弥生式土器 甕	12.9	-	-	口縁部 内外面ナデ 体部 外/へら磨き 内/へら削り	暗黄褐色	1mm程度の砂粒を 含む	良好	頸部に粘土の繫目痕 口縁部上段に2条の凹線 外面に黒いスス付着
-2	SD01	弥生式土器 甕	21.0	-	-	口縁部 内外面ナデ 頸部下 外/ナデ 内/へら削り	外/黒褐色 内/にぶい 黄褐色	1~3mmの砂粒含 む	良好	口縁部上段に5条の凹線 外面にスス付着
-3	SD01	弥生式土器	15.2	-	-	口縁部 内外面ナデ 頸部下 外/ナデ 内/へら削り	外/暗黄褐色 内/灰褐色	1mm程度の砂粒少 し含む	良好	口縁部上段に2条の凹線 外面にスス付着
-4	SD01	弥生式土器 甕	22.0	-	-	口縁部 内外面ナデ 頸部下 外/ナデ 内/へら削り	外/暗黄褐色 内/黄灰色 にぶい黄褐色	1~2mmの砂粒含 む	やや軟質	口縁部上段に3条の擬凹線 外面にスス付着
-5	SD01	弥生式土器 甕	18.0	-	-	口縁部 内外面ナデ 頸部下 外/ナデ 内/へら削り	外/暗黄褐色 内/黄褐色	1~2mmの砂粒含 む	良好	体部外面に4条以上の擬 凹線
-6	SD01	弥生式土器 甕	17.2	-	-	口縁部 内外面ナデ 頸部下 外/ナデ 内/へら削り	外/黄褐色 黒褐色 内/淡黄褐色	1~2mmの砂粒含 む	良好	口縁部上段に5条の擬凹線 内面にへら描文の後、刺突文 頸部下にへら工具痕
-7	SD01	弥生式土器	37.4	-	-	口縁部 内外面ナデ	黄橙色	1~3mmの砂粒含 む	良好	内面に貼付円盤・斜格子 文・刺突文・渦巻文
-8	SD01	弥生式土器	36.2	-	-	口縁部 内外面ナデ 頸部下 外/ハケ 内/ナデ	外/淡黄褐色 内/淡黄褐色	1~2mmの砂粒含 む	良好	口縁部上段に3条の凹線 内面に2条の貼付突帯・ 斜格子文
-9	SD01	弥生式土器	-	-	-	口縁部 内外面ナデ	外/暗黄灰色 内/明黄褐色	1~3mmの砂粒含 む	良好	口縁部及び口唇部内面 に各4条の凹線 外面にスス付着
-10	SD01	弥生式土器	-	4.8	-	底部 外/へら磨き 内/調整不明	外/黒褐色 内/灰黄褐色	1~3mmの砂粒含 む	やや軟質	内外面にスス付着
-11	SD01	弥生式土器	-	4.4	-	底部 外/ハケ 内/へら削り	外/にぶい 橙色 内/淡黄色	1~2mmの砂粒含 む	やや軟質	内外面にスス付着
9-1	SD02	弥生式土器 甕	19.6	-	-	口縁部 内外面ナデ 頸部下 外/ナデ 内/へら削り	淡黄褐色	1~3mmの砂粒混 入	良好	口縁部上段に擬凹線 外面にスス付着
-2	SD02	弥生式土器 甕	24.2	-	-	口縁部 内外面ナデ 頸部下 外/ハケ 内/へら削り	淡黄褐色	1~3mmの砂粒混 入	やや軟質	口縁部上段に凹線
-3	SD02	弥生式土器 高坏	17.0	-	-	内外面ナデ	暗黄褐色	0.5~1mmの砂粒 含む	やや軟質	口縁部上段に擬凹線
-4	SD02	弥生式土器	-	12.3	-	外/ハケ 内/調整不明	黄灰色	1~3mmの砂粒混 入	やや軟質	
-5	SD02	弥生式土器 低脚坏	-	-	-	調整不明	外/淡黄褐色 内/淡黄褐色	1mm程度の砂粒少 し含む	軟質	
-6	SD02	須恵器 甕	10.7	-	-	内外面回転ナデ	外/暗青灰色 内/青灰色	密	良好	
-7	SD02	須恵器 坏	-	9.8	-	外/回転ナデ 内/ナデ 底部/回転糸切	青灰色	密	良好	
-8	SD02	土師質土器 坏	-	10.8	-	内外面回転ナデ 底部/回転糸切?	淡橙色	密	やや軟質	
-9	SD02	磁器	-	5.2	-	内面施釉 外面露胎/回転へら	釉/淡青白色 露胎/灰白色	黒色粒子を含む	良好	削り出し高台 内面見込に蛇ノ目軸ハギ

挿図番号	出土地点	器種	法 量 (cm)			形態・手法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
			口 径	底 径	器 高					
9-10	SD02	陶器 播鉢	28.0	—	—	内外面回転ナデ	外/暗青灰色 内/黒褐色	1mm以下の砂粒含む	良好	内面に播溝 口縁端部を内側に折り畳む
13-1	SD03	弥生式土器	—	7.8	—	外/ハケ 内/粗いヘラ磨き	外/にぶい 暗黄褐色 内/黄褐色	1~3mmの砂粒多量に混入	良好	
-2	SD03	土師質土器 杯	11.4	8.0	3.7	内外面ナデ	外/淡黄褐色 内/淡赤褐色	密	やや軟質	
-3	SD04	須恵器 蓋	—	—	—	外/回転ヘラ切りナデ 内/回転ナデ 指頭圧痕	青灰色	密	やや軟質	
-4	SD04	須恵器 蓋	13.5	—	—	内外面回転ナデ	青灰色	密	良好	外面に1段の稜 口唇部内面に1条の沈線
17-1	SK10	弥生式土器 甕	15.5	—	—	口縁部 内外面ナデ 頸部下 外/ヘラ磨き ハケ 内/ヘラ磨き ヘラ削り	黄褐色土	1mm未満の砂粒を少量含む	良好	口縁部上段に2条の擬凹線 外面にスス附着
-2	SX08	須恵器 甕	11.0	2.4	12.0	外/回転ナデ 回転ヘラ	青灰色	密	良好	頸部に波状文・沈線 体部に刺突文・沈線
-3	SX08	須恵器 甕	—	5.2	—	外/回転ナデ 回転ヘラ 内/回転ナデ	外/暗青灰色 内/黒灰色	1~2mmの砂粒含む	良好	体部内面に粘土の繫目痕 残る
19-2	SE04	陶器 香炉蓋?	3.5	—	2.6	外面施釉 内面露胎/ナデ	頂部 暗緑色 黄緑色 体部 外/黄白色 内/黄褐色	密	良好	体部中央に窓状の孔を穿つ 貫入る
21-1	SD06	土師質土器 皿	10.0	7.6	2.0	内外面回転ナデ 底部/回転糸切	外/黄褐色 内/橙色	密	良好	
-2	SD06	土師質土器	—	5.4	—	内外面回転ナデ 底部/回転糸切	淡黄褐色	密	良好	
-3	SD06	弥生式土器 高杯	—	16.1	—	外/ナデ 内/ナデ ヘラ削り	外/暗黄褐色 内/黄褐色	0.5~2mmの砂粒含む	良好	
-4	SD06	弥生式土器	—	6.8	—	外/ヘラ磨き 内/ナデ 指頭圧痕	外/灰褐色 赤褐色 内/黄褐色	密	良好	
-5	SD06	弥生式土器 甕	—	—	—	口縁部 内外面ナデ 頸部下 外/ナデ 指頭圧痕 内/ヘラ削り	黄褐色	密	やや軟質	
-6	SD06	弥生式土器 甕	—	—	—	口縁部 内外面ナデ 頸部下 外/ナデ 内/ヘラ削り	橙色	1~2mmの砂粒少し含む	やや軟質	口縁部上段に3条の擬凹線
-7	SD06	弥生式土器	—	—	—	口縁部 内外面ナデ	外/やや暗い 黄灰色 内/黄灰色	1mm未満の砂粒を含む	良好	口縁部上段に2条の擬凹線
23-1	SD15	陶器 碗	10.6	—	—	内外面施釉	外/にぶい 黄色 内/黄色	密	良好	外面に染付 貫入る 京焼風陶器
-2	SD15	青磁	12.1	—	—	外面施釉 内面露胎/回転ナデ	外/乳緑色 内/灰白色	密 黒色粒子を少し含む	良好	
-3	SD15	弥生式土器	—	7.0	—	外/ヘラ磨き ナデ 内/指頭圧痕	外/にぶい 褐色 内/黒褐色	1~2mmの砂粒少し含む	良好	外面にスス附着
-4	SD15	陶器 播鉢	—	—	—	口縁部 内外面回転ナデ 頸部下 外/回転ナデ 回転ヘラ	暗赤褐色	1~2mmの砂粒少し含む	良好	内面に播溝を造る
-5	SD15	土師質土器	—	6.2	—	内外面回転ナデ 底部/回転糸切	外/黄褐色 内/にぶい 黄褐色	1~2mmの砂粒少し含む	良好	

挿図番号	出土地点	器 種	法 量 (cm)			形態・手法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
			口 径	底 径	器 高					
23- 7	SD 1 6	染付	-	-	-	外面施釉 内面露胎/回転ヘラ	外/灰白色 内/白色	密	良好	外面に染付 高台壘付露胎
- 8	SD 1 6	染付 碗	-	-	-	内外面施釉	乳白色	密	良好	外面に染付
- 9	SD 1 6	陶器 御器手碗	10.0	-	-	内外面施釉	乳黄色	密	良好	貫入入る 17c 後~18c 前頃 京焼風陶器
-10	SD 1 6	陶器 碗	-	4.4	-	内外面施釉 底部露胎/回転ヘラ	釉/黄白色 露胎/赤褐色	密	良好	内面見込に蛇ノ目軸ハ ギ・砂目積み 内面に染付 削り出し高台 唐津系
-11	SD 1 6	土師質土器 皿	8.5	6.0	2.0	内外面回転ナデ 底部/回転糸切	橙色	1 mm未満の砂粒を 少し含む	良好	17 ~ 18c 頃
-12	SD 1 6	陶器 播鉢	-	11.0	-	外面回転ナデ 底部/ナデ 回転ヘラ?	外/灰赤色 赤褐色 内/にぶい 赤褐色	密	良好	内面に播溝
-13	SD 1 6	弥生式土器 甕	19.6	-	-	口縁部 内外面ナデ	黄褐色	密	良好	口縁部上段に2条の擬凹線
-14	SD 1 6	弥生式土器 甕	25.1	-	-	口縁部 内外面ナデ	暗橙褐色	1 mm程度の砂粒を 含む	良好	口縁部上段に2条の凹線
-15	SD 1 6	弥生式土器 甕	14.2	-	-	口縁部 内外面ナデ	外/暗橙褐色 内/暗赤褐色	密	良好	口縁部上段に3条の凹線
-16	SD 1 6	弥生式土器 高坏	-	-	-	端部 内外面ナデ 脚部 外/ナデ 内/ヘラ削り	外/黄褐色 赤褐色 内/淡黄褐色	1 mm程度の砂粒を 含む	やや軟質	
28- 3	SK 2 8	陶器	-	-	-	内外面施釉	暗緑色	密	良好	端部が外反
- 4	SK 2 8	土師質土器	-	7.0	-	調整不明	赤褐色	密	やや軟質	
30- 1	SE 0 6	陶器 御器手碗	11.2	-	-	内外面施釉	外/にぶい 黄褐色 内/にぶい 黄褐色	密	良好	貫入が入る京焼風陶器
- 2	SE 0 6	染付 碗	-	4.8	-	内外面施釉	淡青白色	密	良好	高台壘付砂付着外面に染 付
- 3	SE 0 6	青磁 皿	13.2	-	-	内外面施釉 底部露胎	淡青緑色	密	良好	内面見込蛇ノ目軸ハ ギ 内面に染付
- 4	SE 0 6	弥生式土器	-	6.3	-	外/調整不明 内/ヘラ削り	外/淡赤褐色 内/黄褐色	1 mm程度の砂粒を 含む	やや軟質	
33- 1	SD 1 2	弥生式土器	-	6.2	-	外/ヘラ磨き 内/ナデ	淡褐色	2 ~ 3 mmの砂粒少 し含む	やや軟質	
- 2	SD 1 2	弥生式土器	-	5.8	-	外/ナデ 内/ヘラ削り	外/褐色 内/淡黄褐色	1 ~ 2 mmの砂粒少 し含む	良好	
- 3	SD 1 2	弥生式土器	-	-	-	口縁部 内外面ナデ	外/淡黄褐色 内/黄褐色	1 mm程度の砂粒少 し含む	良好	口縁部上段に1条の凹線
- 4	SD 1 2	陶器	-	4.8	-	内外面施釉 底部露胎/ヘラ削り	釉/にぶい 深緑色 露胎/灰褐色	0.5 mm程度の黒色 粒子含む	良好	削り出し高台 貫入が入る
- 5	SD 1 2	陶器 碗	-	4.6	-	内外面施釉 底部露胎/ヘラ削り	釉/にぶい 緑色 露胎/灰褐色	密	良好	胎土目積み 貫入が入る 三日月高台

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
33-6	SD12	陶器 播鉢	—	9.5	—	内外面露胎 外/回転ナデ 回転ヘラ	露胎/橙色	密	良好	内面に播溝 内面にスス付着
-7	SD12	染付 皿	—	6.2	—	内外面施釉 高台壘付露胎	淡青白色	密	良好	内面見込に「壽」等を染付
-8	SD12	土師質土器	—	—	—	内外面回転ナデ 底部/回転糸切	にぶい橙色	密	良好	
35-1	SK31	弥生式土器 甕	20.8	—	—	口縁部 内外面ナデ	外/黄褐色 内/黄橙色	1mm未満の砂粒を 含む	良好	口縁部上段に3条の凹線
-2	SK31	土師質土器	—	—	—	内外面回転ナデ	橙色	密	良好	
-3	SD10	土師質土器 皿	6.2	4.3	1.7	内外面回転ナデ 底部/回転糸切	橙色	密	やや軟質	
36-1	SD11	陶胎染付 碗	10.2	—	—	内外面施釉	淡緑灰色	密	良好	外面に染付 貫入が入る
-2	SD11	陶器 鉢	21.4	—	—	内外面施釉 外面露胎/回転ナデ	暗赤褐色	密	良好	口縁部を外側に折り曲げ て造る
-3	SD11	土師質土器 皿	—	5.6	—	内外面回転ナデ 底部/調整不明	外/黄褐色 内/淡橙色	密	やや軟質	17～18c頃
-4	SD11	土師質土器 皿	10.2	7.0	2.3	内外面回転ナデ 底部/調整不明	黄橙色	密	やや軟質	
-5	SD11	弥生式土器 鉢	15.7	—	—	内外面ナデ	外/黄褐色 内/淡黄褐色	1mm未満の砂粒を 含む	良好	口縁部上段に2条の凹線 体部外面に刺突文
-6	SD11	弥生式土器 甕	21.6	—	—	口縁部 内外面ナデ	外/黄褐色 内/赤褐色	1mm程度の砂粒を 含む	やや軟質	口縁部上段に3条の擬凹線 口縁部外面にスス付着
-7	SD11	弥生式土器	—	6.2	—	外/ハケ・ナデ 指頭圧痕 内/ハケ	暗黄褐色	1mm未満の砂粒を 含む	やや軟質	
-8	SD11	弥生式土器	—	—	—	外/ヘラ磨き 内/ヘラ削り 指頭圧痕	外/黄褐色 内/暗褐色	1～2mmの砂粒含 む	良好	
-9	SD18	磁器	—	3.8	—	内外面施釉 底部露胎/回転ヘラ	灰白色	密	良好	削り出し高台 砂目積み
-10	SD18	弥生式土器	—	—	—	内外面ナデ	暗黄褐色	密	やや軟質	口縁部上段に擬凹線
-11	SD18	弥生式土器	—	—	—	内外面ナデ	外/にぶい 黄褐色 内/黄褐色	1mm未満の砂粒を 含む	やや軟質	口縁部上段に凹線
38-1	SD07	陶器 碗	—	4.9	—	内外面施釉 底部露胎/回転ナデ 回転ヘラ 回転糸切	釉/淡黄色 露胎/ 暗茶褐色	密	良好	内面見込に砂付着 三日月高台
-2	SD07	土師質土器	—	6.2	—	外/回転ナデ 内/調整不明 底部/回転糸切	黄褐色	1mm程度の砂粒を 少し含む	やや軟質	
-3	SD07	弥生式土器 甕	12.5	—	—	口縁部 ナデ 頸部下 外/ナデ 内/ヘラ削り	淡黄褐色	1mm程度の砂粒を 少し含む	やや軟質	頸部下に波状文 頸部に接合痕
-4	SD07	弥生式土器 甕	15.4	—	—	口縁部 ナデ	淡黄褐色	1mm程度の砂粒を 少し含む	やや軟質	外面にスス付着

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
38-5	SD07	弥生式土器	-	4.6	-	外/ヘラ磨き 内/指頭圧痕	外/淡黄褐色 内/黒褐色	1mm未満の砂粒を 少し含む	やや軟質	外面にスス付着
-6	SD07	弥生式土器	-	7.2	-	外/ナデ 内/ヘラ削り ナデ?	外/暗褐色 内/黄褐色	1mm以下の砂粒を 少し含む	やや軟質	
-7	SD07	弥生式土器	-	-	-	外/ヘラ磨き 内/ヘラ削り ナデ?	外/にぶい 黄褐色 内/赤味のある 黄褐色	1mm程度の砂粒を やや多く含む	やや軟質	外面にスス付着
-8	SD07	弥生式土器	-	-	-	口縁部 内外面ナデ	にぶい赤褐色	1mm程度の砂粒を 少し含む	良好	外面を赤彩 口縁部上段に2条の擬凹線
-9	SD07	弥生式土器	-	-	-	口縁部 内外面ナデ	暗褐色	1mm以下の砂粒を 少し含む	やや軟質	口縁部上段に2条の擬凹線
-10	SD07	弥生式土器 甕	-	-	-	口縁部 調整不明	淡黄褐色	1mm以下の砂粒を 多く含む	やや軟質	口縁部上段に3条の擬凹線 頸部外面に貼付刻目突帯文
39-1	SK39	染付 碗	8.6	-	-	内外面施釉	灰白色	密	良好	外面に染付・上絵・コン ニャク印版
40-1	SD20	白磁 碗	-	4.2	-	内外面施釉 底部露胎/回転ヘラ	釉/白色 露胎/灰褐色	密	良好	削り出し高台 内面見込蛇ノ目軸ハギ 外面にヘラ記号
-2	SD20	陶器	-	8.8	-	外面施釉 内面露胎/回転ナデ	釉/暗茶色 露胎/青灰色	密	良好	底部に灰付着 内面に青海波状文 唐津系
-3	SD20	陶器 皿	13.4	3.2	3.0	内外面施釉 底部露胎/回転ナデ 回転ヘラ	釉/乳青緑色 露胎/灰褐色	密	良好	砂目積み 内面見込に溶結痕 削り出し高台 絵唐津
-4	SD20	土師質土器	-	-	-	内外面回転ナデ 底部/回転糸切	淡黄褐色	密	良好	
-5	SD20	土師質土器	-	-	-	内外面回転ナデ 底部/ナデ	赤褐色	密	やや軟質	
-6	SD20	弥生式土器	-	-	-	口縁部 内外面ナデ	外/淡黄褐色 内/淡黄褐色	密	やや軟質	口縁部上段に3条の擬凹線
-7	SD20	弥生式土器 甕	19.7	-	-	口縁部 内外面ナデ 頸部下 外/ハケ 内/調整不明	外/黄褐色 内/黄褐色	1mm未満の砂粒を 少し含む	良好	口縁部上段に2条の擬凹線 口縁部にスス付着
-8	SD20	弥生式土器 甕	20.5	-	-	口縁部 内外面ナデ 頸部下 内外面ハケ	外/にぶい 橙色 内/橙色	密	やや軟質	口縁部上段に3条の擬凹線 頸部下に粘土の繫目痕
-9	SD20	弥生式土器 高坏	13.8	7.0	5.3	口縁部 外/ハケ 脚部 内/ナデ 外/ナデ 内/ヘラ削り	外/暗赤褐色 内/淡黄褐色	1mm程度の砂粒を 少し含む	やや軟質	脚部外面にヘラ状工具痕 外面を赤彩
-10	SD20	弥生式土器 高坏	-	9.8	-	脚部 外/調整不明 内/ヘラ削り?	外/橙色 内/にぶい 橙色	密	良好	
-11	SD20	弥生式土器	-	-	-	外/ヘラ磨き 内/調整不明	灰白色	1~2mmの砂粒含 む	やや軟質	外面にスス付着
42-1	SD13	弥生式土器 甕	13.0	-	-	口縁部 内外面ナデ 頸部下 外/ハケ 内/ハケ ヘラ削り	淡黄褐色	1mm以下の砂粒を 少し含む	良好	外面にスス付着 体部外面に列点文 口縁部上段に3条の凹線
-2	SD13	弥生式土器 甕	19.4	-	-	口縁部 内外面ナデ 頸部下 外/ナデ 内/調整不明	淡黄褐色	1mm程度の砂粒を 少し含む	やや軟質	口縁部上段に2条の擬凹線
-3	SD13	弥生式土器 甕	22.0	-	-	口縁部 内外面ナデ 頸部下 外/ハケ 内/調整不明	黄褐色	1mm程度の砂粒を 少し含む	良好	口縁部上段に刻目文・3 条の擬凹線 頸部に貼付突帯

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
42-4	SD13	弥生式土器 甕	15.8	-	-	口縁部 内外面ナデ 頸部下 外/ナデ 内/調整不明	淡黄褐色	密	良好	口縁部上段に3条の擬凹線
-5	SD13	弥生式土器 直口壺	9.4	-	-	口縁部 内外面ナデ 頸部下 外/ナデ 内/調整不明	淡黄褐色	密	良好	口縁部上段に3条の擬凹線 外面にスス附着
-6	SD13	弥生式土器 甕	19.2	-	-	口縁部 内外面ナデ 頸部下 内外面ハケ	外/灰黄褐色 内/黄褐色	1mm未満の砂粒を 少し含む	良好	口縁部上段に刻目文・4 条の擬凹線 頸部外面に貼付突帯 内外面にスス附着 頸部下に粘土の整目
-7	SD13	弥生式土器 高坏	17.7	-	-	口縁部 内外面ナデ 体部 内外面ヘラ磨き	淡黄褐色	密	良好	口縁部上段に刻目文・2条 の擬凹線 口縁部外面に4条の擬凹線 内外面にスス附着 松本IV-2
-8	SD13	弥生式土器 甕	-	-	-	口縁部 外/ハケ 内/ナデ	褐色	1mm程度の砂粒を 少し含む	良好	口縁部上段に刻目文・2 条の擬凹線
-9	SD13	弥生式土器 甕	-	-	-	口縁部 内外面ナデ 頸部下 外/調整不明 内/ヘラ削り	にぶい 黄褐色	1mm未満の砂粒を 少し含む	良好	口縁部上段に4条の擬凹線
-10	SD13	弥生式土器	-	4.2	-	外/ヘラ磨き 内/ヘラ削り	外/黄灰色 内/黒褐色	1~2mmの砂粒含 む	良好	外面にスス附着
-11	SD13	弥生式土器	-	5.0	-	外/ヘラ磨き 内/ヘラ削り 指頭圧痕	淡黄褐色	2~3mmの砂粒含 む	良好	内面にスス附着
-12	SD13	弥生式土器	-	5.6	-	外/調整不明 内/指頭圧痕	外/暗黄褐色 内/黄褐色	1mm程度の砂粒を 少し含む	やや軟質	
-13	SD13	弥生式土器	-	5.6	-	内外面ナデ	外/赤味が かった淡黄 褐色 内/淡黒褐色	1mm程度の砂粒を 少し含む	やや軟質	
-14	SD13	弥生式土器	-	7.4	-	外/ヘラ磨き 内/調整不明	外/黒褐色 内/黄褐色	1mm程度の砂粒を 少し含む	良好	外面にスス附着
-15	SD13	弥生式土器	-	8.0	-	外/ヘラ磨き 内/ヘラ削り	外/暗灰褐色 内/淡黄褐色	0.5~2mmの砂粒 含む	良好	
-16	SD13	弥生式土器	-	9.0	-	外/ヘラ磨き 内/ナデ	外/暗黄褐色 内/淡赤褐色	1mm程度の砂粒を 少し含む	良好	底部に粘土塊
-17	SD13	弥生式土器	-	9.9	-	内外面ナデ	外/黒褐色 内/淡黄褐色	1mm程度の砂粒を 多く含む	良好	口縁部上段に2条の擬凹線
47-1	SX06	弥生式土器 甕	15.8	-	-	内外面ナデ	外/暗黄褐色 内/淡褐色	1mm程度の砂粒を 少し含む	良好	口縁部上段に2条の擬凹線
-2	SX06	弥生式土器	-	-	-	内外面ナデ	淡褐色	1mm未満の砂粒を 少し含む	良好	口縁部上段に刻目文・2条 の擬凹線
-3	SX06	弥生式土器 甕	-	-	-	内外面ナデ	外/淡褐色 内/黒褐色	密	良好	口縁部上段に4条の擬凹 線
-4	SX06	弥生式土器 高坏	-	-	-	外/ナデ 内/ヘラ削り	外/褐色 内/赤味が かった褐色	1mm以下の砂粒を 少し含む	良好	脚部外面に擬凹線
-6	SX07	弥生式土器 甕	-	-	-	外/ナデ 内/調整不明	外/淡褐色 内/暗黄褐色	1~2mmの砂粒含 む	やや軟質	外面に刺突文・凹線
51-1	SK42	弥生式土器 甕	20.9	-	-	口縁部 内外面ナデ 頸部下 外/ハケ 内/ナデ	黄灰色	1mm未満の砂粒を 少し含む	良好	外面にスス附着 頸部に粘土の整目 口縁部上段に2条の擬凹線
-2	SK42	弥生式土器 甕	16.4	-	-	内外面ナデ	外/淡褐色 内/黄褐色	1~2mmの砂粒含 む	良好	体部外面に刺突文 口縁部上段に3条の擬凹線

挿図番号	出土地点	器種	法 量 (cm)			形態・手法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
			口 径	底 径	器 高					
51- 3	SK42	弥生式土器 高環	-	12.1	-	端部 内外面ナデ 脚部 外/調整不明 内/ヘラ削り	黄橙色	1~2mmの砂粒含む	良好	体部外面に刺突文 口縁部上段に3条の擬凹線
- 4	SK42	土師質土器	-	-	-	内外面回転ナデ 底部 回転糸切	橙色	密	良好	
- 5	SK42	陶器 火鉢?	16.8	-	-	外面施釉 内面露胎/回転ナデ ナデ	釉/乳緑色 淡黄色 露胎/黄橙色 赤褐色	密	良好	口縁部内面に緊目が残る 淡黄色釉に貫入する 体部に把手がつく 銅釉がかかる 外面に成形時の工具痕
- 6	SK42	土師質土器	-	3.8	-	内外面ナデ 底部 調整不明	外/黒褐色 内/暗赤褐色	密	良好	外面にスス付着 内面に灰付着
- 7	SK42	弥生式土器	-	6.2	-	外/ヘラ磨き 内/ヘラ削り 指頭圧痕	外/淡黄褐色 内/暗黄褐色	1~2mmの砂粒含む	良好	
- 8	SK09	土師質土器	-	-	-	内外面回転ナデ	淡橙色	密	良好	
- 9	SK12	弥生式土器 甕	-	-	-	内外面ナデ	淡黄褐色	1mm程度の砂粒を 含む	やや軟質	口縁部上段に2条の擬凹線
-10	SB02	弥生式土器 甕	-	-	-	口縁部 外/ナデ 内/調整不明	外/暗褐色 内/淡黄褐色	1mm未満の砂粒を含む	やや軟質	口縁部上段に3条の擬凹線
-11	SB02	弥生式土器	-	-	-	口縁部 内外面ナデ	外/暗黄褐色 内/赤褐色	1~2mmの砂粒を含む	良好	口縁部上段に3条の擬凹線 口縁部にスス付着
-12	SB02	土師質土器	-	-	-	内外面回転ナデ	淡黄褐色	密	やや軟質	
-13	SK20	磁器 皿	12.0	-	-	内外面施釉	灰色	密	良好	中国製 16c
53- 1	SE05	陶器 鉢	-	9.6	-	内外面露胎/ナデ	暗赤褐色	1mm以下の砂粒を 少し含む	良好	高台を造る
- 2	SE05	陶器	-	12.6	-	内外面施釉 外/ナデ 内/ヘラ削り後ナデ? 底部 丁寧なヘラ削り	外/暗赤褐色 内/赤褐色	1mm以下の黒色粒 子を少し含む	良好	
- 3	SE05	陶器	-	17.1	-	内外面露胎/ナデ 底部 調整不明	外/暗灰褐色 内/暗赤褐色	密	良好	底部に灰付着
- 4	SE05	陶器 焙烙	-	-	-	外面露胎/ナデ ヘラ削り 内面露胎/ナデ 底部 調整不明	外/黒褐色 内/橙色	密	やや軟質	外面にスス付着
- 5	SE05	磁器	11.7	4.7	3.5	内外面施釉 外面露胎/ナデ ヘラ削り	釉/白色 露胎/淡褐色	黒色粒子を少し含 む	良好	削り出し高台 内面見込蛇ノ目袖ハギ 内面に染付
- 6	SE05	土師質土器 皿	10.6	-	-	内外面回転ナデ 底部 回転糸切?	橙色	密	良好	
- 7	SE05	土師質土器 環	-	-	-	内外面ナデ	淡黄褐色	1mm以下の砂粒を 少し含む	やや軟質	
- 8	SE05	弥生式土器 甕	-	10.3	-	内外面ナデ	淡灰褐色	1mm程度の砂粒を 含む	やや軟質	口縁部上段に4条の擬凹線
- 9	SE05	弥生式土器 甕	-	-	-	内外面ナデ	淡黄褐色	1mm以下の砂粒を 少し含む	やや軟質	口縁部上段に擬凹線
57- 2	SK16	陶器 播鉢	-	-	-	口縁部施釉 内外面露胎/回転ナデ	釉/暗茶褐色 露胎/ やや暗い 茶褐色	密	良好	内面に播溝

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
57-3	SE07	弥生式土器 高坏	-	10.6	-	外/ナデ 内/ヘラ削り	黄褐色	1~3mmの砂粒含む	やや軟質	内面に1条の工具痕 透かしあり 松本IV-2
60-1	SS01	染付 皿	13.0	4.7	3.7	内外面施釉 高台量付露胎	淡青白色	密	良好	内面見込蛇ノ目軸ハギ 内面に染付
-2	SD31	染付 皿	-	4.0	-	内外面施釉	白色	密	良好	外面に染付 高台見込に「大明年製」? と染付
61-1	SK17	土師質土器 皿	6.8	5.0	1.6	内外面回転ナデ 底部/回転糸切	外/淡橙色 内/淡橙白色	密	やや軟質	
-2	SK17	土師質土器 皿	-	-	-	内外面回転ナデ	外/暗橙色 内/淡橙色	密	やや軟質	
-3	SK17	白磁	-	4.3	-	内外面施釉 底部露胎/回転ヘラ	釉/白色 露胎/ 淡橙白色	密	良好	削り出し高台 内面見込蛇ノ目軸ハギ 外面に1条の沈線
-4	SK07	陶器	-	4.9	-	外面露胎/回転ナデ 内面施釉 底部/回転糸切の後 ヘラ削り	釉/暗緑色 露胎/赤褐色	密	良好	砂目積み 三日月高台 高台と体部の界線不明確
-5	SK07	陶器鉢	-	-	-	内外面施釉 口縁端部露胎	釉/黄緑色 乳黄色 露胎/ 暗赤褐色	密	良好	口縁部が玉縁状
62-1	遺構外	陶器鉢	-	9.1	-	内外面施釉 底部露胎	釉/暗緑色 露胎/黄灰色 黄褐色	黒色粒子を含む	良好	削り出し高台 胎土目積み?
-2	遺構外	陶器 播鉢	27.0	-	-	内外面施釉	外/暗赤褐色 内/暗茶褐色	密	良好	内面に播溝
-3	遺構外	陶器鉢	36.6	-	-	内外面施釉後ハケ 外面露胎/回転ナデ	釉/暗緑色 淡黄色 露胎/ 暗茶褐色	密	良好	ハケ目が鋭利 唐津系
-4	遺構外	陶胎染付 碗	-	4.9	-	内外面施釉	淡青灰色	黒色粒子を含む	良好	外面に染付 貫入が入る 高台見込を深く削る
-5	遺構外	陶胎染付 碗	-	4.8	-	内外面施釉	淡緑色	密	良好	外面に染付 貫入が入る 高台見込を深く削る 高台量付鉄釉
-6	遺構外	陶胎染付 碗	-	5.0	-	内外面施釉 高台量付露胎	明灰色	密	良好	外面に染付 貫入が入る
-7	遺構外	白磁	-	4.8	-	内外面施釉 底部露胎/回転ナデ 回転ヘラ	釉/淡青白色 露胎/ 淡黄灰色	密	良好	内面見込蛇ノ目軸ハギ
-8	遺構外	青磁 皿	21.5	-	-	内外面施釉	外/淡緑白色 内/乳緑色	密	良好	内面に染付
-9	遺構外	青磁 皿	-	7.6	-	内外面施釉 高台量付露胎	淡青緑色	密	良好	内面に染付
-10	遺構外	青磁 碗	-	4.0	-	内外面施釉	淡緑色	密	良好	高台量付砂付着 内外面に貫入する 削り出し高台
-11	遺構外	染付 碗	-	4.6	-	内外面施釉 高台量付露胎	淡青白色	密	良好	外面に染付 高台見込を深く造る
-12	遺構外	染付 皿	-	5.8	-	内外面施釉	白色	密	良好	内面見込に染付 高台見込を深く造る
-13	遺構外	染付 碗	11.4	-	-	内外面施釉	白色	密	良好	外面に染付 肥前系

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
62-14	遺構外	染付	—	6.3	—	内外面施釉	白色	密	良好	外面に染付 底部に回転ヘラ
-15	遺構外	染付碗	9.0	5.3	6.3	内外面施釉	淡青白色	密	良好	外面に染付 高台見込に「大明年製」 の略字
63-1	遺構外	弥生式土器甕	12.1	—	—	口縁部内外面ナデ 類部下 外/ハケ ヘラ磨き 内/ヘラ削り オサエ	外/黒褐色 内/暗褐色	1 mm以下の砂粒を 少し含む	やや軟質	口縁部上段に3条の擬凹線 体部外面に列点文 外面にスス付着
-2	遺構外	弥生式土器甕	11.2	—	—	口縁部内外面ナデ	外/黄褐色 内/黄褐色	密	良好	口縁部上段に2条の擬凹線 外面にスス付着
-3	遺構外	弥生式土器甕	13.1	—	—	口縁部内外面ナデ	淡黄褐色	密	良好	口縁部上段に2条の擬凹線 口縁部にスス付着
-4	遺構外	弥生式土器直口壺	11.8	—	—	口縁部内外面ナデ 類部下 外/ヘラ磨き 内/ヘラ削り	外/黄灰色 内/黄褐色	1 mm程度の砂粒を 少し含む	良好	口縁端部に2条の擬凹線
-5	遺構外	弥生式土器甕	19.2	—	—	口縁部内外面ナデ	淡黄褐色	密	良好	口縁部上段に3条の擬凹線 頸部に粘土の繫目痕
-6	遺構外	弥生式土器甕	17.8	—	—	口縁部内外面ナデ 類部下 外/ナデ 内/ヘラ削り	暗橙褐色	1 mm以下の砂粒を 少し含む	良好	口縁部上段に2条の擬凹線 内外面にスス付着
-7	遺構外	弥生式土器	—	5.4	—	外/ヘラ磨き ナデ 内/ヘラ磨き? 指頭圧痕	外/橙灰色 内/にぶい 黄褐色	1 mm程度の砂粒を 含む	良好	
-8	遺構外	弥生式土器	—	6.0	—	外/ヘラ磨き 内/指頭圧痕	外/暗黄褐色 内/暗褐色	1 mm未満の砂粒を 少し含む	良好	
-9	遺構外	弥生式土器	—	—	—	内外面ナデ	外/黄褐色 内/黄褐色	1 mm程度の砂粒を 少し含む	やや軟質	外面に4重同心円スラン プ文・擬凹線
-10	遺構外	弥生式土器	—	—	—	外/ヘラ磨き 内/調整不明	外/黒褐色 内/灰褐色	1～3 mmの砂粒多 く含む	良好	外面にスス付着
-11	遺構外	土製支脚	—	—	—	ヘラ磨き	淡橙色	1 mm程度の砂粒を 含む	やや軟質	
-12	遺構外	土師質土器	—	7.8	—	内外面回転ナデ 底部/回転系切	黄褐色	黒色粒子を含む	やや軟質	17～18c頃
-13	遺構外	陶器皿	6.4	2.4	3.5	内外面施釉 底部露胎/回転ヘラ	釉/乳橙色 露胎/ 淡黄褐色	密	良好	削り出し高台
-14	遺構外	陶器	9.8	4.1	2.9	内外面施釉/回転ナデ 高台壘付露胎 高台見込/回転ヘラ	灰白色	密	良好	三日月高台 高台見込を深く造る 蛇ノ目軸ハギ 赤色顔料付着
-15	遺構外	陶器皿	11.2	4.7	7.6	内外面施釉 高台壘付露胎	外/乳黄色 内/乳黄褐色	密	良好	内外面に貫入する 内面見込に灰付着 京焼風陶器 17c後～18c前
-16	遺構外	陶器碗	—	5.2	—	内面施釉 外面露胎/回転ナデ 底部/回転ヘラ	外/黄褐色 内/淡緑色	密	良好	砂目積み 高台見込を深く造る
-17	遺構外	陶器	11.9	4.3	3.4	内外面施釉 底部露胎/回転ヘラ	釉/暗乳緑色 露胎/暗褐色	密	良好	削り出し高台
64-1	遺構外	染付皿	15.2	10.2	3.3	内外面施釉 高台壘付露胎	灰白色	密	良好	内外面に染付 内面見込に五弁花文 肥前系 18c前

出土遺物観察表(その他の遺物)

挿図番号	出土地点	製品名	遺存状況	材質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	備考
9-11	SD02	銅製品 ローソク立て	脚部欠損	銅	5.9	3.7	0.3	両端部尖り気味 傘を付ける
-12	SD02	木製品 高杯脚部？	大部分 欠損	木	5.7	3.2	0.6	全体を円形状に加工 片面に円形状の縞り込み 一部炭化
-13	SD02	木製品	両端部欠損	木	9.3	2.5	0.9	片側端部を段状に加工
-14	SD02	木製品	一部欠損	木	8.3	3.7	0.9	片面に工具痕が明確に残る
10-1	SD02	木製品	一部欠損	木	81.2	3.8	3.6	片側端部炭化 一部工具痕が明確に残る
13-5	遺構外	木製品	一部欠損	木	5.3	4.3	2.6	
-6	遺構外	木製品	一部欠損	木	15.7	2.8	1.2	人形木製品
-7	遺構外	漆器 椀	一部欠損	木	口径不明	底径6.0	器高不明	
19-1	SE04	飾玉	一部欠損	ガラス	1.4	1.5	1.4	径3mmの穿孔 ガラス内に明黄色・明青色の染料を含む
23-6	SD15	煙管	大部分欠損	銅	5.9	1.0	0.9	古泉編年IV期(18c前頃)以降
24-1	SD16	古銭	一部欠損	銅	2.5	1.9	0.1	古寛永
27-1	SK28	石製未製品？	一部欠損	凝灰岩	27.6	30.6	10.8	延石未製品？ 裏面を平坦に加工 やや湾曲する
28-2	SK28	石製未製品？	一部欠損	凝灰岩	31.8	29.4	7.2	延石未製品？ 裏面を平坦に加工
-3	SK28	石製未製品？	一部欠損	凝灰岩	16.2	17.4	7.8	延石？ 裏面を平坦に加工
-1	SK28	石製未製品？	一部欠損	凝灰岩	22.8	22.0	9.0	延石？ 裏面を平坦に加工
-2	SK28	石製未製品？	一部欠損	凝灰岩	24.6	18.3	10.5	礎石？ 裏面を平坦に加工 片側端部に穿孔？
30-5	SE06	砥石	完形	頁岩	3.9	2.3	1.6	3面を播面として利用
38-11	SD07	鉄製品 釘？	完形	鉄	4.7	0.2	0.2	
42-18	SD13	砥石	完形	砂岩	4.3	3.2	1.7	3面を播面として利用
47-5	SX06	鉄製品 釘？	両端部欠損	鉄	6.1	0.7	0.7	角釘

挿図番号	出土地点	製品名	遺存状況	材質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	備考
47-7	SP01	木製品 櫃部材	一部欠損	木	18.1	3.4	1.3	片面に溝状の繰り込み
- 8	SP01	木製品 櫃部材	一部欠損	木	19.3	8.7	1.9	片面に溝状の繰り込み 外面に工具痕が明確に残る
53-11	SE05	木製品	一部欠損	木	10.9	3.9	2.2	片側端部にホゾを造る
57-1	SE03	竹製品	一部欠損	竹	16.2	4.5	2.7	節を抜いて空洞状にしている
64-2	遺構外	木製品	一部欠損	木	11.4	2.1	0.7	
- 3	遺構外	木製品	一部欠損	木	12.0	3.7	2.0	一部工具痕が明確に残る
- 4	遺構外	土製品	一部欠損	土	6.2	4.1	0.6	裏面に指紋が多数残る 素焼 土人形？
- 5	遺構外	土製品	一部欠損	土	5.7	4.1	1.0	表面に人間等の陽刻
- 6	遺構外	土製品	一部欠損	土	2.8	3.1	2.2	家形土製品 底面に穿孔
- 7	遺構外	磨製石斧	完形	安山岩質 凝灰岩	9.7	6.3	3.8	
65-1	遺構外	石臼 (下臼)	一部欠損	花崗斑岩	31.5	16.2	8.4	欠損部端部に穿孔
- 2	遺構外	石製未製品	一部欠損	砂岩	17.7	17.4	12.0	外面にスス付着

小山遺跡周辺の古環境

川崎地質株式会社

(担当者: 渡辺正巳)

はじめに

小山遺跡は島根県中部の出雲市小山地内に分布する弥生時代中期以降の複合遺跡であり、神戸川の三角州、あるいは自然堤防上に立地する。また周辺には矢野遺跡などの遺跡が分布する。

本報告は、小山遺跡周辺での古環境を復元する目的で出雲市教育委員会が川崎地質株式会社に委託して実施した、ボーリングおよび微化石分析調査報告書の概報である。

試料について

遺跡内の3地点(図1)でボーリングを実施し、分析試料を採取した。試料採取は粘土〜シルト層を対象として、基本的にシンウォールサンプラーにより採取した。シンウォールライナーからの試料の抜き取り、分割は試験室において行った。ボーリング柱状図の略図、分析試料の採取層準を図2〜4の花粉ダイアグラム左側に示す。

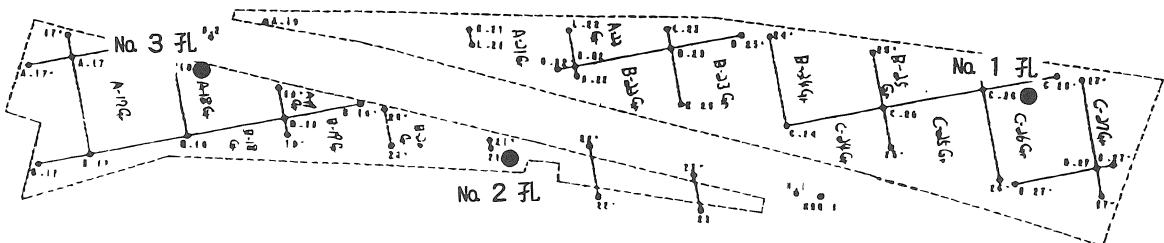
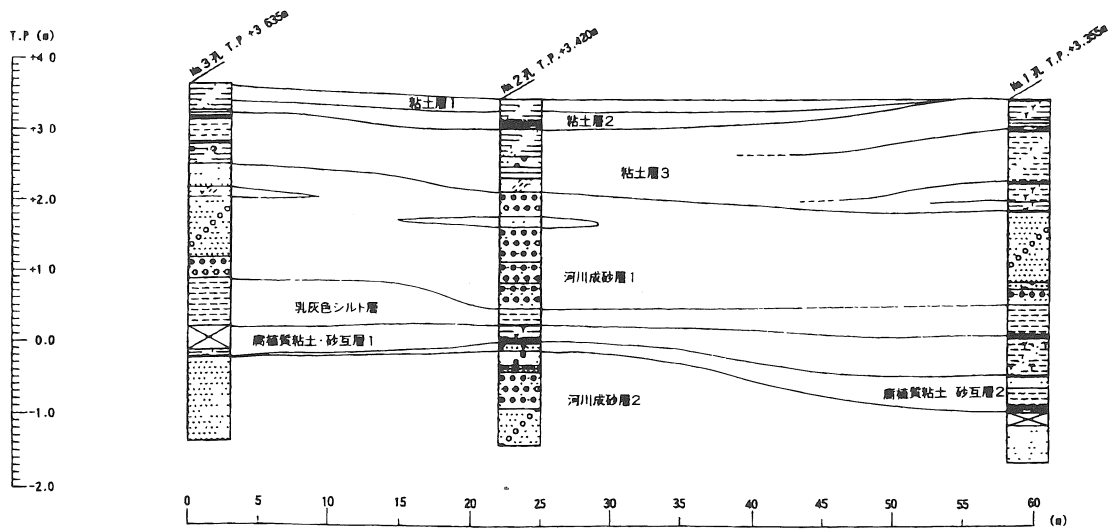


図1 ボーリング地点および推定断面図

分析方法および結果

(1) 分析方法

花粉分析処理を渡辺(1995a)、珪藻分析処理を渡辺(1995b)に従って実施した。花粉・珪

藻化石の顕微鏡観察は光学顕微鏡を使用し、通常 400 倍で、必要に応じ 600 倍あるいは 1000 倍を用いて行った。花粉分析では、原則的に木本花粉化石総数が 200 個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本花粉も同定した。珪藻分析では、原則的に珪藻化石総数が 200 個体以上になるまで同定を行った。しかし、一部の試料については、花粉化石あるいは珪藻化石の含有量が少なかったために、木本花粉化石総数あるいは珪藻化石総数で 200 個体を越えることができなかった。

(2) 分析結果

花粉分析結果を図 2～4 の花粉ダイアグラムに、珪藻分析結果を図 5～10 の珪藻ダイアグラム、およびの珪藻総合ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは、同定した木本花粉総数を基数にした百分率を各々の木本花粉、草本花粉について算出し、スペクトルで表した。珪藻ダイアグラムでは、同定総数を基数にした百分率を各々の種類について算出し、スペクトルで表した。珪藻総合ダイアグラムのうち左端の「生息域別グラフ」は、同定した全ての種類を対象に、それぞれの要因（生息域）毎に百分率で表したものである。その他の 4 つのグラフは、淡水種の珪藻についてそれぞれの要因毎に百分率で表したものである。

考 察

(1) 花粉分帯

花粉分析結果をもとに、花粉分帯を行った。以下では、花粉組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載する。また試料No.も下位から上位に向かって記した。

1) P-V 帯 (No. 1 孔 T5101、T5404、No. 2 孔 T2204、No. 3 孔 T4103)

アカガシ亜属、トチノキ属が高率で出現する。また、草本花粉はほとんど出現しない。

2) P-IV 帯 (No. 1 孔 T4103、No. 2 孔 T2305、T2307、No. 3 孔 T4106)

ハンノキ属が高率で特徴的に出現する。またクワ科-イラクサ科、トチノキ属も他の種類に比べ高い出現率を示す。また、草本花粉はほとんど出現しない。

3) P-III 帯 (No. 1 孔 T3109～T1905、No. 2 孔 T1108～T1214、No. 3 孔 T1103、T1109)

「化石種」のカリヤ属、フウ属が低率ではあるが安定して出現するほか、アカガシ亜属、コナラ亜属も 10～20% の出現率で安定して出現する。

No. 1 孔ではこの帯に相当する地層の層厚が厚く、分析試料も多いことから、さらに d～a 亜帯に細分できた。また、No. 1 孔での細分を基に No. 2、3 孔の P-III 帯をみた場合、いずれも a 亜帯に相当することが明らかである。

d 亜帯 (No. 1 孔 T3109)

ヤナギ属、トチノキ属が他の種類に比べ高い出現率を示す。

c 亜帯 (No. 1 孔 T3210～T3404)

スギ属、トチノキ属が他の種類に比べ高い出現率を示す。また草本花粉は種類数も検出数も下位の d 亜帯に比べ増加する。

b 亜帯 (No. 1 孔 T3501～T1801)

特徴的に出現する種類がない。草本花粉では、イネ科（40ミクロン未満）、ヨモギ属が高率を示す。

a 亜帯（No.1 孔 T1203 ~ T1317、No.2 孔 T1108 ~ T1214、No.3 孔 T1103、T1109）

マツ属（複維管束亜属）、スギ属が他の種類に比べ高い出現率を示す。草本花粉では、イネ科（40ミクロン未満）、イネ科（40ミクロン以上）、ヨモギ属が高率を示す。

4) P-II 帯（No.2 孔 T1307 ~ T1410、No.3 孔 T1205 ~ T1211）

マツ属（複維管束亜属）、スギ属が他の種類に比べ高い出現率を示すほか、アカガシ亜属、コナラ亜属も他の種類に比べやや高い出現率を示す。また草本花粉では、イネ科（40ミクロン以上）が高率を示す。

5) P-I 帯（No.2 孔 T1501、T1507、No.3 孔 T1301 ~ T1409）

マツ属（複維管束亜属）が高率を示す。また草本花粉では、イネ科（40ミクロン以上）が高率を示す。

(2) 珪藻分帯

各地点の珪藻分析結果をもとに、D-I ~ IVの珪藻帯を設定した。以下に各珪藻帯の特徴を示す。また珪藻帯の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載する。

1) D-IV 帯（No.1 孔 T5101 ~ T4103、No.2 孔 T2204 ~ T2307、No.3 孔 T4103、T4106）

淡水種が50 ~ 60%を占める。種構成では、汽水種の *Achinanthes brevipes*、淡水種の *Cocconeis placentula*、*Cymbella tumida*、*Synedra ulna* の出現率が高い傾向にある。

2) D-III 帯（No.1 孔 T3109 ~ T1215、No.2 孔 T1108 ~ T1214）

地点により淡水種の割合が異なり、No.1 孔では60 ~ 90%を占めるが、No.2 孔では50%程度の出現率である。

種構成では、汽水種の *Achinanthes brevipes* が卓越する傾向にあり、淡水種の *Cocconeis placentula*、*Cymbella tumida*、*Epithemia turgida*、*Synedra ulna* などの出現率もやや高い傾向にある。

No.1 孔ではこの帯に相当する地層の層厚が厚く、分析試料も多いことから、さらにc ~ a 亜帯に細分できた。

c 亜帯（T3109）

淡水・止水・底生種の *Gomphonema constrictum* の出現率が特に高い。

b 亜帯（T3210 ~ T1105）

汽水種の *Achinanthes brevipes*、淡水種の *Cocconeis placentula*、*Cymbella tumida*、*Epithemia* 属の諸種、*Synedra ulna* などの出現率が高い。

a 亜帯（T1215）

淡水種の *Cocconeis placentula*、*Cymbella tumida* の出現率が低く、淡水種の *Pinnularia* 属の出現率が特に高い。

3) D-II 帯（No.2 孔 T1307、T1410）

淡水種が 80 ～ 90 % を占め、淡水・底生種の *Pinnularia* 属が優占する。

4) D - I 帯 (No. 2 地点 T1501、T1507、No. 3 孔 T1409)

淡水種が 100 % 近くを占め、淡水・底生種の *Pinnularia* 属や *Stauroneis phoenicenteron* などが高率を示す。

(3) 花粉層序に基づく断面

堆積層序および花粉層序に基づき、地質断面図を作成した (図 1)。各層の概略を、以下に述べる。また堆積年代については、次節を参照されたい。

1) 粘土層 1

P - I 帯に相当する。調査区南側で層厚が厚い。古代以降の水田跡と考えられる。

2) 粘土層 2

P - II 帯に相当する。調査区中央部で層厚が厚い。古墳時代～奈良時代頃の水田跡と考えられる。

3) 粘土層 3

P - III 帯に相当する。調査区北側で層厚が厚い。弥生時代に河川 (河川跡) を埋めながら堆積した可能性がある。

4) 河川成砂層 1

調査区中央で層厚が厚い。斐伊川あるいは神戸川の沖積作用により堆積したと考えられる。

5) 乳灰色シルト層

調査区南側で層厚が厚いが、下限はほぼ平坦である。堆積後、河川成砂層 1 により上部を浸食されていると考えられる。既存のボーリング試料により、今回の調査地点の北西方向での分布が確認されている。三瓶山起源火山灰の二次堆積である可能性もあるが、「椀がけ方」では火山ガラスが検出されていない。

6) 腐植質粘土・砂互層 1

P - IV 帯に相当する。層厚は、調査区中央部がやや薄い。4850 年前頃に湿地で堆積したと考えられる。

7) 腐植質粘土・砂互層 2

P - V 帯に相当する。層厚は調査区北部で厚い。4850 年前頃に湿地で堆積したと考えられる。

8) 河川成砂層 2

調査区中央で層厚が厚い。斐伊川あるいは神戸川の沖積作用により堆積したと考えられる。

(4) 既知の結果との比較と堆積年代

中海・宍道湖地域の広域花粉帯は、大西ほか (1990)、大西 (1993) によりまとめられている。大西ほか (1990) のデータは宍道湖内で得られたものであり、周辺地域の平均的な花粉組成を表している。このため、出雲平野内の花粉組成とは異なる傾向を示す可能性もある。しかし、現在のところ対比可能なデータが公表されていないことから、この結果との比較を行う。

1) P-IV、V帯

クルミ属-サワグルミ属、ハンノキ属、トチノキ属が高率を示し、小山遺跡周辺での局地的な植生を反映している可能性が高い。しかし、アカガシ亜属、シイノキ属の出現率も安定することから、カシーシイ花粉帯に相当する。

また、No.1 孔 T4101 で 4800 ± 72 y. B. P. (I-18892) の年代値が得られていることから、P-IV、V帯は4800y. B. P. 頃の植生を表していると考えられる。

2) P-III帯

マツ属(複維管束亜属)、スギ属の出現率が他の種類に比べ高い。一方、上位のP-II帯に比べスギ属の出現率はやや低く、マツ属(複維管束亜属)の出現率が40%を越えることはほとんどない。このようなことから、イネ科花粉帯スギ亜帯に相当すると考えられる。また、イネ科花粉帯スギ亜帯は2450年～1300年前頃の植生を表していると考えられている。

3) P-II帯

スギ属の出現率が最も高い時期であり、イネ科花粉帯スギ亜帯に相当すると考えられる。

また、前述のようにイネ科花粉帯スギ亜帯は2450年～1300年前頃の植生を表していると考えられている。

4) P-I帯

マツ属(複維管束亜属)が卓越することから、イネ科花粉帯カシ・ナラ亜帯、あるいはマツ亜帯に対応すると考えられる。

また、イネ科花粉帯カシ・ナラ亜帯は1300～500年前頃の、マツ亜帯は500～70年前頃の植生を表していると考えられている。

(5) 古環境変遷

ここでは、花粉帯毎に、花粉分析結果、珪藻分析結果より遺跡周辺の古環境を推定する。

1) P-V帯期(4850年前頃以前)

斐伊川、神戸川の沖積作用により古宍道湾が埋まりつつあり、宍道湖と神門水海が形作られていった時期であると考えられる。調査地近辺は、古宍道湾の中央部(出雲平野)が埋まることにより形成されつつある神門水海に注ぐ河川の河口域であったと考えられる。人間による河川改修が始まるまでの神戸川は平野部で網状河川を形成していたと考えられる。さらに、丘陵部に水源を持つ中小河川が平野部で神戸川の網状河川に合流していた可能性は高い。調査地点を流れていた河川もこの網状河川の一つであったと考えられる。また汽水生珪藻が高率で出現することから、神門水海はまだ汽水湖であったと考えられる。

調査地内南部の一部はすでに陸化、あるいは水深の非常に浅い状況になり、ハンノキ類を主とする湿地林やアシなどの茂る湿原となっていた可能性がある。

また中国山地縁辺の谷沿いにはトチノキやサワグルミ、スギを主とする溪谷林が発達し、尾根筋にはコナラ類、ニヨウマツ類を要素とする二次林や、カシ類を主要素とする照葉樹林が分布していたと考えられる。

2) P-IV帯期 (4850 年前頃)

調査地周辺は、縮小を続ける神門水海に注ぐ小河川の河口域であったと考えられる。また汽水珪藻が高率で出現することから、神門水海はまだ汽水湖であったと考えられる。

調査地内全域が陸化、あるいは水深の非常に浅い状況になり、ハンノキ類を主とする湿地林やアシなどの茂る湿原が広がっていたと考えられる。

3) P-III帯 (2450 から 1300 年前頃)

P-IV帯期以降、斐伊川、神戸川あるいは上記の小河川の氾濫による砂層の堆積が続いたと考えられる。隣接する矢野遺跡や、小山遺跡が立地する微高地は、P-III帯期までに形成された可能性がある。

P-III帯期の珪藻組成では、海～汽水種が多産する。しかし、海～汽水種は淡水・浮遊種と正の相関関係を示す。また花粉組成ではフウ属やカリヤ属などの「化石種」が特徴的に認められる。これらのことから海～汽水種の珪藻、「化石種」の花粉は、いずれも後背の丘陵を形成する布志名層からの二次堆積である可能性が極めて高い。したがって、この時期には調査地周辺は淡水化していたと考えられる。

b 亜帯期に入ると、まずヨモギ属が高率となり、草原の広がりを予想させる。ついでイネ科 (40 ミクロン以上) の出現率が増加を初め、近くで稲作が開始されたと考えられる。稲作のために矢野、小山の集落ができたとすれば、このころから人が住み始め、両集落ができたと考えられる。また、a 亜帯期以降豊富な水を使った水田耕作が、調査地周辺で本格的に行われたと考えられる。山地縁辺にはコナラ類、ニヨウマツ類を要素とする二次林が、山地縁辺の谷沿いにはスギを主とする溪谷林が発達し、山地にはカシ類を主要素とする照葉樹林が分布していたと考えられる。またマツ属 (複維管束亜属) 花粉の一部は、浜山砂丘に分布したであろうクロマツに由来する可能性がある。

4) P-II帯期 (2450 ~ 1300 年前頃)

前時期に比べ神門水海が縮小し、網状河川は自然に流路を変え、あるいは人為的に用水路として整備されていったと考えられる。調査地内の小河川の跡は水の溜まる凹地 (湿地) となり、やがて水田となった。また、一部ではソバの栽培も行われた。中国山地、北山山地の様子は前時期とほとんど変化がなく、山地縁辺にはコナラ類、ニヨウマツ類を要素とする二次林が、山地縁辺の谷沿いにはスギを主とする溪谷林が発達し、山地にはカシ類を主要素とする照葉樹林が分布していたと考えられる。またマツ属 (複維管束亜属) 花粉の一部は、浜山砂丘に分布したであろうクロマツに由来する可能性がある。

5) P-I帯期 (1300 年前頃以降)

調査地周辺は明治から戦前に観られ、現在の記録に残るような田園地帯になったと考えられる。

今回の結果からは、この時期の神門水海の規模 (存在も含めて) を推測する由もない。今後同様な調査を継続して実施すれば、神門水海の消長も併せ、出雲平野の形成史がはっきりして行くであろう。

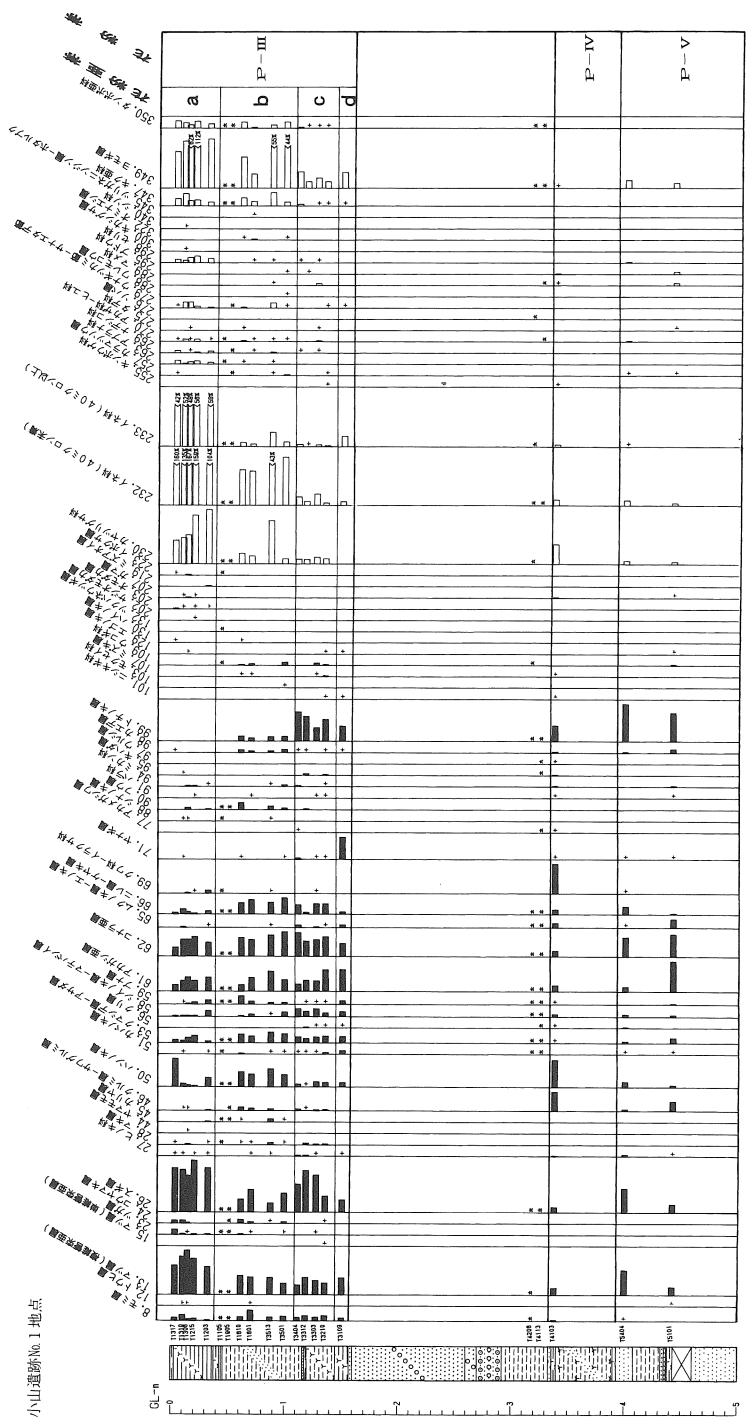
まとめ

小山遺跡におけるボーリング調査の結果、以下のことが明らかになった。

- (1) 花粉分析により、本地域の花粉化石群集をP-I～V帯の5花粉帯に分帯した。この分帯とボーリングコア観察に基づき、図1に示した地質断面図を作成した。
- (2) 珪藻分析結果から、本地域の珪藻帯化石群集をD-I～IVの4珪藻帯に分帯した。
- (3) 既知の分析結果との比較から、各花粉帯の示す時期を推定した。
- (4) 花粉分析結果、珪藻分析結果を基に、およそ4850年前から70年前頃までの調査地周辺での古環境変遷を推定した。特筆できる点は以下の事柄である。
 - ① 斐伊川、神戸川の沖積作用により、4800y. B. P. 頃には、調査地周辺では±0 m付近まで砂層が堆積し、湿地化していた。
 - ② 2450年前頃には、調査地近隣の矢野、小山の微高地が形成されていた。
 - ③ 今回の花粉帯のP-III帯b亜帯期に調査地近辺で稲作が始まり、矢野、小山の集落が営まれた可能性がある。
 - ④ P-III帯a亜帯期以降、調査地周辺で本格的に稲作が行われたと考えられる。
 - ⑤ 1300年前頃までに、調査地内を流れる小河川は湿地化し、水田として使用されるようになる。小河川は自然に流路を変えたか、人為により水路として整備された可能性がある。
- (5) 従来から出雲平野内で、様々な手法で地質学的調査が行われていた。今回の調査では、平野下の砂層中に挟まれる腐植質粘土層の年代測定や、花粉・珪藻分析による古環境推定など、出雲平野の形成史を考える上で新たな知見をいくつか提示することになった。今回行った手法による調査の重要性が指摘されながらも、従来ほとんど行われることがなかったが、今回の成果により、その重要性を再確認すると共に、出雲平野の形成史解明のために、今後積極的に調査が行われることを願うものである。

引用文献

- 大西郁夫・干場英樹・中谷紀子 (1990) 宍道湖湖底下完新統の花粉群. 島根大学地質学研究報告, 9, 117-127.
- 大西郁夫 (1993) 中海・宍道湖周辺地域における過去2000年間の花粉分帯と植生変化. 地質学論集, 39, 33-39.
- 渡辺正巳 (1995a) 花粉分析方法. 考古資料分析法, 84-85. ニュー・サイエンス社. 東京.
- 渡辺正巳 (1995b) 珪藻分析方法. 考古資料分析法, 86-87. ニュー・サイエンス社. 東京.



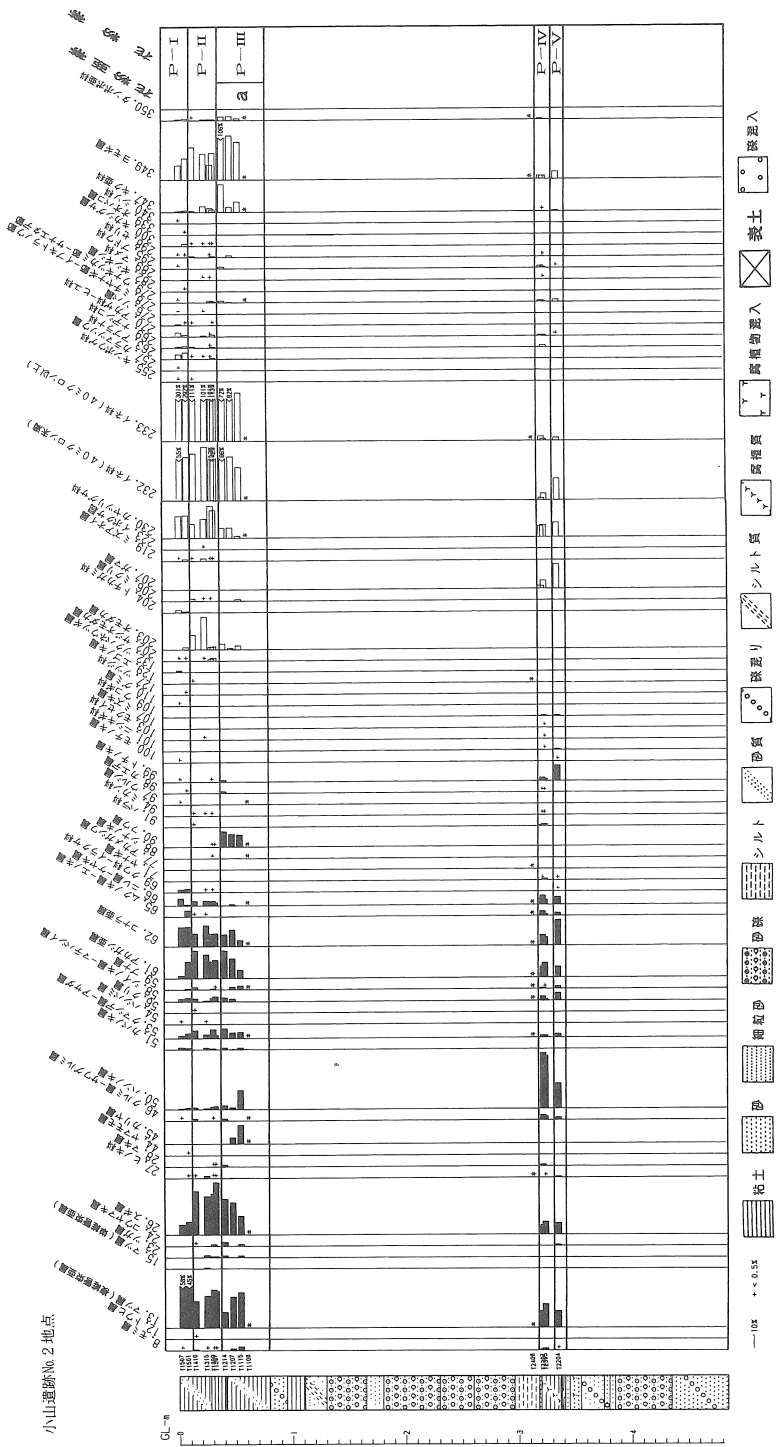


図3 No.2地点の花粉ダイアグラム

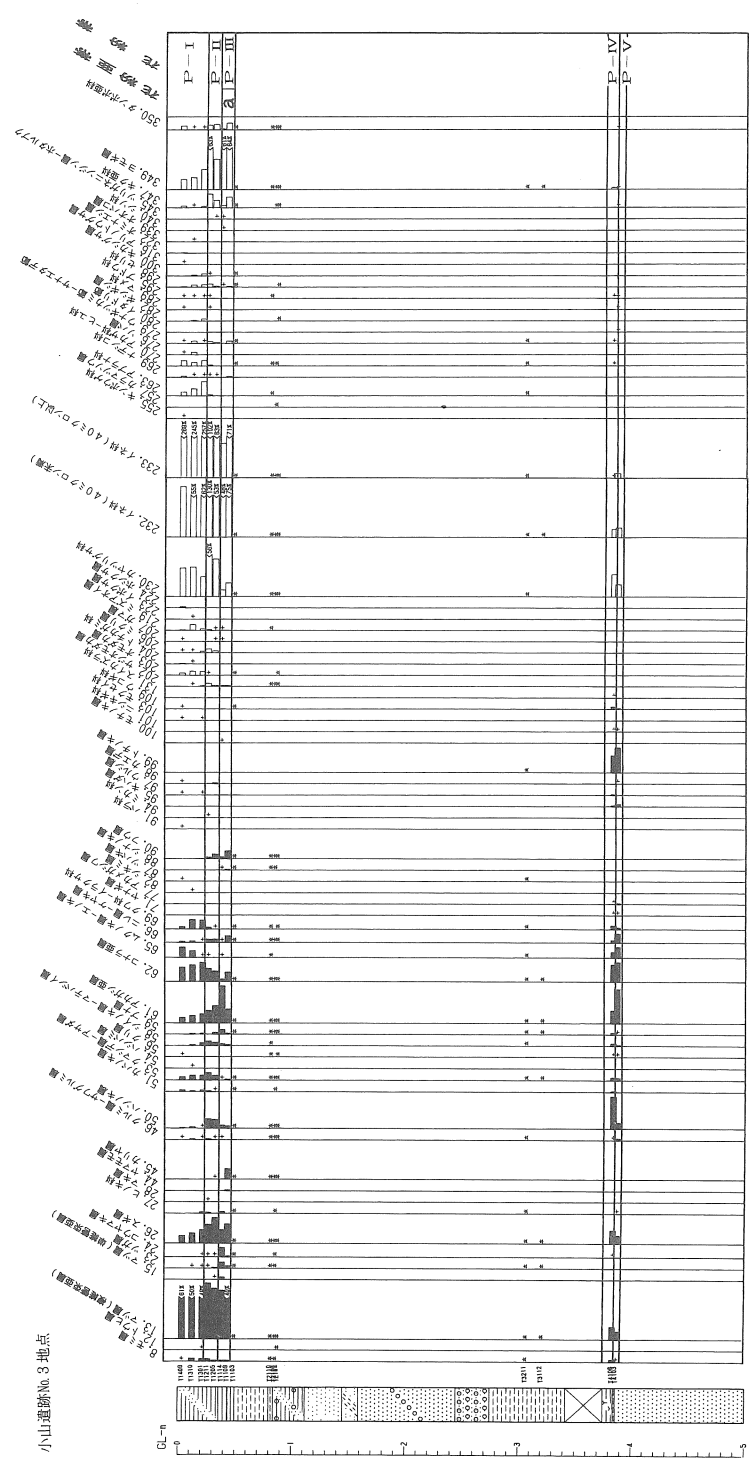


図 4 No. 3 地点の花粉ダイアグラム

小山遺跡No.2地点

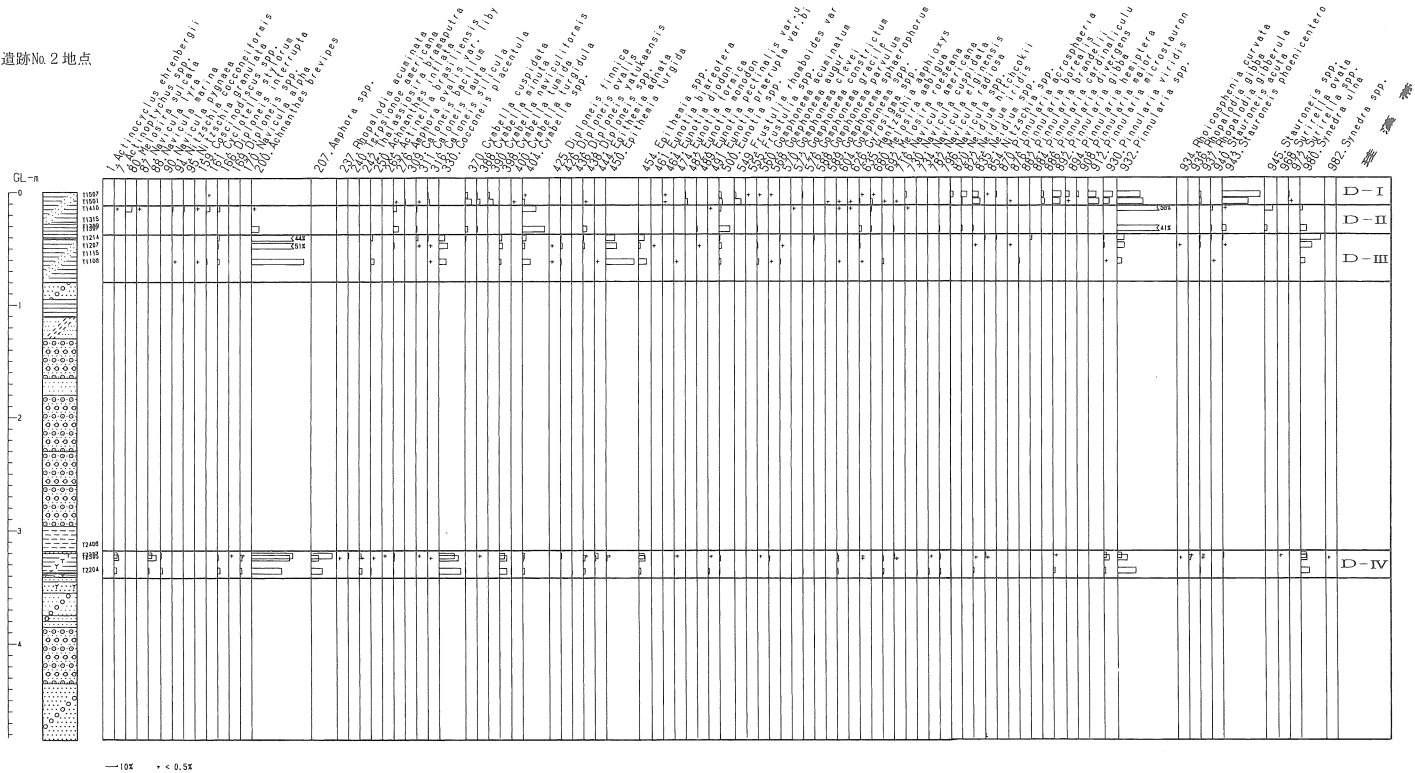


図7 No.3地点の珪藻ダイアグラム

小山遺跡No.2地点

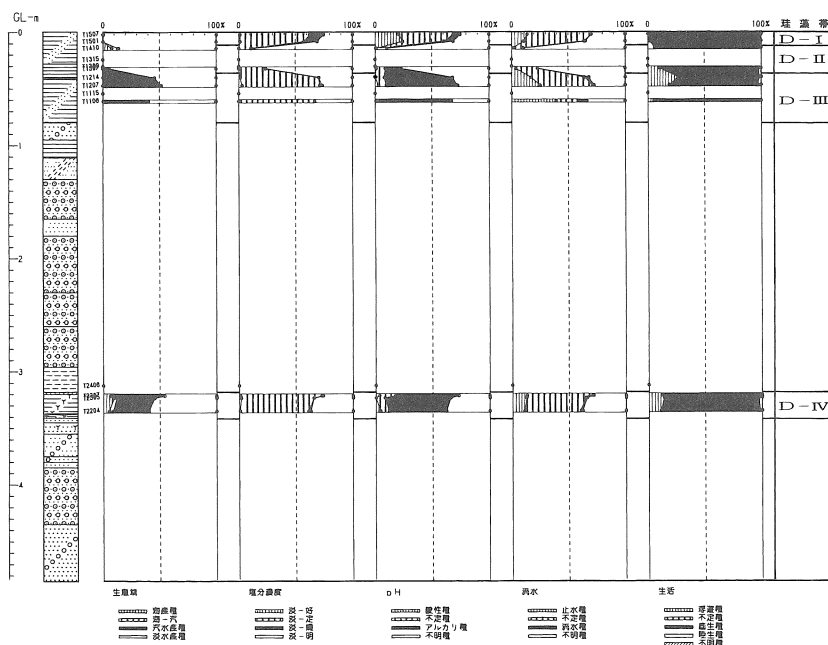


図8 No.1地点の珪藻総合ダイアグラム

小山遺跡No.3地点

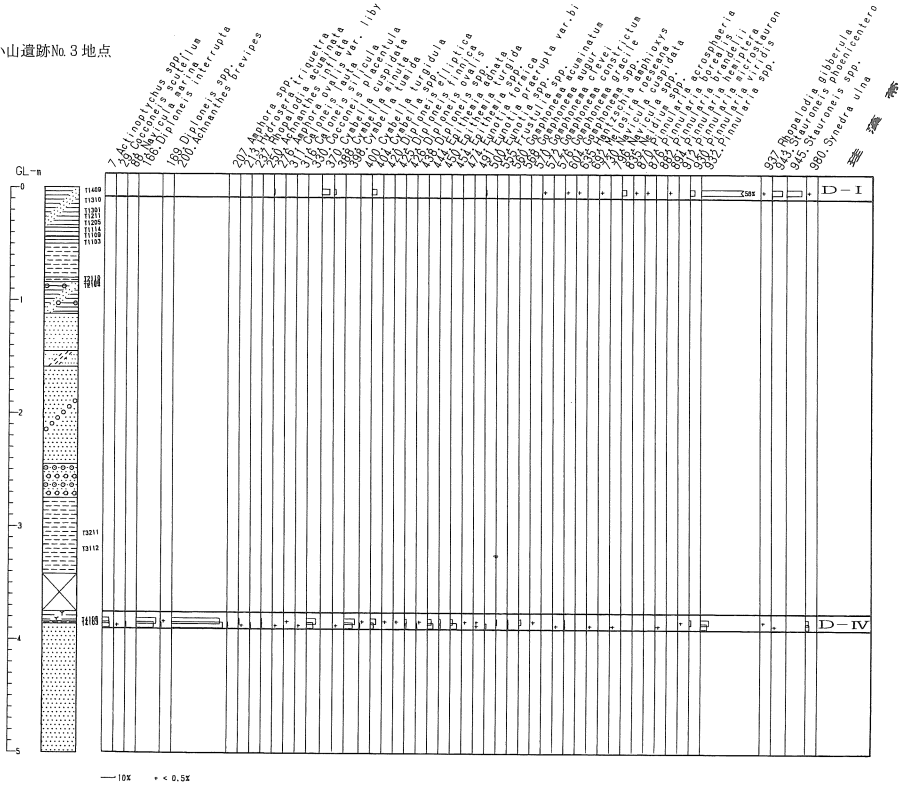


図9 No.2地点の珪藻総合ダイアグラム

小山遺跡No.3地点

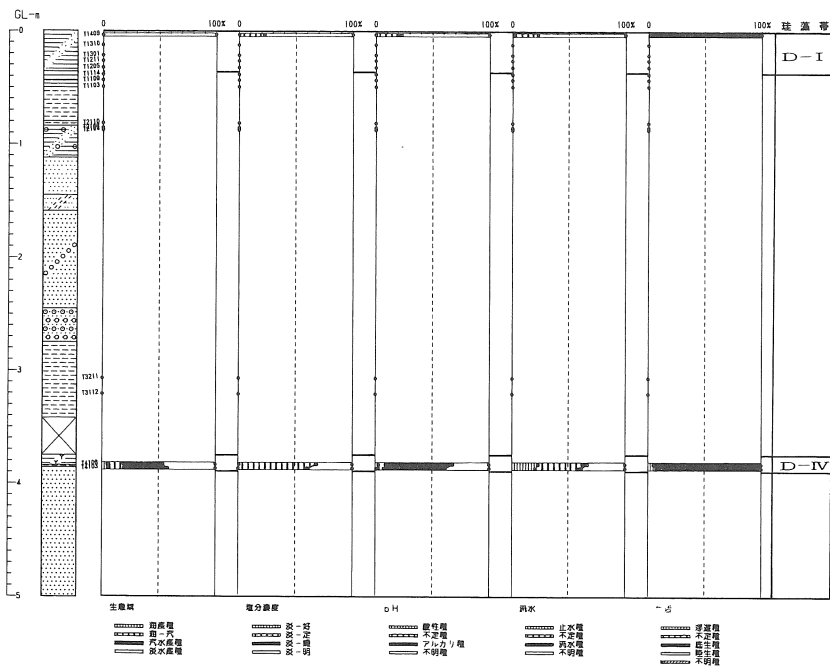


図10 No.3地点の珪藻総合ダイアグラム

小山遺跡周辺の古地理に関するコメント

(島根大学汽水域研究センター客員研究員)

中村唯史

平成8年度の小山遺跡発掘調査では、ボーリング試料の採取と、¹⁴C年代測定、花粉・珪藻分析が行われ、本報告書のP 77～P 90で述べられているように、出雲平野の古地理に関する貴重な資料が得られている。本章ではその結果を踏まえて、出雲平野の古地理と小山遺跡の立地について若干述べる。

1. 出雲平野の層序

出雲平野はおもに斐伊川と神戸川の三角州から構成される沖積平野で、地下には厚さ40～50 mに達する完新統（過去1万年に堆積した地層）が分布する。完新統は、上部が三角州堆積層の砂層からなり、下部が内湾堆積層の泥層からなる。

三角州堆積層は、平野東部の斐伊川下流域では花崗岩質の砂（いわゆるマサ土）を主体とし、平野西部の神戸川下流域では、三瓶火山の噴出物に由来する石英安山岩（デイサイト）質岩片を多量に含むことを特徴とする。この特徴によって、ある地点の地層を構成する土砂の供給河川を比較的容易に識別できる。

小山遺跡の地下に分布する砂層は、石英安山岩質の土砂からなることから、神戸川の堆積物で形成された地盤（以下、神戸川三角州地帯と呼ぶ）であると判断できる。

2. 小山遺跡の立地

神戸川三角州地帯には、小山遺跡の北西に位置する矢野遺跡をはじめ、天神遺跡、古志本郷遺跡などの集落遺跡が多くある。これらの遺跡の特徴として、多くの遺跡が弥生時代に始まり、当時の地表面（遺構面、生活面）が現地表から1 m程度までの比較的浅いところに存在することが挙げられる。

弥生時代の地表面の深度は、神戸川が山地から平野へ流れ出る地点に近い古志本郷遺跡と、そこから4 km近く北へ離れた矢野遺跡、その間にある天神遺跡のいずれでも浅いところにある。すなわち、少なくともこの範囲では、弥生時代の地表面の高度と勾配は、現在とほぼ同じだったということになる。

また、これらの遺跡で弥生時代の地表面を覆う堆積物は泥質堆積物を主体とすることが多く、厚い砂層が重なることはない。旧地表が堆積物にあまり覆われておらず、しかも泥質堆積物を主体とすることは、その地点が洪水の影響を受けにくい安定した場所だったことを示す可能性が高い。

斐伊川が山地から平野へ流れ出る地点に近い斐伊川鉄橋遺跡では、弥生時代の遺物包含層が現地表から7 m前後の深さにあることと対照的である。

3. 神戸川三角州の形成史

神戸川三角州は三瓶火山の噴出物に由来する石英安山岩質を圧倒的に多く含む砂礫からなる。現在の神戸川河道内の堆積物では花崗岩質の砂礫や三紀層に由来する岩片が多く、三瓶火山噴出物に由来する石英安山岩質岩片はそれほど多くない。神戸川の流域全体に対して、三瓶火山噴出物の分布域は狭い範囲であり、石英安山岩質岩片がそれほど多くないのは当然のことである。にも関わらず、神戸川三角州を構成する堆積物では石英安山岩質岩片が多いことは、神戸川三角州が大きく成長した時期には、三瓶火山の噴出物が圧倒的に多く供給される特殊な条件があったと考えられる。

1991年から1992年にかけての雲仙普賢岳の噴火活動に伴って土石流が多発し、下流域では地表面の埋没と三角州の急速な前進が生じたが、そのような現象は火砕流を伴う火山活動では一般的なものである。固結していない土砂状の火砕流堆積物は、侵食や崩壊に対して極めて不安定な状態にあり、土石流を伴うような洪水の原因となる。そのような現象が、三瓶火山の活動期にも生じた可能性が高い。

三瓶火山の完新世の活動期としては、第V期（4900～4500年前頃）と第VI期（3600年前頃）の2回が知られ、いずれの活動期にも、神戸川流域に火砕流がもたらされている。この時期に規模の大きな洪水が多発して、神戸川三角州が成長したと推定できる。

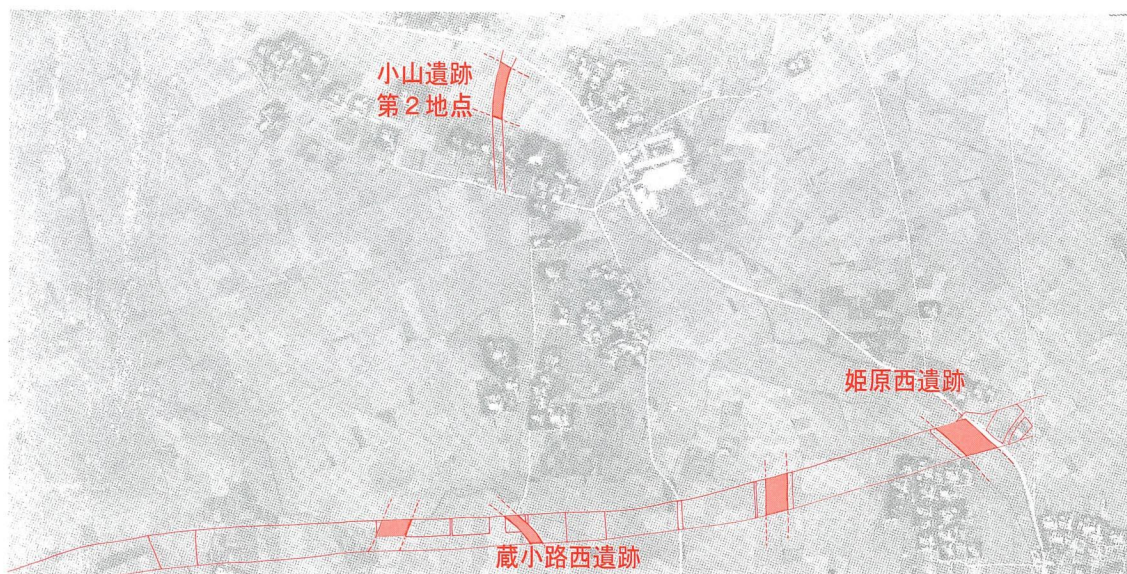
ボーリング調査では、河川成砂層が2層に区別でき、その間に腐植質粘土・砂層互層が挟まれていることが確認されている。腐植質粘土・砂層互層からは4800yr. B. P. の¹⁴C年代が得られていて、この年代値からは、下位の河川成砂層が三瓶第V期、上位の河川成砂層が三瓶第VI期の活動期に形成されたという推定が可能で、三角州の形成史を考えるうえで興味深い値である。ただし、小山遺跡の層序と、そこから得られた年代値が神戸川三角州を代表するというものではないので、全体の形成史を明らかにするためには、多くの地点で同様の調査を行う必要がある。

4. 神戸川の旧河道

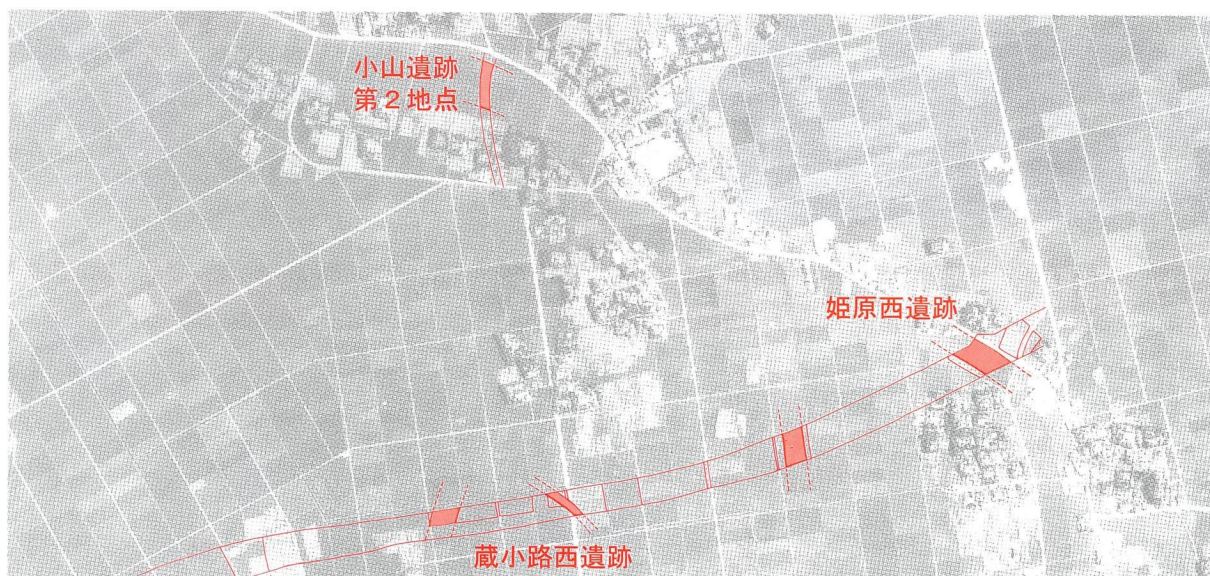
古代の出雲平野を検討する際に、弥生時代の神戸川が流れていた位置について話題になることがしばしばある。しかし、現時点では弥生時代の旧河道は明らかになっていない。

これまでに、出雲平野の幾つかの遺跡で「旧河道」が発見されているが、泥質堆積物に充填された小規模なものばかりである。現在の川床堆積物や、神戸河三角州を構成する堆積物が砂・礫を主体とすることからみて、弥生時代の河道堆積物も砂・礫を主体とするはずである。また、河川は側方へ移動しながら堆積物を残してゆくので、旧河道堆積物の分布する範囲は、実際の川幅より広がることが普通である。これらの点を満たし、神戸川が常時そこを流れていたと判断できる旧河道はまだ見つかっていない。

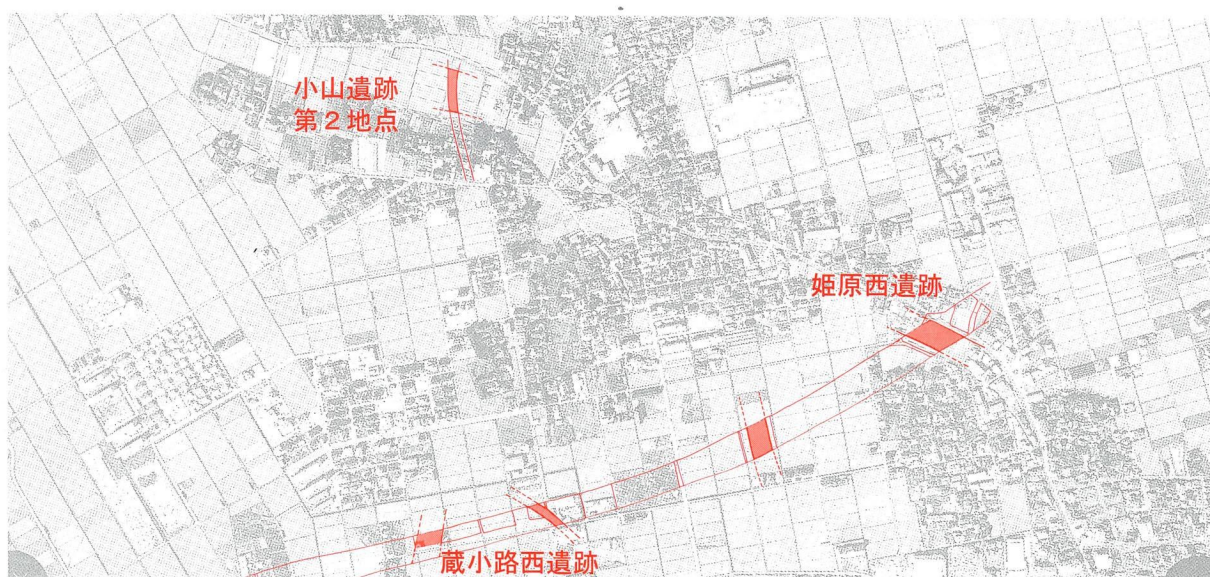
旧河道堆積物が発見されるまでは、旧河道を特定することは出来ないが、すでに述べたように、弥生時代以降の神戸川三角州地帯が安定した環境だったとすると、弥生時代以降に神戸川が大きく河道を変えるようなイベントがあった可能性が低いことになる。つまり、弥生時代の神戸川は現在と同じような位置を流れていた可能性が高いと思われる。



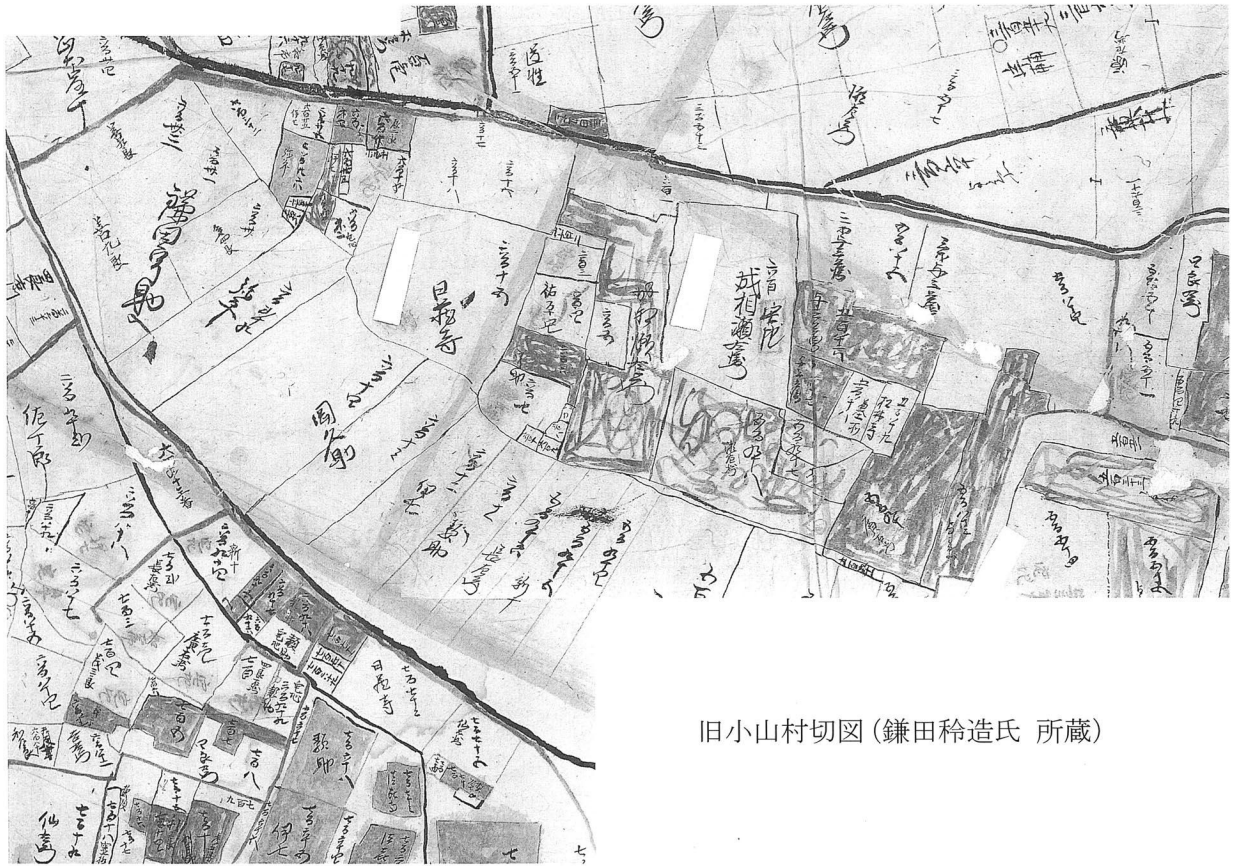
四絡地区米軍空撮写真(戦後まもなく)



四絡地区空撮写真(昭和38年頃)



四絡地区空撮写真(昭和53年頃)



旧小山村切図 (鎌田稔造氏 所蔵)



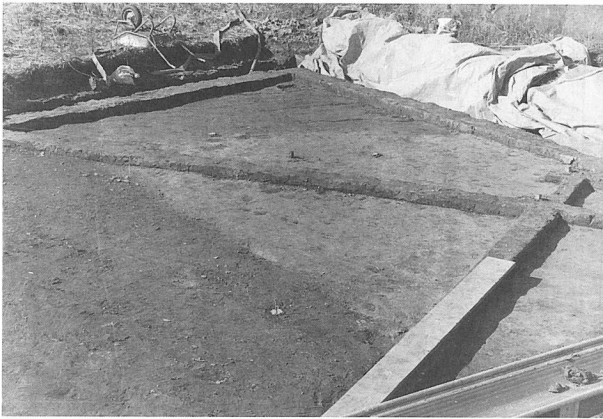
南側調査区



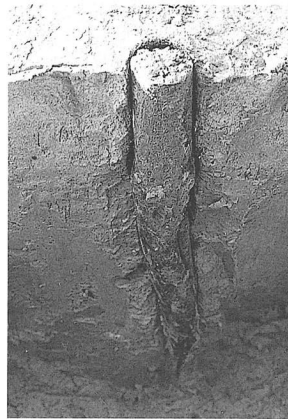
SD01 土層堆積状況



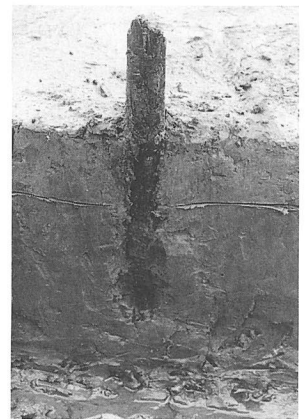
SD01 完掘状況



SD01・SD02・SD03 検出状況



北側杭断面



SD02 内杭断面



SD04 土層堆積状況



SD02 トレンチ内出土遺物



SD03 完掘状況



SD04 検出状況



SD04 完掘状況



SK10 土層堆積状況



SX08 遺物出土状況



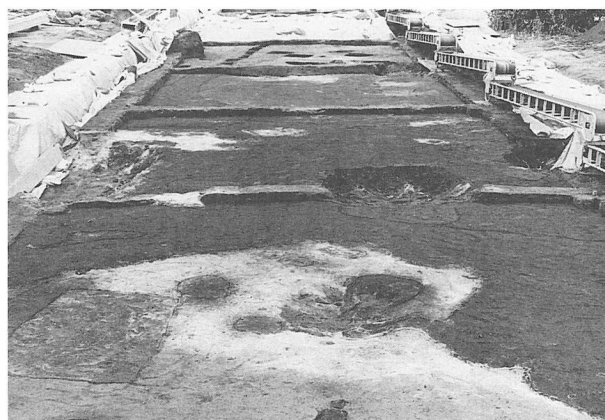
SE04 土層堆積状況



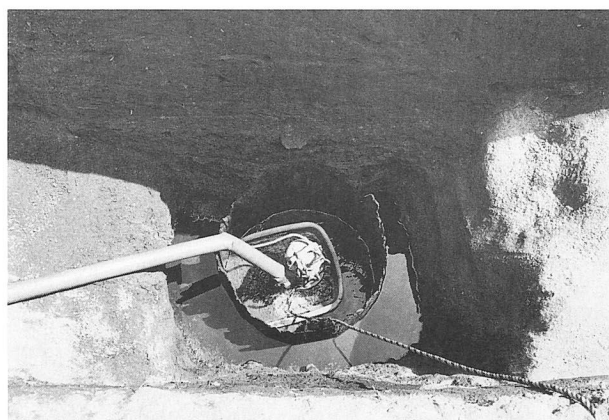
SE04 完掘状況



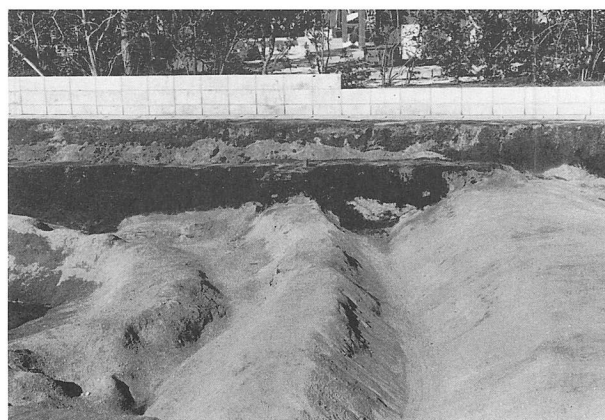
SD06・SD19・SE04 完掘状況



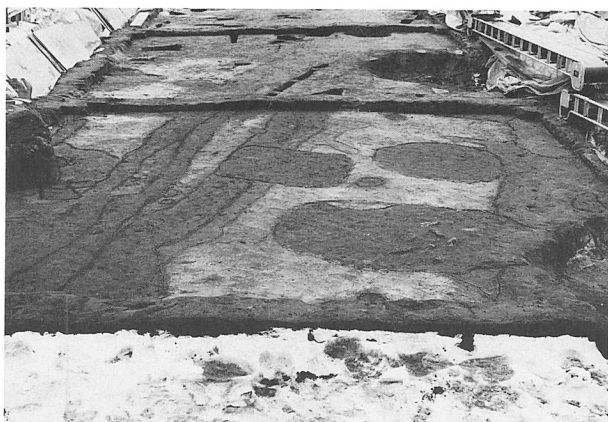
南側調査区遺構検出状況



SE01 井戸枠検出状況



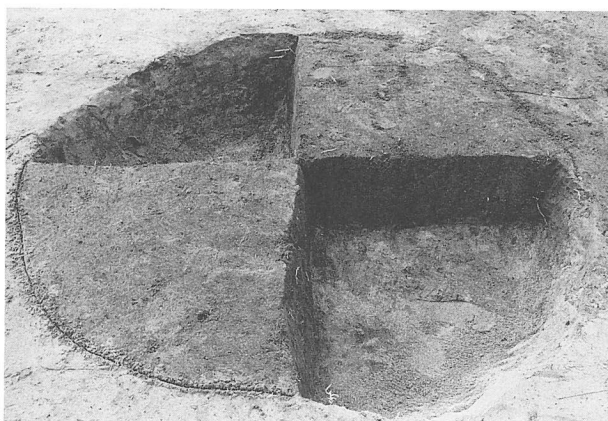
SD15・SD16 完掘状況



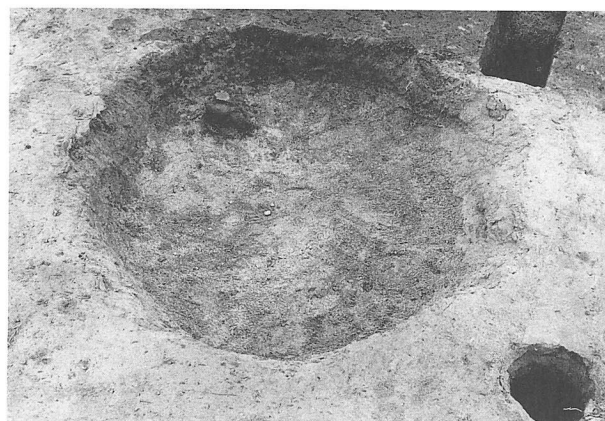
SK26・SK28 付近遺構検出状況



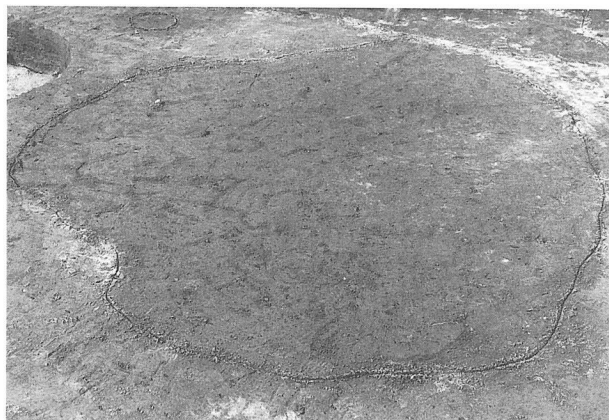
SK28 石製未製品検出状況



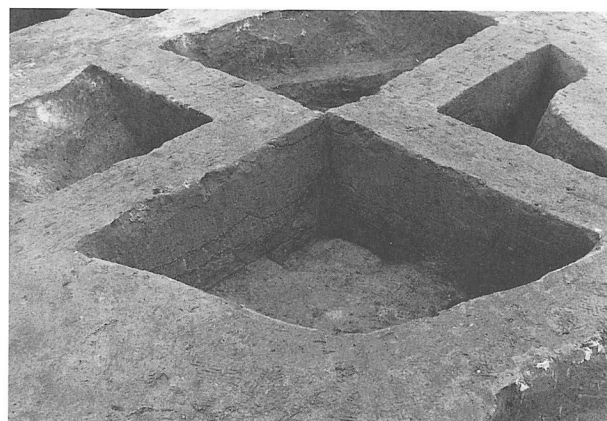
SK26 土層堆積状況



SK26 遺物出土状況



SD06 遺構検出状況



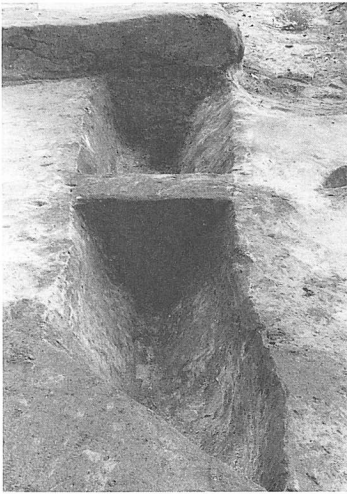
SE06 土層堆積状況



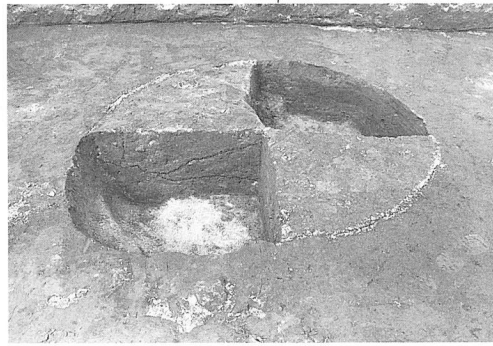
SE06 石検出状況



SE06 井戸枠・タガ検出状況



SD 1 2 土層堆積状況



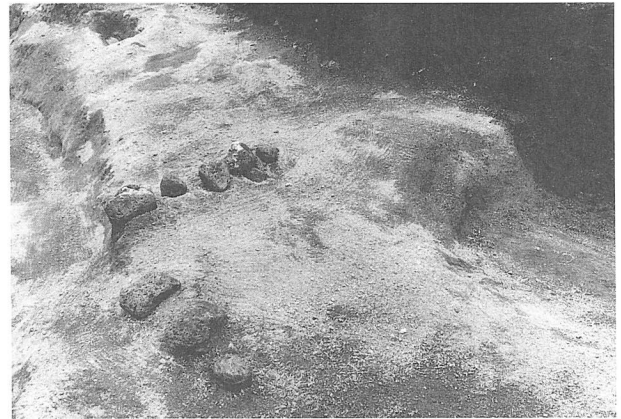
SK 3 4 土層堆積状況



SD10・SD11・SD18 土層堆積状況



SD 1 0・SD 1 1・SD 1 8 土層堆積状況



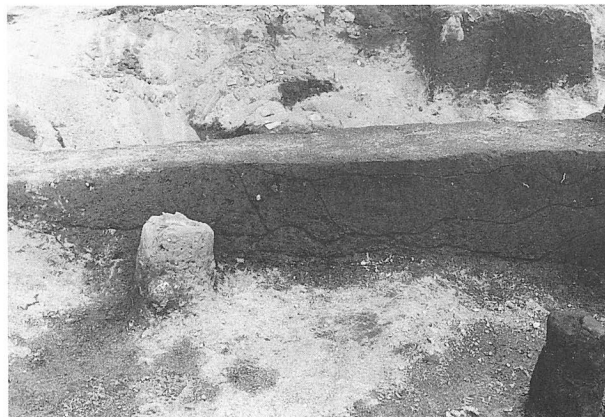
SD 0 7 石列検出状況



SD 0 7 土層堆積状況



SD 2 0 完掘状況



SD 1 3 土層堆積状況



SD 1 3 遺物出土状況



SX06 土層堆積状況



SX06 木材検出状況



SX07・SP01 完掘状況



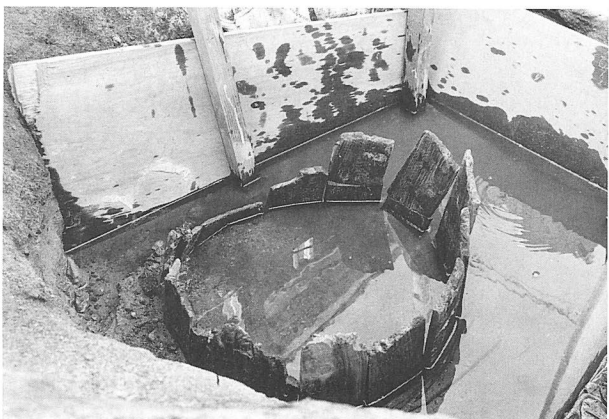
SP01 骨片出土状況



SD14 土層堆積状況



SK42・SD20 土層堆積状況



SE05 井戸枿検出状況



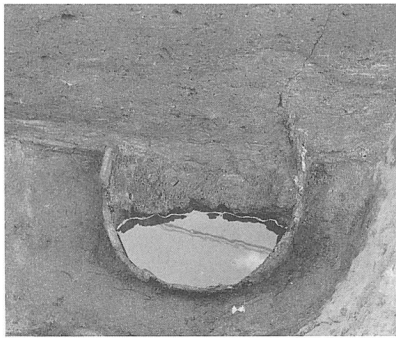
SE05 完掘状況



SE07 遺物出土状況



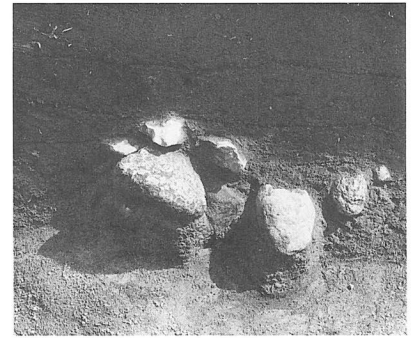
SE07 遺物出土状況



SE03 井戸枠検出状況



SD05・SD17 付近遺構検出状況



SS01 石検出状況



調査風景